
キススル？

ハヤブサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キススル？

【Nコード】

N7421Q

【作者名】

ハヤブサ

【あらすじ】

僕と不運な少女な物語。

舞台は、平成から大きく時代が流れた大変革期の帝聖時代。

親の都合で、施設などから引き取られた少女達と暮らしていたが、父が長期出張で一年、彼女らとハーレム生活を暮らすことになる！
？

親が出張スル？

帝聖17年5月。

この時代まで来ると、歴史が変わったと祖父さんは言った。

祖父さんの時代に一大改革が起きて、この世の中は混乱に陥れられた。

日本政府は崩壊し、凄まじい内紛状態だったときだったそうだ。子供は捨てられ、泥棒なども横行された酷い時代……。

その時代を阿安時代と言った。

しかし、ある政治家がまた、日本国を立て直したのだそう。

基礎から徹底して立て直し、税から学校までも見直した。

減税し、尚かつ、あらゆる企業をスポンサーとして用いて資金を増やした。

おかげで、国には捨てられた子供の保護施設が多く建てられ、存分に資金が使われる。

社会保障や教育、土木などにもだ。

その政治家は自らを帝聖と称して、首相の座にいる。

——恐らく、うすうす感じている人もいるであろう。

帝聖首相は、天皇一族の末裔である。

その人のおかげで、今は優々とスクールライフを送れる。

帝聖国立高校。僕の学校だ。

あ、自己紹介していなかったか。

僕は溝口 零^{レイ}。高校二年生だ。

ちなみにここの学校は帝聖首相が出た学校の跡地。

阿安時代に火事になって、全焼した。が、国の支援で復興した訳だ。

「あ、帰らなきゃ。」

僕は教室の時計を見上げて呟いた。

現在、高校の美術棟。

有名な芸術家の絵に見ほれていたのだった。

僕は美術棟から飛び出て、スニーカーに履き替えると、兄のお古である自転車に飛び乗った。

スタンドを蹴飛ばすと同時に、ペダルを漕ぐ。

帰路を颯爽と走り始めた。

なかなか趣のある平成時代に建てられたモダンな住居。

それが、僕らの住まいだ。

「ただいま。」僕は扉を開けると、

「お帰り、お兄ちゃん！」むぎゅっ。

いきなり抱きつかれた。

「ちよ、百合、退いて……。」僕が彼女の背中を叩きながら言った。

「あ、ごめん。」従姉妹の百合は僕から離れた。

彼女も、阿安時代に親に捨てられた。と本人は言っている。

そこを僕がたまたま通りかかって拾った。ということだ。

「あ、レイちゃん。お帰り。」

「ただいま、姉さん。」台所から出てきた雪姉さんに声を掛けた。

彼女は平成時代の不景気で、親が自殺。と本人から聞いている。

まあ、百合も雪姉も自身が言っているだけで本当かは分からない。

とにかく雪姉は施設に入った所、父が才能を見出し、秘書として

養子にしたようだ。

「お、零、帰っていたか。」「お帰りのさい、零。」

今に入ると、父とモカがくつろいでいた。

「ただいま、モカ、父さん。」

僕はバックを傍らに置いてソファアに座った。

父さん、溝口 俊介は政府の文部科学省の小児保護施設担当課の課長をやっている。

施設の管理をする課らしく、主に施設の視察や、里親の募集などをしている。

父さんはそのポストについた途端、張り切って、行き先がなかったモカを引き取ってきた。

仕事熱心この上なしだ。

母さんは父さんを手伝っている。今日は職場で書類整理らしい。夫なら、妻を手伝えよな……。

と、いきなり、父さんは唐突に立ち上がると、手を二度打った。集合の合図。

姉さんと百合が何事かと集まってくる。

「みんな、報告だ。」

父さんはいつになく神妙な顔つきで言った。

「この度、イギリスに出張することになった。」

「あ、そう。」僕は欠伸をしながら言った。

出張なら日常茶飯事である。この前、フランスに二週間、施設の見学に行っていた。

「期間は……。」父さんはそこで一瞬ためらった。

「一年だ。」

「は？」僕の口から声が漏れた。

「一年間、あっちの施設の仕組みを学習してくる。これは帝聖政府の大事な役目だ。」

父さんはそう言った。

「――じゃ、私達はどうすればいいのですか？」

モカは不安げな面影で尋ねた。

「ああ、零が何とかしてくれるだろう？」父さんは微笑んで言った。

「はあ？僕がみんなの世話をしろと？」僕はいらだちを抑えて言った。

「ん？気に食わないか？」

父さんは微笑んで僕の手にはポスツと何かを入れた。

僕は手の中を覗き込んだ。

小切手だ。かなりの額だ。

——この父親、賄賂で何とかしようとしてやがる。
しかし……振るには惜しい話だ。

「……分かった。仕方がない。仕事なものな。」

僕は渋々、そう言っていると、父さんの笑顔は輝いた。

「費用は、お前の口座に毎月、振り込んでおくからな。」

「ハイハイ、で、いつ出るの？」

「明日だ。」

「」「はぁ？」「」

ファーストキススル？

「――じゃ、頼んだぞ。」父さんは言った。

「任せておけて。」僕はにっこり笑った。

羽田空港、搭乗受付のところだ。

（この時代、成田空港は閉鎖されて、羽田一本になっていた。）

「雪、零のこと、頼んだぞ。」

「はい、了解しました。」

一緒に見送りに来た、雪姉さんは頭を下げた。

「――おい。」

「ハハッ、じゃ、行ってくるよ。」

「おう。」

父さんは格好良く手を振りながらゲートをくぐっていった。

「レイちゃん、この後、時間空いてる？」姉さんは帰りの電車の中で言った。

「ん、空いてるけど。」僕は答えた。

「ちよっと寄りたい所があるから、付き合ってくれない？」

「ん、分かった。」僕は頷いた。

彼女は明るく笑った。

「おー、ここが天下の秋葉原か。」僕は駅から降り立った。

ここの土地は阿安時代の不景気にかかわらず、にぎわっていた土地だ。

「うん……一度、ここに來たくて……。」姉さんはモジモジしながら言った。

僕らの住んでいる土地は埼玉の山深くであり、このような『聖地』に來れることは滅多にない。

「さ、行こうか。姉さん。」

「ありがとう。」

雪姉さんはまた明るく笑うと、僕の手を引いて秋葉原の町に繰り出した。

「ほえり、アニメ総合館本店ね……。」

僕はドスンと構えられたビルを眺めながら呟いた。

「何か、圧倒されるね……。」姉さんも圧倒されている。

僕らは恐る恐る、中に入った。

中は人が一杯だった。

「レイちゃん、いる？」人混みの中で姉さんは言った。

「いるよ。」僕はふうとため息をついた。

そして彼女の手をギュッと握る。

「これなら大丈夫だろう？」

「——うん。」彼女は手を握り返してきた。

僕らはそのまま、アニメの商品を見て回った。

色彩鮮やかであり、昔ながらのアニメ商品から今流行の『新時代、ムラヴレルラル』というアニメのコスプレも一通り置いてあつて驚いた。

「綺麗だね……。」感嘆の声を彼女は漏らした。

「そうだね。」僕は相づちを打って、キーホルダーを眺めた。

「ねえ、そのキーホルダー、一緒に買おうよ。」

「あ、いいね。」僕は姉さんの意見に賛同した。

レジで会計を済ませると、僕らはバックにそれを取り付けた。

「お揃いね。」彼女は嬉しそうに言った。

姉さんが嬉しいと、僕も嬉しい。僕はにっこりと微笑んだ。

僕らは外に出ると、近くにあったカフェレストランで食事を取ることにした。

「あら、恋人さんかい？」人懐っこい笑顔を浮かべたおばさんが迎えてくれた。

いえ、と言おうとしたら、

「あ、そうです。ね？レイちゃん？」雪姉さんは腕に抱きついて僕にウィンクをした。

「やあ、この御時世で仲が良いことは大事よ。」

お婆さんはますますにつこり笑うと、僕らを席に案内した。

「今、カッパル定食つてのがあるのよ。安いし、どう？」

お婆さんはメニューを見せながら聞く。

ふむ、確かにお手頃価格だ。量も丁度良い。

姉さんの方をチラッと見て、僕は言った。

「じゃあ、それでお願ひします。」

「ハイよ。」

お婆さんが立ち去ると、姉さんは心配そうに僕を覗き込んできた。

「気にしてる？」

彼女が恋人と言ったことをだろうか。

「気にしてねえって。」彼女の頭を撫でながら言った。

「―――ありがと。」彼女は少々申し訳なさそうに言った。

僕は微笑むと、よしよしと頭を撫でてやった。

気持ちよさそうに彼女はトロンと目を閉じる。

暫くそうしていると、お婆さんがトレイを持ってきた。

「ハイ、お待ち。」

トントントンと品を置いていくと、お婆さんは颯爽と去っていった。

二人分のパン、大皿にあるコーンスープだ。

と、すぐに、お婆さんがやって来て、飲み物と小皿を置いていった。

何と、飲み物は大きめのグラスにあのハートの弧を描いたストロ―が刺さっている。

小皿にはハート形のハンバーグと、長めのポテトが入っていた。

「ごめっくり。」お婆さんは上機嫌そうに立ち去っていった。

「―――いただきます。」とりあえず、僕はそう言った。

「レイちゃん、あーん。」雪姉さんはパンをスープに浸して僕の口

に近づけた。

言われるままに僕は口を開けた。
パクッ！

「ん、旨い。」というと、彼女は嬉しそうな顔をした。
ジュース（ちなみにオレンジジュースだった。）を飲もうとする
が、うまく飲めない。

「あ、これ、二人で飲まないに行けないの。」
——へー。

僕と彼女は一緒にちゅーつと吸い上げた。
お、旨い。

ふと目を上げると、彼女と目が合ってドキッとした。
僕はストローから口を離すと、ハンバーグを少し切って口の中に
放り込んだ。

姉なのに、ドキドキしちゃったよ……。

ま、養子だけどさ。

でも可愛いんだよね……。可愛く見えてしまう。

「ね、レイちゃん。」

「ん？」

呼ばれて顔を上げると——。

あの、何で口にポテトをくわえているんですか？

「ねえ、早く。」彼女はモゴモゴと言う。

——仕方ないなあ。

僕はもうポテトの片方をくわえるとチビチビとかじり始めた。
そして、彼女の顔が近づいてくる。

今、退けば、大丈夫だとふと思った。

だけど……退きたくないと止める自分もいた。

その葛藤が続いているうちに、だんだん、顔が近づいてきて……
そして……。

柔らかく弾力の満ちた物に唇が触れた。

「あ、ごめん！」僕は咄嗟に退いた。

何か慌てながら二言三言言われることを覚悟したが……。

「ん、いいの。」

え？

姉さんはどこか恍惚とした表情で唇を押さえていた。

「貴方のことが……好きだから。」

ええええ！？

雪姉は顔を真っ赤にさせて俯いていた。

お、おい、どうするよ。こういうとき、何を言ったら……。

「——も、一回やる？」思わず、口から言葉が出てきた。

姉さんは僕の言葉に驚いたように顔を上げた。

「う、うん！」

こうして、ポテトを一本残らず平らげた。

「ね、また行こうよ。秋葉原。」姉さんは家路で嬉しそうに笑って言った。

「ああ、いいよ。」僕は快諾した。

満月が輝いている。良い空だ。

「ね、レイちゃん、キス、する？」

雪姉は近づいてきて言った。

「うん、いいよ。」

僕は腕を少し広げて言った。

家までは、まだ、遠い。

風呂でキススル？

次の日。

もうすでに僕と雪姉がキスしたことがばれていた。

「あー！お姉ちゃん、ずるい！」

「雪さん、ずるいです……。」

「あれ？モカってお兄ちゃんのこと、好きだったっけ？」

「そ、そういう訳じゃないですけど！」

う、うるせえ……。学校から帰って早々にこれかよ……。

居間の炬燵で音楽を聴きながらイライラした。

「ひよこ焼き買ってきたから——ね？」

「物で釣られるような人間じゃありません！！」

「です！！」

「お、おめえら、うるせえ……。」

僕はとうとう呻いた。イヤホンを片方引き抜いて少し大きめな声で言う。

「大体、零に隙があるからいけないんです！」

「お兄ちゃんのバカっ！」

——あー、うるせえー。

しかも、夜になってからドンチャン騒ぎするなよな。全く。

「風呂入ってくる。」

僕は立ち上がって風呂場にノロノロと向かった。

ジャバツと乱暴にお湯を身体に振りかけた。

温かい湯が身にしみる。

もう、二月なんだなあ……。

世の中は受験真っ盛りなのに何やっているんだろ……。

ガラッ！

あれ？何ですか？その音。

僕は視線を風呂場の扉に向けて——硬直した。

「——モカ、どうした？水着で。」

「う……背中を流してあげようと思っただけです……………」

「ふうん、一緒に入りたかった訳じゃなくて？」

「バ、バカ、そんな訳ないじゃないですか！誤解しないで下さい！
！」

「おお、必死の剣幕で否定するか。

——こいつ、もしかして、ツンデレ？

「ん……じゃ、流して貰うか。」

「はい。」

僕は腰をタオルで覆うと、風呂椅子に腰掛けた。

僕の左前にある石鹸をとると、後ろでタオルを泡立てる音が聞こえた。

そして、彼女は力強くゴシゴシと僕の背中を洗い始めた。

「ん……気持ちいいですか？」

「ああ。」

「……あの。」

「ん？」

「本当に雪さんとキスしたのですか？」

「——ああ。」

背中を洗う力がグツと一瞬強くなった。

「いや、誤解するなよ？家族内のキスは挨拶のようなものだからな
？」

「……ふうん。」

平静を装っているような声が後ろから響いた。

風呂桶にお湯を注ぐ音が聞こえると、お湯が背中にジャーツと流された。

「じゃあ、ごゆっくり。」

「おう。」

彼女は僕の左前にある石鹸入れに石鹸を戻そうとした。

すると――。

ツルッ!!

彼女は滑って体勢を崩してしまった。

「危ないっ!!」

咄嗟に僕は飛びだして、彼女を抱きかかえた。実際は飛び出して、と言っても、狭い浴室だったので、身を乗り出した、の方が相応しいかも知れない。

と、その拍子に彼女の唇と僕の唇が触れ合った。

一秒……五秒……。

何秒間、その体勢で固まっていただろうか。

僕はハッと意識を戻して、身体を彼女から離れた。

「――ごめん。大丈夫?」

「は、はい……。」

彼女はどこも別状はないようだが、なにやら嬉しい顔をしている。

「何ニヤニヤしてるの?」

「べ、別に貴方とキスして嬉しいわけじゃありませんからねっ!」

顔がにやけて、誤魔化しきれていない……。

「お前、正直に言えよ。ったく……。」

「う……ハイ、そうです。キスできたのが嬉しかったです。」

む、意外と正直だな……。

「あ、あの……。」彼女は声を発した。

「ん?」

「あの……腰のタオル……。」

「うおっ!」

――いつの間にかはずれていた。

僕らは狭い浴槽に浸かった。

「別に貴方のことが好きって訳じゃないんですからね。」

彼女はポツリと言った。

「ふ〜ん……本当に？」

「……………」

彼女は黙り込んだ。尋常じゃないほど、顔が赤い。

「お、のぼせたか？」

「——零はバカです。」彼女は浴槽から出た。

「お、待て待て。」僕は続いて浴槽から出る。

「でも……好きですよ。」

何故か、胸の奥を衝かれる声だった。

「ね。」彼女は振り返った。

「キスしませんか？」

部屋でキススル？

「ね、お兄ちゃん。」百合が猫のように擦り寄ってきた。

「ん？」僕は雑誌を閉じた。

例の如く、家に帰った後である。

「宿題手伝ってくれる？」

「構わないよ。」僕は言うど、立ち上がった。

二階にある百合の部屋に一緒に入った。

「英語の宿題なんだけど……。」

ふむ、この文を訳せばいいらしい。

「んっとね、この『Some』は『〜という人もいる』って言う意味なの。ほら、後に『Others』があるのが証拠だよ。チェックしておきな。」

百合がせっせとメモしていく。

「で、この『each other』は『お互いに』って意味。つまり？」

「えっと——『お互いにチョコレートを与える人もいる。』でいいの？」

「んー、それじゃあ直訳過ぎない？」

「あ、そっか。じゃあ——。」

そんなこんなで、その課題の英文訳が終わった。

「これでいいのかな？」僕が訊くと、

「えっと……。」百合は机の上の表を取りだした。

その拍子に、シャーペンがポロリと、床に落ちた。

僕が拾おうとすると、彼女の手と触れ合う。

ドラマのような展開で思わず僕の心がドキッとした。

「あ——宿題、もう一つあった。」百合は囁いた。

「何？」思わず声がかすれる。

「保健の宿題。」

トン、と軽く僕の身体を押された。

「え？」

屈んでいた僕の身体は後ろに倒れていく。

ちなみに、彼女の部屋は机のすぐ横にベッドがある。

つまり……。

ポスツとベッドに背中から倒れた。

起きあがる暇を与えず、彼女は僕の上にのし掛かった。

「性教育の宿題……ね？」

いや、『ね』って言われても……。

と戸惑っているうちに唇を塞がれた。

恍惚とした表情で僕の口の中を貪っていく。

——っておい。

「いやいや、待て待て。」僕は彼女を押しつけた。

「こんな宿題があるか？ 普通。」

「ん、あるんじゃない？」

「——おい。」

突っ込んでも突っ込んでも追い付かない。

「まあー、いいじゃないの。ね？」

「いや、いいわけないだろ。」

「えー、そんなに私とのキスがイヤなの？」

む……上目遣いで言われると……。

「い、いやってわけじゃ——。」

「じゃあ、いいじゃない！」

再度のし掛かって僕の唇を貪るようにキスをする。

「はい、そこまでー。」

え？ 何？

戸惑っている間に何者かが百合を僕から引きはがした。

「ダメよ。百合。」モカだ。

「えー、もうちょっといいじゃないの。」

「ダメよ。雪も怒るよ?」

「そうそう。」雪姉も現れた。

多勢に無勢といった形でしぶしぶ、百合は諦めたようだ。

「零ももうちょっとしっかりしなさいよ。」モカは僕に言う。

「いや、あんたらが悪いんじゃない?」

「レイちゃん、ご飯いる?」

「はい、何も悪うございません。」

僕は思わず片言になって答えた。

「だってそうだろう?ここで『あんたらが悪い。』と言ったら――
――はあ。」

経済制裁は怖いな。流石、父親の秘書だけはある。

「私が悪うございました。」僕は降参した。

「ん、じゃ、ちゃんとほどほどにね。」モカはニヤリと笑った。

「ご飯にしましょ。」雪姉は手を叩いて言った。

ぞろぞろと部屋から出て行く。

僕は小さくため息をついた。

いつからこんな関係になったんだ?

家族内のキスはスキンシップ……とはいえなあ。

てか、本当にそうなのか?

学校でキススル？

学校でパソコンをカタカタ。

「先輩、1―3の台本の制作、終わりましたか？」後輩の声。

「あ、うん。今そっちに送るよ。」

僕はカタカタとパソコンを操作して、後輩の操作するパソコンに送った。

「流石ですね。先輩。」後輩の山内さんは台本を読みふけている。僕は文学部に所属している。

毎日、小説を打ち込んでいる。

最近だと、国出版の雑誌に掲載されたり等々。

結構、忙しいがやりがいがある。

今回やっているのは2ヶ月後の文化祭のために活動している演劇部の台本作りだ。

昔流行った、韓国ドラマのリメイクを頼まれた。

DVDや小説を読んで部員が分担作業で作っている。

「あ、溝口。次は3―2頼む。3―1を送るから。」

先輩の声に、ハイと答えると、僕はパソコンを再度操作した。

えっと――3場面の1か。

恋人が再開するシーンのようだ。

このドラマは、大学時代に知り合った男女の恋物語。

大学の深夜のキャンパスで一緒になろう、と二人は決意するが、就職の関係で男が遠い地に派遣されてしまう。女は病の父親の看病をしなくてはならない。

やがて、男は女の元に帰ってくる。

男は、仕事を投げ打って帰ってきたのだった。

そして、二人は店を開いて暮らしていく……。

何ともまあ、ロマンチックな。

えーっと、女が店で買い物をしているときに声を掛けられ……。
適当なりアクションやアドリブをしやすいように台本を打ち込んでいく。

「零、手伝いましょうか？」

その声に顔を上げると、モカが脇に立っていた。

「ああ、3ー4、ラストの書き上げしてくれる？」

「了解です。」彼女はそう言うと、僕の隣でパソコンに打ち込み始めた。

モカも僕と同学年で、文学部に所属している。

カタカタカタ。暫く僕らは無言で打ち込んでいた。

「溝口。」声を掛けられて僕は顔を上げた。

「先帰るから戸締まりヨロシク。」先輩は言った。

「あ、ハイ、お疲れ様です。」

先輩は手を振ると、部屋から出て行った。

「山内さん、帰っていいよ。」僕は後輩に声を掛けた。

「そんな、先輩一人じゃ――。」

「大丈夫だって。」僕は彼女の言葉を遮って言った。

山内さんは、じゃあお言葉に甘えて、と帰り支度を始めた。

「ファイルに移しておきますね。」「おう。」

僕のパソコンのファイルに全データが転送されるのを確認した。

「じゃ、失礼します。」「お疲れさま。」

山内さんは一礼すると部屋から出た。

「零、出来ましたよ。」暫くしてモカが言った。

「お、そうか。移してくれ。」僕は顔を上げて言った。

彼女のデータが僕のパソコンに移された。

「お、さすが。」場面のつなぎ目もしっかり出来ている。

僕も打ち込み終わると、全データを一体化して保存した。

「終わった。」

僕はパソコンの電源を落として言った。

「お疲れ様です。」モカはにっこりと微笑んだ。

「ん、ありがと。」僕は礼を言って立ち上がった。

「え、それだけですか？」モカは不満げだ。

「ん？」

「ご褒美くらい下さい。」

「——いやな予感がするのは気のせいかな？」

「何が欲しいって？」僕はため息をつきながら言った。

「キスして下さい。」やっぱり。

「あのねえ、ここ、学校だよ？」

僕は無駄な足掻きだろうと思いつつも指摘した。

「いいじゃないですか？ね？」

モカは上目遣いでおねだりしてきた。

う……弱いんだよな。こういうの。

僕は一つ息をつくとき、彼女と唇を重ね合わせた。

どうも、この頃キスする割合が高いんだよな……。まあ、挨拶だ。

家族のキスは挨拶……。

そう言い聞かせながらキスを続け、暫くして唇を離すと、彼女はにやけていた。

「にやついちゃって。」僕は言いながら鞆を背負った。

「バ、バカじゃないですか！？こんなキス、嬉しいはずがないじゃないですか！」

モカが躍起になって言った。やっぱ、ツンデレだよな。

僕はハイハイ、とあしらいながら一緒に部屋を出た。

「じゃ、どんなキスがいいのよ？」僕は部屋に錠を掛けながら言った。

「もっとディープなのが欲しいです。」

僕はその言葉を聞かなかった振りをして、職員室に鍵を戻した。

「——無視しないで欲しいです。」彼女はムスツとして言った。

「しかしねえ、テクニクはあんまり持ってないのよ。」

僕は抵抗を試みた。多分、無駄だろうけど。

「いいのです。不器用なキスでも。」彼女は回り込んで通せんぼしている。

「ハイハイ、分かりましたよ。」僕は降参した。

「ご褒美あげればいいいでしょ。」

「はい。」彼女は嬉しそうだ。

僕らは手頃な空き教室に入った。

「よし、じゃ、いいかな？」僕が訊くと彼女は頷いた。

モカが目を閉じる。

それと同時に唇を押しつけると彼女の瑞々しい弾力に溢れた唇が柔らかく受け止めてくれた。

そして、彼女の唇が開くと同時に僕は彼女の口の中に舌を滑り込ませた。

彼女は舌を絡め合わせる。

僕も不器用ながらもそれに答えた。

そんな絡み合ったディープなキス。

やがて、彼女は目を開けた。

それを頃合いに僕は唇を離し舌を抜き取る。

「さ、帰るか。」僕は言った。

「はいっ。」モカは無邪気な笑顔で言った。

「またしましうね。」

学校でキススル? (後書き)

ハヤブサです。

個人的にはモカが一番好きなんですね。

皆さんはいかがでしょうか?

感想を頂けると嬉しいです。

お待ちしております。

ちなみに今回、丁度2000字です。

編集後は残念ながら2031字……残念です。

しょっぱいキススル？

「お。」僕は立ち止まった。ちなみに今日は買い物帰り。雪姉さんだ。焼け跡を見ている。

そう言えば、昨日火事があったなあ。

モカと帰っているとき、消防車が通っていたし。

「雪姉。」僕は声を掛けた。

「あ、レイちゃん。」彼女は振り返った。

あれ？彼女の瞳にきらり光る何か……？

「——泣いていた？」僕は訊いた。

「あ、ちょっと目にゴミが入って……。」「雪姉は目を擦った。

「帰ろっか。今日の夕飯は何？」

彼女は明るく言った。不自然なぐらい。

「今日はカレーだよ。金曜日だもん。」僕は何か引っ掛かりを覚えながらも言った。

「あ、海軍は金曜日はカレーだからね。」

僕らは家へと歩き出した。

「雪姉？そーいえば、火事場の時だけ変ねえ。」百合は言った。いつもの如く、宿題を見てやっている。

「ほら、手は止めない。それで？」僕は計算を続けるよう促しながら言った。

「んー、何とか火事場を見ていると表情が消えるの。いつも。」

「ほー。何かあるかもな。」僕は呟いた。

「何なら調べてあげようか？」百合は面白そうに言った。

「え？」

「私、雪姉が出た施設、知っているから。ねえ、これで合ってる？」

——それは驚きだな。チラッと彼女の答案を一瞥した。

「この答えはどうだろう？それで何で知っているの？」僕は訊ねた。

「んー、一回訊いたことあるから。」彼女は言った。

「へえ。どこ？」

彼女は悪戯っぽく笑った。

「キスしてくれたら教えてあげる。」

「あ、そ。」僕は言った。

「じゃあ、宿題教えてやんない。」

「えー、分かったわよ。」百合は不服そうな顔をしていたが、目は笑っている。

「埼玉県立児童養護施設よ。」

「サンキュー。」僕は御礼にキスしてやった。

「その問題、正解だから。」

「あー、騙したわね!!」

僕は大宮にある帝聖時代初期に作られたと思しき施設に向かった。

電車で大宮に向かい、そこからバスに乗り込んだ。

ガタタン、と音を立ててバスは移動する。

土曜日なので少々、人は乗っているが、快適に移動できる。

座席に座ってうつらうつらしながら外を見た。

雪姉に何があったんだろうな……。

学校の前をバスは通り過ぎていった。

赤っぽい校舎だ。中高一貫校らしい。

彼女はここに通っていたのだろうか？

多分、私立校だから違うだろう。

火事……か。

僕は目を閉じて考え込んだ。

『次は児童養護施設。』

アナウンスで目が覚めた。どうやら考えているうちに寝てしまったらしい。

僕は慌ててバスの降車ボタンを押した。

ピンポーン、と音が響いた。
やがて、バスは施設の前で止まった。
僕はそこで降りた。

「えーっと、白石 雪ですね。」

僕は施設の窓口で係員に彼女の養子になる前の名前を告げると、係員の人は忙しそうにパソコンのキーボードを叩いた。

「ちなみに、貴方は？」別の係員が訊ねた。

「姉弟になった溝口零です。」僕は名乗った。

「えーっと、こちらですね。」係員がファイルを取りだした。

「ありがとうございます。」僕は礼を言ってファイルを開いた。

彼女の事実が機関銃のように目に飛び込んできた。

「ただいま。」僕は帰宅した。

「お帰り。レイちゃん。」雪姉が出てきて言った。

「どこ行っていたの？」

「県立児童養護施設。」僕は正直に答えた。

彼女の表情が消えた。

「みんな、見てきたよ。」僕は重ねて言った。

彼女はふらっと倒れそうになった。

僕が慌てて支える。

「貴方だけには知られたくなかった……。」

彼女は涙目になって言った。

『白石 雪。入所時、10歳。』

父親が博打で多額の借金。

保険金を手に入れるため、自宅に放火。

母親が咄嗟に本人を2階のベランダから隣人に渡した。

しかし、母親は逃げ切れず死亡。
父親は懲役30年の刑に処されている。』

簡潔に要約されたメモを、ずっと僕は見つめていた。

「――そこまで、知っているのね。」

彼女は俯くと、エプロンを外した。

そして、いきなりセーターを脱いだ。

「ゆ、雪姉！？どうした？」

僕は狼狽えるのにも構わず、彼女は服を脱ぎ続けている。

「見て。」

彼女は上半身裸になると僕に背中を向けた。

僕は思わず息を呑んだ。

背中一面に火傷の跡がある。

「家の柱が燃えながら倒れてきてね。」

彼女は服を着直しながら苦々しく言った。

「貴方にはだけは知られたくなかった。嫌われると思ったから。」

「嫌うかよ。バカ。」僕は彼女を小突いた。

「早く言ってくれよ。」僕は言葉を紡ぎ出した。

「そんな傷跡や経歴なんかで人間が計れる訳じゃない。雪姉は、雪という少女であり僕の姉であるんだ。嫌いになったりするわけねえだろ。」

「れ、レイちゃん……。」「雪姉の肩が小刻みに揺れた。

「大丈夫だよ。」僕は優しく彼女を抱き締めた。

彼女は大きな声で泣き始めた。

ダムが壊れたように……。

僕は彼女の身体をしつかり抱き締めて、大丈夫だよ。と囁き続けた。

これで良かったんだ。僕はふと思った。

彼女は過去の呪縛から解かれたんだ。

僕は唇を彼女の唇にそっと重ねた。

涙に濡れたしよっぱいキスだった。

暗闇の中でキススル？

父さんから手紙が届いた。昨日には届いていたらしい。

「てか、何で文通なんだ？」僕は手紙を広げた。

「まあ、とにかく読んで。お兄ちゃん。」百合は言った。

居間のソファーに座ると僕は声を出して読み始めた。

「子供達よ、元気にしているかな？特に零。女の子達に変なことはしていないだろうね？父さん達は無事にイギリスについて勉強を始めているよ。なかなか興味深い文化だね。友人も何人か出来た。今度写真を同封して送ろう。さて、本題だが、私の元に長野ツアーのチケットを貰ったのだね。私はイギリスから離れることは出来ん。そこで君達が行って来てはどうかね？四人分きっちり用意して同封されているはずだ。今月のお小遣いも多めに入れてある。2泊3日であってね。数日後だが。雪も家事ばかりだからゆっくりしなさい。モカや百合も学校で疲れているだろう。みんな、しっかり骨休みするといい。」

僕はふうと息をついた。

長い……。

「いいわね。長野旅行。」姉さんはチケットを取りだしてはしゃいだ。

「お父さんの粹な計らいね。」百合は嬉しそうに言った。

「でも、23日から25日の間に学校がありますよ。」モカは指摘した。

「じゃあ、モカは家にいれば？」僕はニヤニヤしながら言った。

「バ、バカじゃないですか！？旅行だったら行くに決まっているじゃないですか！！」

おーおー、激しいツンデレですこと。

「みんな行きたい訳ね。」

一同、頷く。

「じゃあ、行くか。みんなで。」

僕が言うと、みんなは大騒ぎを始めた。

「あと、十日ぐらいかしら。」姉さんは呟いた。

「長野の温泉らしいね。最近開発された所みたい。」

百合は相変わらず嬉しそうに言った。

「じゃ、無くすといけないから仕舞ってっと。」

雪姉は律儀に戸棚の中に仕舞った。

百合はまだ嬉しそうに騒いでいる。

おいおい、静かにしろ、と言おうとしたときだった。

バチンッ！

大きな音と共に照明が消えた。

「あれ？停電？」真っ暗闇の中、雪姉は囁いた。

百合も水を打ったように静かになった。

「ちよつと懐中電灯を取ってくる。――アイタッ！」

ガツンッという凄まじい音とモカの悲鳴が聞こえた。

「大丈夫か？よつと……イタッ！」

僕は障害物を避けながら歩いてたつもりだが、筆筭の角に足の小指をぶつけてしまった。

「――真っ暗で何にも分かりませんね。」モカは囁いた。

「うん……どうしよう。」僕は痛む小指をさすりながら言った。

と、突然、ボツという音がして蠟燭の火が現れた。

「とりあえず、これね。」雪姉は机の上に蠟燭を置いた。

「ああ、姉さん、ありがとう。」僕は礼を言った。流石、父さんの秘書。

「じゃあ、私、ブレーカー見てくる。」姉さんはそう言うと、再び歩き出した。

「あ、一人じゃ危ないから僕も……ッ！」

僕は小指の痛さでうまく歩けない。

「私が一緒に行きます。」モカが半ば呆れたように言った。
「すまない。」

彼女らは暗い闇の中を慎重に歩いていった。

「ふう……いてえ……百合は大丈夫か？」僕は訊ねた。
返答がない。

ん……？不審に思っ僕は手探りで辺りを探った。

蝋燭があるとはいえ、真っ暗であまり分からない。

お、何か温かい物に触れた。

どうやら、百合の手らしい。

「どうした……？百合……？」僕は彼女の手を手がかりに彼女に近づいた。

彼女の肩に触れると小刻みに震えていることに気付いた。

「お……大丈夫か？」僕は訊ねると彼女は僕の手をギュッと握りしめた。

「置いていかないで……。」か細い声で百合は言った。

「大丈夫だ。僕はここにいる。」

僕は囁いて、彼女を抱き寄せた。

「もう一人はイヤ……。」彼女は震える声で言った。

「大丈夫だ。」

まだ震えが収まらないらしい。仕方ない。

僕は彼女に優しくキスをした。

暗くてよく分からなかったが、何故か唇にキスをすることが出来た。

彼女の震えが徐々に止まっていくのが分かった。

しかし……こいつのこんな怯えっぷりは……？

僕は唇を離すと、彼女をギュッと抱き締めた。

何かあったに違いない。

やがて、モカと懐中電灯を持った雪姉が戻ってきた。

モカは怪訝そうな顔している。

「百合が。」と僕は言って、姉さんを見た。

彼女は納得したように頷くと、懐中電灯をモカに渡して百合の手を握った。

「レイちゃん、さっき、近所の悪ガキが電線を切っちゃったらしいの。」

雪姉は僕の顔を見て囁いた。

「じゃあ、復旧は？」

「かなりかかるみたい。」

僕は唇を噛んだ。それじゃあどうしろっていうんだ。

「でも安心して。自家発電機があるから。」雪姉は懐中電灯の薄明かりの中で笑った。

「おお、本当か！！」僕は安堵した。

「百合は私がおかするからモカちゃんに案内して貰って。」

「ああ、分かった。」僕は頷くと、そっと姉さんと入れ替わるように身体を引いた。

「こっちです。」モカは囁くと、廊下に出た。

廊下で彼女は床に手をついた。

え？

ガチャ。

どうやら隠し扉があるらしい。

「危ないからゆっくり降りて下さい。」

モカは懐中電灯で下に続く梯子を照らしながら言った。

「あ、うん。オッケ。」僕は頷くと降りていった。

あー、やばい。真っ暗で分かん。

カンカンカンという音が立ててモカも降りてきた。

そいや、今日、こいつ、スカートだっけ。

停電しなければ見られるのに……。

とずっと彼女が着地すると、辺りを照らした。

あれ？自転車？発電機ってこれ？

モカを見ると彼女はコクンと頷いた。

——マジっすか。

暗闇の中でキススル? (後書き)

ハヤブサです。

次回は零君、かなり頑張ります。
咄嗟に思いついたネタですね。発電機。

まあ、溝口真次の息子、溝口零の親だから発電機を家に置くぐらい
有り得るか・・・。

真次君が誰だか分からない人は『僕の恋人は妹』をお読み下さい。
次回は百合が捨てられた理由が明らかになります。

では、感想、お待ちしています。

膝枕の上でキススル？

「うおおおおおおお！！」

僕は自転車を猛烈な勢いで漕いだ。

「頑張って下さい！」モカが僕を励ます。

上の方からぼんやりと光が差してきた。

どうやら、居間で明かりがついたらしい。

ちなみに、この明らかに素人が作ったような自転車型発電機は雪姉曰く、親父が残した絡繰りらしい。全く、日曜大工でこれほどの物を拵えるとは。

と、上から声が降ってきた。

雪姉と百合の声だ。耳を澄ます。

「――ありがとう。」百合の声だ。

「ん、問題ないわ。もう大丈夫？」と姉さん。

「ええ……とも言えないけど。」

「何でこんな怖がるの？暗所恐怖症？」

「――私ね。子供の時、両親に捨てられて。」

百合がポツリポツリと小声で話し始めた。

もうちょっと大きな声で話してくれ、と少し思った。

何しろ、自転車のモーターの音が凄くて聴力のいい僕ですら聞き取るのがやっとなのだ。

「真っ暗闇の中で『待っていてね。』って言われて、私、待っていたの。ずーっと暗闇の中で。野外で寒さにも耐えて。でも帰ってこなかった。でも当時、捨てられるって概念がなかったからずっと待っていたわ。大分待って、寒さもピークになって、私は凍死しそうだったわ。だけど……。」

「レイちゃんが、助けてくれたのね。」雪姉が言った。

「ええ……。」

暫く嗚咽らしき声が聞こえてきた。

僕は黙って自転車を漕いだ。

モカはジッと隅っこで耳を澄ませていた。

「お茶、いる？」雪の囁き声が聞こえた。

「……………」

「そう。」姉さんは息を吐いた。

どうやら、百合は首を振ったらしい。

夜なので冷え込みが激しい。

「暖房を付けてきて。」僕はモカに囁いた。

彼女は心配そうに僕を見た。

「大丈夫。それぐらいなら漕げる。」僕は自信満々に言った。

彼女は頷くと、懷中電灯で照らしながら梯子を登っていった。

と、急に照明が暗くなった。

僕は慌てて漕ぐスピードを上げた。

「つけてきた。」モカはそう言いながら、梯子を下りてきた。

「オッケ……………」正直、しんどい。

暫くの静寂。例外はモーター音だけ。

「温かい……………」百合の声が聞こえてきた。

「大丈夫よ。私達がいるわ。みんな、いるから。」

雪姉が囁くのが辛うじて聞こえた。

今、モーター音は最大である。

「ありがとう……………」

暫く、百合の泣き声が家中に響いた。

僕は黙って自転車をこぎ続けた。

3時間後、電気が戻った。

「あー、もう無理！」僕はソファーにバタツと倒れ込んだ。

「お疲れ様。」雪姉はスツと僕に膝枕をした。

あー、抗う気にもなれん……………」

まあ、不利な訳でもないからそのまま甘えさせて貰うことにした。
「それじゃあ、私も。」モカは僕に添い寝した。

やばい……温かい…………。

ちなみに、このソファはこれまた、父親の日曜大工で背もたれが倒せるのだ。

つまりベッドにもなりうる。

と、言う訳で、ベッドモードにソファは変わった。

「ごめんね。お兄ちゃん。」百合は枕元で言った。

「良いつて。僕はどんなことがあろうと家族の味方。」

僕は姉さんの膝の上で微笑んだ。

「やっぱり、優しいね。お兄ちゃんは。お祖父ちゃんの血を引いているのね。」

「お祖父ちゃん、ですか？」モカは呟いた。

「うん。真次お祖父ちゃん。」百合は微笑んだ。

「あの、女たらしと一緒にされたくなかったがな…………。」

僕はちよっと気分を害した。まあ、いいか。

「ほら、百合も一緒に寝ようぜ。」僕は手招きした。

「うん！」百合は明るく頷くと、僕の隣に寝っ転がった。

百合は僕の右腕にギュッと抱きついた。

む……胸が…………。

モカも負けじと左腕に抱きついた。

こっちも…………。

雪姉は僕の上で笑うと、どこからともなく毛布を取りだして僕に掛けた。

「え？姉さん、どこから出したの？」

「ソファアのポケット。お父様が入れておいたの。」

あー、あのクソ親父、予想していたのか！？

いや、考え過ぎか…………？

今度は雪がもぞもぞと動いた。

すると、ふっと明かりが消えた。

姉さんが竿か何かでスイッチを押したらしい。

しかし、もう百合は震えない。

「ありがとう。お兄ちゃん。」

唇に柔らかい感触がした。

そして、それが優しい夢に引き込んでいく……。

「お休みなさい。」

膝枕の上でキススル? (後書き)

ハヤブサです。

最近、タイトルに悩む傾向にあります。

まあ、語尾を『スル?』にする時点でかなり知恵を回さねばなりませんからねえ。

次回は季節はずれのバレンタインです。
感想、お待ちしております ^^

映画館でキススル？

「起きて。レイちゃん。」僕は揺すられて目を覚ました。

僕が目を開けると、雪姉さんが僕の顔の上で微笑んでいた。

あ、そっか。膝枕して貰っていたんだっけ。

僕は身体を起こすと、姉さんは背伸びした。

「あ、ごめん。足、痺れてない？」僕は慌てて言った。

「大丈夫よ。」彼女は微笑むと、ソファーから降りた。

僕は左右にいる寝ているモカと百合を起こさないように抜け出した。

「ねえ、たまには、二人で出かけない？」

雪姉は悪戯っぽく囁いた。

「いいね。秋葉以来だし。」僕は頷くと、荷物を取りに二階へあがった。

肩掛けバックに、財布にハンカチ、ティッシュも。

ホテルに行くはずないからあれは要らんか。

おお、忘れちゃいけない携帯電話。

僕はそれを30秒で用意するとコートを取って玄関に向かった。

姉さんも数分と時間を掛けずに玄関に来た。

「ごめん。待った？」

「いや、全然。」僕は笑って答えた。

まるで、恋人みたいな関係だな……。

はっ、いかんいかん。あくまで家族。キスはスキンシップなんだ。

「ね、レイちゃん。行くよ。」

僕は催促されて我に返ると、頷いて外に出た。

僕らは家にしっかり錠を掛けて町に繰り出した。

「でもさあ、早朝から店なんて開いてないよ。」僕は言うと彼女は笑った。

「大丈夫よ。」

僕らは駅に向かった。姉さんは何を考えているんだか……？

数日前に訪れた大宮に辿り着く。

「あ、そう言えば、学校大丈夫？ レイちゃん。」姉さんは思い出したように言った。

おい、それも確認せずにかよ……。

「今日は建校記念日。」僕は苦笑しながら言った。

そう、僕らの学校は二月十四日が建校記念日。

——ってあれ？ 何か忘れている……？

「行くよ。レイちゃん。」雪姉は微笑むと、僕の手を引いて駅前のデパートに行った。

「って、デパートは普通、十時に開くでしょ？」僕は歩きながら言った。

「そうね。でも、ある施設を除いては。」

彼女はまた、悪戯っぽく笑って言った。

ある施設？

僕は手を引かれてデパートのエレベータに乗せられた。

エレベータは静かに移動する。

「あ、そうか。」僕はようやく納得した。

エレベータのドアが開けた。

映画館だ。

帝聖政府は、映画税というものを取り入れた。

そして、映画促進金というものも取り入れている。

それによって、映画は繁盛し、税金ががっぽる。という仕組みらしい。

もっと細やかな仕組みがあるんだろうが、重要なのはこの映画館も促進金を受け取っていることだ。

それによって、24時間営業を可能としている。

いや、細かい仕組みは知らんが、これで金を取れるとは、天皇も賢いなあ。

「さ、行こっ！」雪姉は手を引いた。

「——ってどれ見るの!？」僕は戸惑いながら言った。

「え？劇場版、新時代・ムラヴレルラルじゃない。」

あ、そうか。今日は新時代・ムラヴレルラルの上映初日か。

「しかし、チケット、高いんだよなあ……。」僕は呟いた。

帝聖政府は、アニメ税を取り入れている。

DVDやキーホルダーなどのグッズはもちろん、映画にも税金はかかる。

これを取り入れられた当初はブーイングがすごかったなあ。

「大丈夫よ。ハイ。」姉さんは僕に何かを手渡しした。

ん？バレンタイン・ムービー・チケット？

あ、そうか、今日は……。

「バレンタインのプレゼントよ。」彼女は微笑んだ。

「ありがと……。御礼はどうしたらいいかな——。」

「楽しみにしているわ。」彼女は悪戯っぽく笑った。

あー、何かまたイヤな予感だな。一ヶ月後が恐ろしい。

「さ、行くよ。」

「お、おう。」

僕らは仲良くホールに入ってしまった。

数時間後、迫力ある映画は終わった。

さすが3D。興行収入はすごいだろう。

そして、政府の予算もかなり増える。うまくできたシステムだ。

「ね、ごはんも一緒に食べよ♪」雪姉はかなり上機嫌だ。

腕に抱きつかれて、やや歩きにくい。

まあ、嬉しくはないんだが……。

体温と香り、そして感触がもうやばい。理性を保つのがやっつた。んー、どこで食べる？」僕は極力、自然なように言った。

「じゃあ、カップル定食♪」姉さんは僕を見ながら言う。

「流石に、大宮には無いんじゃないか？」僕は答えた。

「えー、じゃあ……。」姉さんはそう言うのと、僕を物陰に引き込んだ。

「レイちゃんの唾液を飲みたい。」

「え……ここ、デパートだよ？」僕は一応、指摘した。まあ、無駄だろうけど。

「だから物陰に移動したのよ。」彼女は悪戯っぽく笑った。

ああ、やっぱり無駄か。

僕は観念すると姉さんと向き合った。

そして、唇を重ね合わせると唾液を流し込んだ。

彼女は貪るように、僕の舌から唾液を吸っている。

あ、やべえ……。気持ちいい……。

「ハイ、ストップ。」

——え？

僕らは振り向くと、モカと百合が立っていた。

「ど、どうしてここが？」姉さんが訊く。

「GPS。」モカは短く答えた。

あ、携帯の。

「全く、油断ならないんだから。」百合はムスツとして言った。

「ま、いいじゃないの。」僕は取りなした。

「元と言えば、零が甘いからいけないんです！」モカは怒ったように言った。

「じゃあ、飯奢ってやんねえぞ？」僕はふと思いついて言った。

彼女らは黙り込んだ。この年頃は金が大切だからなあ。

「零は、甘い方がいいです。」モカは呟いた。

「よっしゃ。」僕は笑顔で言った。

「じゃあ、飯食うか。」

僕はワイワイ騒ぎながら歩いた。

映画館でキススル? (後書き)

ハヤブサです。

映画館というのはデートでもってこいの場所。

私は『星守る犬』という映画を見たいと思っています。

主題歌は平井堅です☆

さてさて、次回は二話連続で出します!

と、言っても一時間はずらしますが。

31日、14時と15時です! お楽しみに!!

感想、お待ちしております^^

カラオケでキススル？前編♪

僕は飯を食った後に、何となくカラオケに行くことにした。どうせ、大宮まで来ているんだ、という概念である。ちなみに、僕らの家の近隣にはカラオケやゲーセンはない。スーパーの一角のあのちっちゃなゲーセンは除くが。

『KARAOKEーCAN!!』

何っー平成チックな名前ですこと。

僕はその店舗に入った。

なぜか？それは……。

「おー、零！」

カウンターで陽気に声を掛けていたのは、我が兄だった。

「兄さん、部屋はあるよね？」僕は訊ねた。

「あ、オッケ。」彼は頷くと、パソコンを操作した。

「特等席のゼロ番ボックス。零だけにいい席だろ？」

大して面白くないギャグを一人で言っで自分で爆笑する兄。

「あの……。」モカは戸惑っている。

「ああ、モカは来たこと無かったっけ。」僕はふと気付いて説明をした。

「これは一兄^{はじめ}さん。それでもこの店を開いて全国チェーンにさせて海外進出も目論んでいるサラリーマンだよ。話では……言っただけ？」

僕はちよつと首を傾げた。

「まあ、家では時々電話とメールしかやりとりしてないからなあ。」兄さんは申し訳なさそうに言った。

「三年も家に帰ってきていない人間でね。親不孝さ。」僕は首を振

った。

「まあ、成功したからいいじゃない。阿安時代を切り抜けるのって結構大変だったんだよ。」

兄さんは弁解がましく言いながらおしぼりを出した。

「飲み物は持つて行くから。あ、料金は気にしないで良いから。いつものにするし。」

彼はウィンクすると、おしぼりを僕に渡してカウンターの奥に入った。

やれやれ、と僕は言うのと、ゼロ番ボックスにみんなを案内した。なかなか広い室内にソファアールとテーブルが鎮座している。

カラオケの液晶画面には国の広告が流れている。

まあ……国に取り入って成功したから仕方ないか。

「零にお兄さんなんていたんですね。」モカは言った。

そりゃ、そうだ。兄のことを考えたことなんてあまりない。

思い出すときと言えば、兄のお下がりの自転車を見るとときぐらいだ。

「ま、曲入れろよ。」僕は気を取り直して言った。

「あ、うん。」百合はリモコンを取って曲を入れ始めた。

『神様なんていなくていい。』

そんなテロップが流れた。そして前奏が始まる。

「♪神様なんて、いなくなれば、いいのに……。」

綺麗な歌声で百合は歌い出した。

『粗悪女子隊』というアーティストが歌っている。全く、酷い名前だ。

「♪こんな私を見放して欲しいのに、神様は、見守っている。」

それにしても綺麗な声だ。

そういえば、合唱団をやっていたんだっけ？

彼女は柔らかい声で歌い終えた。

「さっすが、百合。」僕は手を伸ばすと、百合の頭を撫でた。嬉しそうな顔をする百合。

「次はモカ、かな？」僕は訊ねた。

「え？わ、私ですか？」彼女は急に慌てだした。

「モカはモカ、ここに一人しかないじゃん？」僕は言った。

「そそそ、それより、雪さんの曲の方が、ききき、聞きたいのですか？」

「——はあ？どうしたんだ？こいつ。

「まあ、いいや。雪姉、お願い。」

「うん。」

彼女はリモコン操作して曲を入れた。

『新時代・ムラヴレルラル』

またまた、テロップ。前奏がかかる。

「♪ラララ、新時代で君のハートを今日こそ奪い取る。」
パラパラ風の曲調に乗って彼女は歌い出した。

「♪私のハートは、ラララ、盗まれている？」

最後の疑問符の所でウイंकされて僕はドキッとした。

「君だけにあげるよ。only my hurt・・・」

静かに歌い終えた雪はマイクスタンドにマイクを戻した。

大人の美声、というのだろうか。

美しい響きだ……。

「ハイ、どーもー。」兄さんがいきなり入ってきた。

「これ、ドリンクね。いつものセット。あ、あとポテトはおまけね。」

機嫌の良い兄さんはトレイをテーブルに置くと、去っていった。

「さあ、モカの番だよー。」僕は促した。

「ええええ！？」また慌てて……。

百合がサツとモカにマイクを握らせ、リモコンを持たせた。

モカは観念したようにグッと目をつぶると、リモコンを高速で操作して曲を入れた。

『貴方の甘いキススル？』

「♪貴方は優しい優しいその笑顔で微笑みながら私を見つめている。」

「……は？」

「♪ああ、貴方のその柔らかい唇で私にキスシテ？」

あ、あの……。

「♪破廉恥でも何でもいい、そのキスさえあれば……。」

淡々と僕が語っていたら分かるはずもない。

彼女の声は……外れていた。

つまり……超音痴だった。

百合が我慢できないようにプツと吹き出した。

モカは真っ赤な顔をしながらそれでも歌い続ける。

「♪貴方の、その柔らかい、甘いキ・ス・ス・ル？」

それでもちゃんと歌い終えた。

百合は爆笑寸前である。雪も後ろを向いて肩を小刻みに震えさせている。

烈火の如く顔を真っ赤にさせると、モカは部屋を飛び出していった。

「まったく、笑いすぎだったの。」

僕は百合と雪を戒めた。彼女らはシュンとなった。

僕は部屋を出ると、カウンターに行った。

兄さんが肩をすくめると、カラオケの待合室を見た。

待合室の隅っこでモカは膝を抱えてジッとしていた。

「ほら、戻ろうよ。」僕は彼女に声を掛けた。

「……。」

「結構、良い歌だったと思うけどな。」

「……え？」

「心がこもっているって分かるから。うん。」

僕がそう言うと、モカはちょっと赤くなった。

「……これ。」

彼女がポケットの中から小包を取り出した。

「バレンタイン。美味しくないかも知れないけど。」

モカは上目遣いで言った。僕は包みからチョコレートを取り出すとかじった。

「うん。苦い。」僕は言った。

彼女ははぁとため息をついた。

「でも、僕、苦いの好きだからさ。また作ってよ。とびきり苦いチョコ。」

僕は笑顔で続けた。彼女はさっきの様子とは一変して喜んだ。

「うん！任せて！」

彼女は勢いよく立ち上がると、僕に抱きついてキスした。

「さあ、戻ろう。」僕は彼女の手を引いて言った。

「この女たらしめ。」兄さんが小さく呟いたのが聞こえた。

「だけど、百合ちゃんは確か……。」

しかし、その後何か言ったようだが、うまく聞き取れなかった。

これをしっかり聞いておけば、と数時間後、後悔することになるとは知らずに……。

カラオケでキススル？前編♪（後書き）

ハヤブサです。

一時間後、後編を出します！

ちなみに今回の曲は自分のオリジナルの詞です。
今度曲をつけてみましょうかね……。

カラオケでキススル？後編♪

僕がモカを部屋に連れて帰ると、雪姉と百合はモゴモゴと謝った。モカはカラリと笑って、大丈夫だと言った。

「あ、そう言えば、零のを聞いていないわね。」モカは言った。

「止めた方がいいよー。」一兄さんが入ってきながら言った。

「ほい、ドリンク。」彼はテーブルにドリンクを置いた。

「何ですか？すごい下手で耳が千切れるとか？」雪姉は訊ねた。

兄さんは意味ありげに笑うと手を振って出て行った。

「えー、気になる。お兄ちゃんのその歌。」

百合は催促するように言った。他の雪姉やモカも賛同する。

「じゃあ、歌ってやろう。とくと聞くがいい。」

大仰に僕は言うのと、リモコンを操作して曲を入れた。

『Love station』

テロップが流れると、パラパラ風の曲が流れ出した。

「♪愛して愛して愛して愛して、堪らないのに、貴方は振り向かない。」

僕はメゾソプラノの声を旋律に委ねて歌っていく。

「♪どーして？貴方は、私の気持ちをも、分かってくれないの？」

女の子達はハツとした顔で聞き入っている。

「♪I love forever. 永遠に愛する私に気付いて。」

でも、貴方は振り向かない。Why? まるで私と貴方の心はすれ違い合う、Love station. . .」

僕は早口でしっかり歌い終えた。

「はあう……。」モカは声にならない声を吐き出した。

「ん？惚れ直しちゃったんですか？」僕は茶化して言った。

「バ、バカじゃないですか！？元々、惚れてなんていませんからっ！」

「じゃあ、何でキスの要望が学校で出てくるの？」僕はまた茶化す。

「えー！学校でキスしたの！？ずるいっ！！」百合が乱入してきた。ギャーギャー騒いでいるので僕はすっと抜けて姉さんの方に行った。

「うまいわね。レイちゃん。惚れ直しちゃった。」姉さんは笑って言った。

僕はストレートの豪速直球に戸惑った。

「動揺しすぎ。」彼女はチョンツと僕の唇を人差し指で叩いた。やばいっ！僕は理性を総動員させた。

「ありがと。」僕は微笑んで言った。

それが限度だった。これ以上、姉さんを見ていたら押し倒しかねない。

「じゃ、飲み物でも飲もうか。」僕は言うと、飲み物を取った。飲み物はウーロン茶らしい。

雪もコップを取ると、騒いでいた百合とモカもコップを取った。

「乾杯！！！」

僕らは言い合うとぐいっとコップの中身を飲み干した。

「きゅう……。」変な声とバタツという音がした。

——え？あそこにいたのは……モカ？

「モカ！」僕は近寄って抱き上げる。

真っ赤な顔をして倒れている。

ん……待てよ。

僕はコップの中に残ったウーロン茶の臭いを嗅いだ。

あ、アルコール臭！

「あのクソ兄貴！！」僕は罵りながら立ち上がった。

「お兄ちゃん、行っちゃダメ。」百合がガシツと足を掴んだ。

彼女も赤い顔をしている。意識は飛んでいないようだが……。

「そうだよお、レヒちゃん……。」雪に関しては呂律が回っていない。

「退いてくれ！兄貴をぶっ飛ばさなきゃ気が済まん！」僕は吼えた。「暴力はダメですよ！」

雪姉がゆらりと立ち上がると僕を静止しようとしたが、テーブルの脚につまずいて僕の方に倒れてきた。

「わっと！」僕は支えようとしたが、後方に倒れ込んでしまった。運良くソファ―に背中から着地。

いや……。僕は冷や汗を感じた。

これは逆にまずいんじゃないか……？

「あったかい……。」「姉さんは僕に抱きついて言った。

やべ、胸が……。起きあがることすら出来ない。

と、今度は百合が突然服を脱ぎ始めた。

「お、おい！百合！どうした！？」

僕は叫んだ。姉さんが邪魔で動けない。百合はすでに下着だけだ。「えへへ、こうするの。」

彼女は一気にブラジャーを外し、パンツを脱いだ。

僕はハッと頭の中で昔、祖母から聞いた話を思い出した。

祖父は酒を飲むと、急に理性が外れるそうだと。

それで何度押し倒されたことか……と恥ずかしそうに言っていた。その血は百合の方に遺伝していたのか！？

「お兄ちゃん、動かないでね。」

「いやいやいや、動きたくても動けない状態ですからっ！」

僕はパニックに陥った。雪姉を退かそうとしたが、腰にしがみついて離れない。

「てか、何するつもりだ！オメエ！」僕は時間を稼ごうと必死に叫んだ。

「ええ？ちよっと一線を越えるだけじゃないの？」

「そこ僕に訊かないで！というか、越える気ないからっ！」

僕は視線を逸らしながら、懸命に言った。

「少し、階段を上るだけ。ね？」

「大人の階段昇るー！君はまだ、シンデレラじゃないって！君は百合だから！」

——もう、訳が分からん。

「ねえ、見てよ……。」

僕は静かな声に釣られて、百合の方向を見た。彼女は一糸まとわぬ姿で立っていた。

意外としつかりした身体に膨らみかけの乳房。

その下は……18歳以下は閲覧不可か？

「私のこと、嫌いなのか？」

「いや……そんなわけじゃあ……。」

僕はとにかく抜け出そうとしたが、雪姉はしがみついたまま、寝ている。

「じゃあ、受け止めて……。」

ふらっと百合の身体が揺らぐと、僕に倒れかかってきた。

僕は咄嗟にその身体を受け止めた。

すう……すう……。

百合は寝息を立てて寝ていた。

はあ……良かったのかなあ……？

僕は彼女の唇にキスをする、静かに寝かせてやった。

しかし……あの兄貴め。バレンタインだからって嫉妬しやがって。

——それはともかく、これはどうやって抜け出せばいいのかな？

カラオケでキススル？後編♪（後書き）

ハヤブサです。

ギリギリ健全の範囲に収めたつもりです。

さすがにこの話はR15までは行かせません。

強いて言うなら、R12……？

えー、ともかく、この長い前後編を見て頂きありがとうございます
た。

出来れば、感想を頂けると嬉しいのです。

お待ちしております^^

居候が増加スル？

僕はあの後、姉さんを無理矢理起こすと、百合に服を着させた。「こんなんじゃない、どーにもならん。」僕は唸ると、モカを抱き上げた。

姉さんは頷くと、百合を半ば引きずるように歩かせた。

僕はカラオケの部屋から出るとカウンターに向かった。

「あ、零！」兄さんが奥から飛び出してきた。

僕は拳を握りしめると、彼は慌てて言った。

「それどころじゃないんだ！これ見ろ！」

兄さんは携帯電話のワンセグを見せつけた。

『臨時ニュース。イギリスで大地震。』

外に出るとタクシーをうまく捕まえて僕らは乗り込んだ。

僕は携帯でイギリスにいる両親に連絡した。

その間に助手席にいる姉さんは、運転手さんに住所を言った。

——電話が繋がらない。

うにゃ……とモカが寝言を言った。全く暢気な奴め……。

「運転手さん。ニュースにして頂けますか？」姉さんは言った。

「あいよ。」運転手さんはニュース番組にラジオを切り替えた。

『——イギリスの地震は震度7以上を観測し、史上初のマグニチュード10以上を観測しています。津波により海岸沿いの集落はほぼ全て壊滅、という連絡を受けています。日本人生存者は不明です。日本では津波の可能性はありませんが、欧州のほとんどは津波の被害を受けている模様です。次のニュースです。』

僕は放心状態になった。

確か、研修に行った施設は海に近い。

助かったかどうか……。

と、手の中から陽気な音が流れた。ヴィヴァルディの『春』だ。つまりは、僕の携帯の着メロ。

「ハイ、もしもし。」僕は電話に出た。

『おお、家にいないから心配したぞ!』

「父さん!？」親父の声だ。

『ああ、何とか高台にある役所に逃げ込めてな。非常用回線を使つて今、お前に掛けている。』

「―――それ、まずくない？」僕は思わず突っ込んだ。

『氣にするな。それより頼みがある。』

父さんはその『頼み』を告げた。

「―――分かった。無事でいろよ。」僕は電話を切った。

「すみません。行き先変更お願いします。」

僕は運転手さんに言った。

「―――ここに来るとは思わなかったわね。」姉さんは囁いた。

埼玉県立児童養護施設、である。

僕はタクシーを待たせて、中に入った。

受付に行く。

「すみません。溝口ですが。」僕は言うと、係員が頷いた。

「溝口さんね。話は聞いているわ。ご苦労様ね。」

係員のおばさんは書類を取りだして僕に差し出した。

「これに署名してね。電話番号、住所もお願い。」

僕は渡されたボールペンでスラスラと住所を書いていった。

「じゃあ、あの子を連れてくるからちょっと待ってね。」

「姉さん、僕が書いているから、その子を引き取ってきて。」

僕は隣を見て言った。姉さんは頷く。

ええと……住所はよし、と。電話番号は……。

僕は逐一確認しながら、書き込んでいく。

「えっと、これでいいですか？」僕は書類を渡した。

「あ、はい。最後に身分証明書を確認させて頂けますか？」係員が

言う。

「分かりました。」

僕は財布から学校の身分証明書を出した。

係員は受け取ると、素早くコピーを取って返した。

「何かありましたら、こちらにご連絡ください。」

係員はそう言うのと、チラシを渡した。

「ねえ、零。」モカが脇を突いた。

「引き取る子が何か――。」

僕は分かった、と彼女の肩に手を乗せると、その子の方に向かった。

その子は、可憐な服に身を包んだ金髪の少女。

百合が手を引いていこうとするが、動きたくないのか、近くの柱にしがみついている。

僕は百合の肩に手を置いて宥めた。

そして、その少女と同じぐらいの目線になるようにしゃがんだ。

蒼い目。碧眼の少女か。可愛いな。

少女と言っても大体、十歳と見た。だが、人見知りがあるのか？

「やあ。」

「……。」

「ハロー。」

「・・・Hello。」お、返答あり。

「君の名前は？僕は零。」身振り手振りを小さく交えて、僕は言った。

「レイ？」少女は興味深げに首を傾げた。

「そう。Yes。」僕は出来るだけ優しい感じで微笑んだ。

「――私は、シャル。」

彼女はニコツと笑って言った。

「シャル。よろしく。Nice to meet you。」

僕は手を差し出した。彼女はその手を握る。

「よろしく。Nice to meet you, too。」

ホッとする僕にモカは笑顔を見せた。

「私はモカ。」そして彼女もシャルの目線になって言った。

「モカ？」シャルは囁いた。

「うん、モカ。よろしく。」モカもシャルと握手する。

「よし、じゃあ、行くか。」僕はシャルの手を握って言った。

「どこに？」シャルが不安そうに訊ねる。

「僕たちの家。Our home。」僕は答えると、彼女は明るい笑顔を見せた。

「うん。」彼女は頷くと、僕と一緒に歩き出した。

タクシーの乗せる座席がないので、僕の膝の上にちょこんとのせた。

時々、撫で撫でしてやると、嬉しそうな顔をする。

親父は、この子を預かってくれと言ったのだ。

シャルの父親は今日の午後、迎えに来るはずだったが、地震で来れなくなった。

そもそも、母親は離婚していて、仕方なしに出張の際に短期間だけ預けていたらしい。

しかし、国の補助金は外国児童には適用されず、振り込んだ費用も今日までの分。

仕方ないから、友人である僕の親父に頼んだ訳である。

フルネームだと、シャルロット・ブラック。高貴な名前だ。

まあ、イギリスの国際空港が直るまでウチで可愛がることになりそうだ。

「一緒に暮らすか。お父さんが帰ってくるまで。」

僕は頭を撫でてやりながら言った。

「うん！」

こうして、居候がまた一人増えた。

居候が増加スル？（後書き）

ハヤブサです。

コアな話題、地震ですね。

東日本大震災の被災者もたくさんいらっしやるでしょう。
お見舞いを心から申し上げます。

世の中には、このような被災者もいるのです。

今日、会えるはずだったのに……。

友人も同じような境遇の人がいました。

皆さんはそのような、心の被災者を救うことができますか？

では、またお会いしましょう。

感想、お願いします^^

新しい家族でどースル？

僕らは無事にウチについた。

「素敵なお家……。」「シャルは囁いた。

「日本語、うまいね。」「僕は手を引きながら言った。

「私、日本生まれだから……。」「彼女は微笑んだ。

「そっか。」「

僕は頷くと、家に招き入れた。

玄関を上がり、居間に案内した。

シャルはソファアに腰掛けると、不思議そうに我が家を見渡した。

「何か飲み物いる？」「僕は訊ねた。

「紅茶が欲しいです。」「彼女は言った。

僕は姉さんの方をチラッと見ると、彼女は心得たように台所に行った。

しかし、可愛いなあ。人形みたいだ。

僕が見つめていると、彼女は不思議そうに首を傾げた。

うーん、ますます愛らしい。

僕は玄関に戻ってまだ酔って寝ている百合と途中で熟睡したモカを抱えた。

ふう……。二人いっぺんに持つのはきつい……。

僕はそれぞれの寝室に手荒く寝させると、居間に戻った。

「あ、レイちゃん。お茶が出来たわ。」「姉さんは紅茶を持って言った。

「おう、サンキュー。」「僕は紅茶を受け取ると、シャルに差し出した。

彼女は受け取ると、ふうふうと息を吹きながら一口飲んだ。

「美味しい。」「ふわっと柔らかい笑顔で彼女は言った。

「おお、それは良かった。」「僕は嬉しくなってシャルの頭を撫で撫でした。

彼女も嬉しそうに顔を綻ばせた。

「シャルちゃん、今日、何食べたい？何でもいいよ。」

夜になって雪姉はシャルに訊ねた。すっかり打ち解けている。

「中華が食べたいです。」シャルは嬉しそうに言った。

「オッケー。レイちゃん、手伝って。」姉さんは張り切って言った。

僕は台所に行くと、姉さんはすでに中華鍋に油を引いていた。

僕はお玉を出して彼女に渡した。

「久しぶりね。居候が増えるのって。」姉さんはご飯を鍋に入れながら言った。

「そうだね。三年ぶりか？」僕は卵を冷蔵庫から出しながら言った。

「そうね。」彼女は勢いよくお玉で鍋をかき回しながら言った。

「おっ！これは溝口家特製チャーハンか？」

「そうよ！」姉さんは嬉しそうに言った。

そして、一気に具を投入すると、素晴らしい手つきで中身を宙に舞わせた。

溝口家特製チャーハンは母さんと姉さん、そして僕にしか出来ない秘伝の炒めしだ。

中華鍋の中にご飯を入れると勢いよくかき混ぜ、全体を温める。

そうしたら、溶き卵や具を入れて一気に炒める。

ちなみに、具は元々、電子レンジで火を通しておいてあるので、温めるだけでよし。

そして、炒める方法は、父さんが手作りで作った巨大お玉を駆使して、ご飯を跳ね上げるようにして炒める。空気が入り、尚かつ、焦げにくく食べた後に洗いやすい。そして、早い。

元々、母さんが発案した物で、僕は習得するのに二年かかった。

「ハイ、できあがり！」

大皿に盛ったチャーハンを姉さんは居間の座卓に置いた。

「わー！美味しそう！」

シャルは囁くと、小皿にそれを取って食べ始めた。百合もすっかり酔いが覚めて、降りてきた。

至極、不機嫌である。

こりゃあ、兄さん、当分家には帰って来れないな。

「美味しい。」シャルは喜んで言った。

「凄く美味しいです！ユキ。」

「そう、よかった。お代わりはたくさんあるわよ。」姉さんは嬉しそうに言う。

結局、シャルはチャーハンを三回お代わりした。

僕らが皿洗いしていると、彼女はソファで寝てしまった。

「ちよつと疲れたのかもね。」

姉さんはそう言うのと、ソファのポケットから毛布を取りだしてシャルに掛けてあげた。

「さて、部屋をどうするかだな。」僕は考えながら言った。

いろいろ空き部屋があるが、埃を被っていたり散らかっていたりするだろうから片づけるのに少し時間が掛かるだろう。夜にやるには遅すぎる。

「私の部屋は？」姉さんは提案した。

「汚しちゃまずい書類が多いんじゃない？」百合は欠伸しながら言った。

「じゃあ、私の部屋は？」モカが言った。

「いや、止めた方がいいわ。」雪姉は苦笑して言った。

「散らかりすぎているから。」

そうなの？とモカを見ると、彼女は恥ずかしそうに俯いた。

「じゃあ、百合か？そうしたら。」僕が言うと、モカが今度は首を振って否定した。

「教育的によろしくないものが置いてあるから。」
え？そうだけ？僕は戸惑った。

考えてみれば、本棚にR18指定のものがあつたようななかった
ような……。

「そしたら、僕の所になるけど。」

僕は言うど、彼女らは不満げな顔色になった。

えー、じゃあ、どうすりゃいいのよ。

——結局。

僕がソファで寝て、彼女らはそれぞれの部屋で寝る。

そして、シャルは僕の部屋で寝ることになった。

全く、これからどうする？

あー、シャルのお父さんが早く来てくれればいいが……。

複雑な家庭事情で距離がなかなか掴みにくい。

本当に、どースル？

新しい家族でどースル？（後書き）

ハヤブサです。

零は距離の取り方で翻弄される毎日。

これからどうなるのでしょうか？

そして、彼はどースル？

さて、皆さんに質問です。

この登場人物で誰が一番好きですか？

もちろん、女の子の中で。

それも含めて、感想を頂けると嬉しいです。

ではよろしくお願いします。

フレンチキススル？

放課後、僕が学校から帰ると、電話が鳴っていた。

僕は電話の受話器を取って言った。「もしもし。」

『お疲れさん。すまなかったな。』父さんは笑って言った。

父さんは例の如く非常用の電話でウチに掛けてきたようだ。

僕の傍には姉さんが心配そうに近づいてきた。

「じゃ、ちゃんと今月の振込分を増やしてよ。今、インフレでただでさえきついのに。」

僕は文句を言った。今、物価上昇中だ。

『あー、すまんすまん。ちゃんと振り込んでおく。』父さんは言った。

「で、シャルのお父さんはいつ帰ってくるんだって？」

『あー、それがだな。イギリスの空港が復帰するのに長くかかりそうなんだ。』

すると、雪姉が電話をスピーカーホンにした。

「お父様、誤魔化さないで下さい。」

『な、何をだね？』父さんの声が聞こえた。

「お父様が、『あー、それはだね。』と前置きする場合、嘘だからです。」

あ、そうなの？初めて知った。

『あ、すまん！ちよっと報道陣が来てしまった。また電話する！』

父さんは慌ただしく言うど、電話をがちりと切った。

拡大されたツイッター、という音が響く。

僕は黙って受話器を降ろした。

親父は何かを隠している。

「あ、レイのお父様は何て？」シャルが歩いてきて言った。

「ん、忙しいって。」僕は彼女の金髪を撫でながら言った。

「じゃあ、まだ帰ってこないのね。」シャルは不満げに呟いた。

「んー、仕方ないさ。さあ、テレビでも見ようか。」

僕は明るく言うと、カチッとテレビのスイッチを入れた。薄型テレビに明かりが灯る。

「――ロンドン市庁舎から中継です。」あ、ニュースだ。ロンドンの会見の映像が映った。

「今回の地震の規模は測りきれず、死傷者も一万人を越したという連絡を受けました。」

英語で喋る人の下に字幕が出た。――大惨事か。

「市長も津波に流され、先程、遺体が発見されました。暫定としてミゾグチ氏を市長とし――。」

あれ？父さんが？僕は戸惑った。

と、シャルが突然立ち上がって外に出た。

「え？どうした？シャル？」

振り返らずタタタタッと階段を勢いよく駆け上がっていく彼女。

「レイちゃん！これ！」姉さんは新聞を僕に渡した。

「三面の五行目。」

僕は言われた通り、そのページを開いた。

『市長のアーサー・ブラックが遺体となって発見された。』

僕は最後まで読まずに新聞を放り出した。

ちっ……あのクソ親父、肝心なことを隠しやがって！！

僕は颯爽と階段を駆け上がった。

二階の廊下を見ると、モカの部屋が不自然に戸が開いている。

僕は覗くと、泣いているシャルの肩を抱いているモカと目が合った。

僕が入ると彼女は頷いて僕と入れ替わった。

僕はシャルの肩を抱いた。彼女の肩がピクッと動いた。

「大丈夫か？」僕は囁いた。彼女はブンブンと首を振った。

堪えたような泣き方で、嗚咽を漏らすシャル。

僕はそんな彼女を見ていると哀しくなってきた。

僕はギュッと彼女の小さな身体を抱き締めた。

フレンチキススル？（後書き）

ハヤブサです。

奈良で作ってきました。

百合が出ていませんが……その辺は勘弁して下さい。

感想、ご意見、待っています！

もちろん、少女の中で誰が一番好きかのアンケートもお待ちします！

公園でキススル？

僕は朝早くに起きると背伸びをした。

昨日はモカに殴る蹴るの暴行を加えられて身体が痛い何のって。僕はささっと制服に着替えてバックを持って一階に下りた。

「おはよ。レイちゃん。」姉さんはすでに台所でフライパンを扱っていた。

僕が食卓について新聞を読んでいると、前にスツと目玉焼きがのったトーストが現れた。

「あ、ありがと。姉さん。」僕は礼を言って新聞をたたむとトーストを囓った。

香ばしい味わい。そして一緒に出してくれた紅茶を飲むという優雅な朝食。

僕が食事を終えて、紅茶をお代わりしているとドタバタという音がした。

「雪！何で起こしてくれなかったんですか！？」

モカが凄まじい勢いで降りてきた。寝癖は凄いいし、制服も滅茶苦茶だ。

ちなみに、僕らの学校の制服はブレザーである。

ただ、違うのは男子はネクタイで女子はリボンである。

後は、ズボンとスカートと言った違いだろうか。

「全く、高校生なのに。」姉さんは苦笑いしながらトーストを出した。

仕方ないのでモカが食べ終わるのを待ってから僕は出発した。

「まったく、寝坊ってねえ。」僕は歩きながらため息をついた。

「仕方ないのです。昨日は遅くまで勉強していましたから。」

「どうだか。」僕は首を振った。

「信じて下さい。」

「ハイハイ。」

「――何で、そんな気のない返事なんですか？」

モカは僕を睨みながら言った。

「とにかく、身だしなみを整えろよ。」僕は話題を変えるように言った。

「これでいいんです。」意地を張るモカ。

はあ、と僕はため息をついてバックから袋を取り出した。

途中の公園で無理矢理彼女をベンチに座らせると、袋からブラシや櫛を出した。

髪を梳いていくと、モカは僕に囁いた。

「何でそんなのを持ってるんですか？」

「持っていて不要な物ではないよな。」僕は曖昧に答えると、彼女の髪を整えた。

最後にモカの髪の毛をポニーテールにまとめた。

「――ありがとうございます。」

ムスツとしたように彼女は言った。

「何だよ。不機嫌だな。」僕は櫛やブラシをしまいながら言った。

「そうですか？」つーんと顔を背けながら言うモカ。

「……まだ昨日のこと気にしているのか？」

「気にしてませんよ。ええ！」

彼女は怒気を孕んだ声で言った。

あ、やべえ、地雷踏んだっぼい。

「なあ、機嫌直せよ。」僕は頭を下げた。

キラッと目を輝かせるモカ。う、これは後悔しそうだ。

「キスして下さい。」

「――キス魔？」

「そ、そそそんな訳じゃないです！バカ言わないで下さい！」

うん、このツンデレがやっぱりいいねえ。モカって感じがするよ。ホントに。

「じゃ、どんな訳よ。」

「う……。」

答えに窮したように黙り込むモカ。

僕は苦笑すると、彼女を引き寄せた。

丁寧に唇を重ね合わせると、ん、と彼女は声を漏らした。

彼女の中を探っていくように荒々しく舌を這わせる。

たちまち、モカの息は荒くなっていく。

と、彼女が舌を絡ませてきた。僕もそれに答える。

やがて、息が続かなくなって僕らは唇を離れた。

「ふう……良かったです……。」彼女は囁いた。

「うん、まあ、それはいいんだけどね。」僕は公園の時計を指さした。

「あ！遅刻しちゃいます！」モカは慌てて立ち上がった。

「ま、今日はサービスっーことで。」

僕はスツと彼女の身体を抱きかかえた。

「え、ちょ、にゃ、何するんですか!？」

彼女がじたばたするが、しっかり抱き留めて離さない。

「よし、じゃあ、行くぞ。」

僕はロケットスタートを切った。

勢いよく全力疾走する。

このスピードなら学校まで余裕。

と、言う訳で僕は高校に高速で飛び込んでいったのだった。

モカはとても恥ずかしかったらしく、後にボコボコに殴られるのだった。

チケットを争奪スル？

ズーンという効果音がぴったりな空間である。

そこは我が家の居間だ。

そして、その重苦しい擬態音を作り出しているが……。

四枚のチケットだ。

「どうするの？お兄ちゃん。五人も行けないわよ？」

百合が沈黙に耐えきれなくなったのか、僕に言った。

そう、シャルが居候として来たので、父さんが送ってくれたチケットの枚数が足りなくなっていたのだ。

「じゃあ、僕が残れば、」

「ダメ！」

複数の声が響いた。少女達は僕のことを見つめている。

——僕はどうしたら良いのだろうか……？

友人に訊ねてみるか……。

「ちよっと、トイレ。」僕は断ってトイレに行った。

そして、便器に腰掛けると携帯電話を操作した。

『もしもし。』すぐに友人は出てくれた。

「おう、吟？」

『その声は、零君ではないか？』大仰に吟は言った。

そう、これが我が友人、吟詠だ。

学校やどこでも頼りになるし、彼の父親は我が父や祖父とも知り合いだ。

まあ、家族ぐるみの付き合いだな。

「ちよっと相談があるんだが。」僕が切り出すと彼は咳払いした。

これは言いたいことがある時の彼のクセだ。僕は口を閉じた。

『大体、予想が付くが、多分、居候のことだろう。学校で新しい居

候が増えたと言ったことから、きっと君の父親が送ったという旅券が足りないのではないのかな?』

「――ご名答。」

『ふう……君は何で単純な答えを導けないのかな?』

「悪かったね。凡才で。」僕はため息をつきながら答えた。

『ほう、君はいつから植物になったんだね?』

「それは盆栽。焦らさないで教えてくれよ。」

『……フフフ。』

――楽しんでやる。吟の野郎……。

この前もモカを抱きかかえて学校に飛び込んだことでいろいろ弄られたし。

『そうだな。解決の余地がある策は二三思いついたが、その中で一番効率の悪い手段を教えてあげよう。』吟は楽しそうに言う。

「意地悪な奴だな。」僕は毒づいた。

『おやあ……? 教えなくてもいいのかい……?』

うわあ、嫌な奴だ。ホントに。

「教えて下さい。」僕は頼んだ。

『仕方ないなあ。それはゲームをして勝った人間が行けばいい。』

「いい手段かあ?」

『うむ、公平な手段で行えば文句は言うまい。』吟は朗々と言った。

『まあ、うまく行かなかった場合は僕にもう一度連絡をくれ給え。

何とかしよう。』

彼はそう言うのと、電話を切った。

一方的だなあ……。本当に。

僕はため息をつくのと、便器から腰を上げた。

僕は居間に戻ると、トランプを取り出した。

「ん? 何するんですか?」モカが訊ねる。

「ポーカー。負けた人間がここに残るって訳。」

僕は説明しながらカードを配った。

「Oh... 私得意。」シャルは言ってカードを取った。各自、カードを取って確かめる。

「Chengeは一回でいい？」シャルは訊ねた。

僕が頷いて承諾すると彼女は三枚、カードを捨てた。

僕の手札はバラバラだ。到底、揃えられる物ではない……。

結局、自分は五枚、カードを捨てた。

他の少女達は用心してカードを捨てる。

全員、カードを入れ替わった所でカードをオープンした。

「three card.」シャルが勝ち誇ったような笑みを浮かべてカードを見せた。

「あ、僕、フラッシュ。」

「ストレート。」と、雪姉。

「フォーカードです。」と、モカ。

「ロイヤルストレートだよ。」そして、百合。

あ、やばっ……。

シャルの顔がひび割れている。

漫画的な表現だとピシッという効果音が走っているのだろう……。と、携帯電話が震えた。

『零君、恐らくうまく行っていないだろ?』吟だ。

「決めつけるなよ……。その通りだけど。」僕は唸った。

『安心し給え。もうすぐ郵便が届くはずだ。』

「は?」

僕が訝しんでいると、ピーンポーンとチャイムが鳴り響いた。

「あ、ハニー。」雪姉がパツと立ち上がって玄関に向かった。

まもなくして帰ってくると、彼女は速達便の封筒を抱えて戻ってきた。

ピリピリと封筒を空ける姉さん。

彼女が封筒を逆さにすると、ヒラッと一枚の紙切れが落ちてきた。

旅行のチケットだ。

「まさか、お前が？」

僕が問うと、吟はクスツと笑った。

『まあ、そうだね。大分前にこのことを予期しておじさんに手紙を送っておいたんだよ。この前の誕生日プレゼントも渡してなかったしね。』

「――最初から言えよな。」

「すまないねえ。君の戸惑っている様子が面白くてさ。」

「え……電話で確認できるかい。全く。」

「んー、分からないかなあ。君の耳にはもう肉声が聞こえているだろう？」

「――え？」

確かに聞こえるが……。

バツと僕が振り向くと、窓から吟がヒョコツと顔を出していた。

「よっ。」彼はニヤツと笑った。

こいつめ……さっきから見やがったのか……。

「お土産、忘れるなよ。」吟詠は手を振って言う、背を向けてパツと駆け出した。

あんにゃろ……。

――でも、結果オーライな辺り、彼に感謝すべきか……な？

チケットを争奪スル？（後書き）

ハヤブサです。

今日はキスが入らないネタでした。

今回、感想をたくさん頂き、感謝感激であります。

文章構成が悪い、というご指摘が多かったのですが、これはライトノベル風に書いた物でして・・・。

お読みになられていない方がいらっしゃるのなら、『さよならピアノソナタ』や『機巧少女は傷つかない』をご覧ください。

と言う訳なのです。

愛想を尽かさず、ご愛読頂ければな。と私は思っております。

感想、引き続きお待ちしております^^

旅行でキススル??

「ええ湯だわ。」

カポーン、と音を響かせながら僕は呟いた。

樽で出来た風呂とまた風流な物である。

桶もまた木製で本当に温泉って感じだな……。

空もまた青い……。

「お兄ちゃん、食事の準備が出来たって。」

百合の声が部屋から響いた。

おう、と答えて湯船から出た。

僕は予定通りに長野の温泉に来ていた。

で、僕らが泊まっている旅館の部屋はなかなか豪勢だ。

ここでゆっくり出来るとは父さんも粋な計らいをしたもんだ。

ご飯に味噌汁、漬け物、高原野菜のサラダ、魚、そして苺と素晴らしい食事が卓に並んでいた。

「Oh, It's great!!」

シャルは達者な英語で言った。

「本当に美味しそうね。」雪姉も席につきながら言った。

「じゃ……。」僕はウーロン茶をみんなのコップに注いだ。

僕は自分のコップにウーロン茶を注ぐと、それを掲げて言った。

「乾杯ッ!」

「「「かんぱーい!!」」」

四人の明るい声が響いた。

「ん、美味しかったです。」モカが呟いた。

食後、僕は思い思いに休んでいた。

モカはボツと外を見ているし、百合と雪姉はポーカーをやっている。

る。シャルは風呂だ。

ちなみに、僕はモカと外を見ていた。

これと言って面白いものは見えなかったが、月が綺麗だった。

ふと、カシヤツと言うシャッター音が背後でした。

僕が振り返ると、姉さんが夜景をデジカメで撮っていた。

「ポーカー、どうだった？」僕は訊ねた。

「勝ったよー♪」百合が擦り寄ってきて言った。

よしよし、と頭を撫でてやると嬉しそうに彼女は微笑んだ。

姉さんは撮り終わると、バックからパソコンを取りだしてデータを取り込み始めた。

「これからお父様にメールを打つの。」雪姉は説明した。

「へえー、どうやるんですか？」モカが興味深げに近寄った。

彼女はワープロこそ出来るが、メールの送信は苦手らしい。

カタカタと文面を打ち込んでいる雪姉とそれを覗き込むモカ。

姉妹じゃないのに姉妹に見える光景だ。

家族、だもんな。

「さて、散歩にでも行くかな。」僕はそう言って立ち上がった。

「あ、私も行くー。」百合も立ち上がって言った。

夜風が気持ちいい。

宿の散歩道を二人で歩いていた。

あまり、人はいない。

「いい風ねー。」百合は僕の腕に絡みつきながら言った。

「うん、そしていい満月。」僕は頷きながら言った。

暫く歩いていくと湯気が立ち上っていくのが見えた。

「あ、足湯だー。」はしゃいだ声で百合はそっちの方に走っていった。

僕が歩いて追いかけると、百合はベンチに座って足湯に足を入れていた。

「いい湯だよー。入ったら？」彼女は僕を見上げて微笑んだ。

僕は頷いて、ベンチに腰を下ろした。

そして履き物を脱ぐと、足湯に足を入れた。

じんわりと足から温かさが感じられる。

百合が僕の手の手を重ねてきた。それもまた、温かい。

「ねえ……。」百合が囁いた。

「将来、どうするの？」

僕は唐突な話に少々戸惑ったが、率直に答えた。

「やっぱり、公務員になって父さんみたいに働きたいな。」

「そう言う意味じゃなくて。」少し苛立ったように百合は言った。

「いつか、お兄ちゃんもお嫁さんを貰うんでしょ？その時、どうするの？私達がいるのよ。」

僕は返答に詰まった。確かにこの状態を維持するのは難しい。

「どうしたら、いいんだろうな……。みんな好きだし、みんな大切だし、みんな家族だし……。」

僕は呟いた。

満月は輝いている。

「いい方法ならあるよ。」百合は僕に言った。

「どんな？」

「私と駆け落ち。」

「バーカ。」僕は笑って彼女の額をちよっと小突いた。

「そんなこと考えているならもう少し成績を伸ばしたらどうだ？」

「どうして……。」百合は呟いた。

「え？」

「どうして、妹としか見てくれないの……？」

彼女は肩を振るわせながら言った。

「いつも、いつも……何で？キスも普通のスキンシップって考えているの!？」

「そ、そんなことはねえよ。」

僕は凶星を突かれて戸惑いながら言った。

「僕にとって百合は信頼できるパートナー。ずっと、一緒に居続け

た女性だ。」

「じゃあ、私のこと、お嫁さんにしてくれる？」

間髪入れずに彼女は涙目で訊ねた。

え？何でそうなの？

「いや……それは……法律上よろしくないかと……身内だし。」

僕はお茶を濁した。

「あ、大丈夫よ。民法だと三親等以内の親族がダメなの。私達、四親等よ。」

えっと……父親が一親等、祖父が二親等、叔父が三親等だから……。

「あ、そっか。大丈夫なのか。」僕は思わず呟いた。

「じゃあ、私のこと、お嫁さんにしてくれるの？」

ずいっと迫ってくる百合。

激情にほんのり頬を染め、体温が感じられ、心地よい香りでぐらつと僕の感情が揺れた。

だが、理性を総動員させて、僕は彼女の肩を掴んだ。

「実際、そんなこと言っているけど結婚できるのは男は18歳以上だ。それに未成年は親の同意が必要なんだぞ？」

「おじさんは『ウチの息子なんぞ、好きに持って行け！』って言うっています！」

く……親父め、面倒なことを。

「それでも、僕はまだ17だ。まだ結婚は出来ない。」

「だったら許嫁になって下さいッ！」

はあ……何やってんだろ。僕たち。

「まあ、来たる 때가 来た たらだ。」

僕はそう言っ て百合を抱き寄せた。

「それまでは我慢してくれ。な？」

百合は何か言いたそうに口を開いたが、反論出来ないように唇で彼女の口を塞いだ。

「じゃあ、戻ろうか。」僕は足湯から足を上げた。

「もう、お兄ちゃんったら、ずるいんだから。」
百合は囁くと、腕を僕の腕に絡ませた。

この地でもやっぱりこうなっていくんだよね……。

旅行でキススル??

翌日、僕は宿から出てその周辺の商店街や出し物の店の通りをブラブラした。

シャルと百合の手を引いているんな出店を覗いてみる。

「へえ、野沢菜漬けですか。」モカが興味津々に見る。

「ま、それは後でお土産用に買おうか。」僕は言った。

暫く行くと、『射的』と大きく書かれた看板を引っ提げた出店が見えた。

「レイちゃん、射的やりましょ！」雪姉は無邪気にはしゃいでいる。そう言う彼女はあまり見ないだけに、こっちも楽しくなってくる。僕は射的の店に入った。

「Oh... Rifle?」シャルは僕の手を握りながら訊ねた。

「んー、まあ、それに近いかな。」僕は苦笑して答えた。

しかし、ライフルって、この頃の娘さんはよく知っているなあ……。

そう思いながら、カウンターに歩いていく。一回三百円か。

「五人、お願いします。」

僕は財布から札を二枚取りだして言った。

「兄ちゃん、両手に花だねえ。」

カウンターにいたおじさんは豪快に笑いながら札を一枚僕から取った。

「あ、千五百円じゃないんですか？」僕は残った札を見ながら言った。

「サービスよお。サービス！」おじさんは手を大きく振りながら言った。

「はあ、ありがとうございます。」僕は頭を下げた。

奥から、おばさんが出てきて十発の弾が乗った皿を五つと銃を僕に渡した。

まあ、玩具の銃だな。当たり前だけど。

「お手本を見せるわね。」おばさんはポンツと銃口に弾を押し込みながら言った。

お婆さんは、僕を射的場に案内した。

台があつてその向こうにまた台があり、その上に缶がピラミット状に3つの山があつた。

普通の射的だな。と思つていとお婆さんがサツと片手で銃を構えた。

パン！

いい音と共に缶ががらがらと崩れ落ちた。

あ、この人、プロだな……。僕は瞬時に悟つた。

「じゃ、頑張つてね。」お婆さんはそう言つて銃を手放した。

「ほい、じゃあ、姉さん。」僕は銃を姉さんに渡した。

彼女は頷くと、浴衣をはためかせながら構えた。

当たり前だが、台より向こうに行つてはいけない。しかし、向こうの台までは十五メートル程度あろうか。

しかし、彼女が撃った弾は見事に缶の山の根本に命中した。

がらがらと音を立てて崩れ落ちる。

「流石、叔父様の秘書……。」百合は呟いた。

「あれ？父さんって銃撃の訓練させていたっけ？」僕は訊いた。

「いえ。でも、輪ゴムを的確な所に放つ訓練はさせたよ。」

——え？そんなことして何の意味があるの？

姉さんは、パンパンと連射して見事全ての缶を崩した。

おお、と店のおじさん、お婆さんがどよめいた。

「じゃ、次、レイちゃんがやってね。」雪姉は笑つて僕に銃を渡した。

「しゃーねーな。」僕は苦笑いして銃を構えた。

店の人が缶を元通りに並べ直すのを確認すると、銃を片手で構えた。

照準が定まる一瞬を狙つて、引き金をそつと引き絞つた。

軽い手応えとパンという音。

そして、がらがらと言う音が響いた。

「すごいねえ……兄ちゃん、跳弾で二列同時に崩したよ……。」

おじさんが感心している。

「まあ、ハワイで親父から教わりましたから。」

僕は苦笑いしながら答えつつ、もう一度銃をパンツと撃った。

やはり缶は音を立てて崩れた。

おお、と皆がどよめいた。

「え……零、見ないで撃ちましたよね。今。」モカが驚愕したような顔で言った。

「うん、大体位置は把握していたから。」僕は何でもなさそうに答えて百合に銃を差し出した。

「あ、うん。」彼女は銃を取って自信なさげに銃を構えたが、銃を下げた。

「おじさん、銃なしでもいいんですよね？」百合は訊ねた。

「あ、ああ。」おじさんは戸惑いながら頷いた。

「お、おい、まさか、百合……。」僕は震える声で言った。

こくんと百合は頷くと、掌に弾をのせてそれをデコピンする姿勢になった。

「お嬢ちゃん、そんなんじゃ届か……。」「おじさんが笑って言った時だった。

バチンッ！がらがら……。

おじさんの笑いが凍り付いた。

「こいつ、指相撲だけは強いんですよ。何故か。」僕は説明した。

お、おお、と見物客がどよめく。

———というかこの人ばかりは何？

そのままデコピンで弾を弾き飛ばすというやり方で全て缶を崩した。

百合は笑いながらモカに銃を渡した。

「え……私、自信ないんですけど……。」

彼女は戸惑いながら銃を構えた。が、その姿勢は不自然だ。

パンツと言う音と共に一番上の缶を弾き飛ばした。

そして、その缶が缶の山に当たり……。

がらがら。

「ある意味すげえ……。」僕は呟いた。

どよめく観客を完璧に無視して、モカは第二弾を放った。

当てずっぽうな方向に弾は飛んだが、その先には先程崩れた缶があった。

そしてその缶が弾かれ、缶の山にぶち当たった。

沈黙がその場を占めた。何だ、この幸運は。

「あ、終わっちゃいました。」モカはそう言って銃をシャルに渡した。

シャルは微笑むと、台に近寄った。だが、背が足りない。

僕は前に出て彼女の身体を持ち上げた。

シャルは一息つくと、銃を構えた。

——気のせいだろうか。彼女の脈動が一瞬止まった気がしたがらがらがら。

気が付くと缶が全て落ちていつていた。

え？一発で？

わっと背後で拍手が巻き起こった。

すげえな、こりゃ……。

僕はシャルを降ろすと、彼女の頭を撫でた。

シャルは嬉しそうに微笑んだ。

あの後、出るのが大変だった。

いろいろ訊かれたり、彼女らはナンパされたり……。

で、みんながみんな、僕のことを彼氏ということにしたもんだから……。

「う……もう外に出られねえよ。」僕は風呂に浸かって呟いた。
「Oh……sorry。」シャルは申し訳なさそうに言った。

「ん、大丈夫。それよりさ……。」「僕は彼女を一瞥した。

「ここ、風呂場だよ？」

シャルは身体にバスタオルを巻いて一緒にお風呂に入っていた。彼女は平然な顔つきで言った。

「No problem. 大丈夫でしょ？ By the way .
」

By the way——『ところで』って意味だ。

「ご褒美はくれないの？」

「賞品だったら山ほど貰っただろ？」僕はため息をついて答えた。

あの後、野沢菜漬けとかお米とか旅券とか貰った訳だ。ま、みんなうまかったからな。

「レイからは貰ってないよ。」シャルは不服そうに言った。

僕は彼女を一瞥した。白い肩が艶めかしい。

こいつ……育ったら綺麗だろうな……。

僕はため息をつくとき、彼女の肩を引き寄せて唇を重ね合わせた。しばらくして身体を離すと、シャルは嬉しそうに笑った。

「レイからやって貰ったの、初めてね。」

僕は苦笑して手を振って出ると合図した。

「褒美はくれてやっただろ？」

「Oh……足りないわよ？」シャルは口先ではそう言ったものの、素直に出て行った。

——あー、やべえ……。

股間の物が静まるのに暫く待つ必要があるそうだ。

旅行でキススル?? (後書き)

ハヤブサです。

いやー、長くなってしまいました。

みんなやるのをきっちり書きましたからね。

中略しても良かったですけど・・・。

やっぱり、みんな射的がうまい設定にしたかったんですね。
どうしてか？

それは後ほどの話に関わるからですね。

乞うご期待？ですね。

さて。どこまで旅行を引っ張れるか・・・。

感想、引き続きお待ちしています。

旅行でキススル??

ふと、夜中に目が覚めてしまった。

気が付くと、シャルと百合が僕にしがみついていたのだ。

全く……これじゃ暑苦しくて寝られないよ。

僕はそろそろと布団と彼女らの腕から慎重に抜け出した。

ふう……汗でぐっしょりだ。

僕は洗面所に行って顔を洗った。

あ、そう言えば、ここの宿の大浴場って二十四時間フル稼働だっけ。

そんなことを思い出すと、僕は換えの下着とタオルを持って外に出た。

大浴場更衣室に入って衣服を脱いだ。

汗で濡れていたので裸になるとかなり涼しい。

僕は入った。

カポーン、という温泉らしい桶の音が響く。

……ん?

誰か先客がいるってことか?

僕は辺りを見渡すと……。

「あ、レイちゃん。」

——いた。姉さんだ。

浴槽に桶を浮かべて湯に浸かっている。

「……何で、姉さんがここに?」

「この時間帯は女湯は掃除だから男湯で混浴になるの。」
「はあ、なるほど。納得。」

「姉さんも眠れないの?」

「ええ。月も綺麗だから少し月見酒でもってね。」

姉さんは桶の中からとっくりを取りだして酒を飲んだ。

僕は湯船に浸かると、ジャバツとお湯があふれる音がした。

「いる？」雪姉はとっくりを掲げながら言った。

「未成年に何を勧めているんだよ。」僕は苦笑して答えた。

「でも、夜は例外……でしょ？」

姉さんは微笑むと、とっくりに酒を注いで僕に渡した。

僕は受け取ると、啜るように酒を飲んだ。

芳醇な味わいで、お腹が温まる気がする。

「間接キスね。」雪姉はクスクス笑って言った。

「いつもやっているだろうが。」僕も笑って言った。

彼女は笑うと、目を閉じて僕に顔を近づけた。

僕は彼女の顔に手を添えると引き寄せるように唇を重ね合わせた。

と、スツと口の中に彼女の舌が入り込んできた。

ん……いつになく積極的だな……。

僕はそのディープなキスに答えながら彼女の髪を手に絡めた。

湿り気を帯びたその髪は艶めかしく、美しい。

やがて、息継ぎのために唇を離すと、雪姉は微笑んだ。

「忙しかったから、こんなにゆっくりキスするのは久しぶりね。」

彼女の言葉に、僕は頷いた。

「父さんには感謝しているよ。」

「そうね。」

フツと笑い合うと、僕は湯船から上がって一旦、水を浴びた。

「酔っちゃった？」姉さんは湯船の端に頭を擡げて言った。

「うん……ちょっとね。」僕は苦笑いして答えた。

「もう少し……大人になったら？」

彼女は湯船から出て言った。

一糸纏わぬ姉さんの身体が月明かりに輝いて見える。

「姉さん……。」

「雪と呼んで。」

姉さん……いや、雪は僕の手を胸に掻き抱いて言った。

上目遣いの媚びるような視線が僕を貫く。

「――雪、ダメだよ。」

理性を総動員して僕は声を絞り出した。

「どうして、貴方は私の領域に入って頂けないのですか？」

雪は詩情を交えて、謳うように言った。

「貴方の聖少女領域を侵してしまったら、私達は元の場所戻って来れない。」

それに対抗して、僕は精一杯の言葉で答えた。

「どうしても……なのですか？」

「はい。」

「――そのわりには。」

詩的な雰囲気捨てて雪は囁いた。

「下半身がお元気なようで。」

「――それは、気にしない方向で。」

僕は浴槽に浸かって月を眺めた。

綺麗な月光である。

「やっぱり、話で聞いたお祖父様みたいには行かなかったわね。」

雪は僕の隣で囁いた。

「残念。酒乱は百合と隆史だけで十分だよ。」

僕は肩をすくめて言った。

「隆史？」彼女は首を傾げた。

「あー、知らなかったっけ？」僕は笑って続ける。

「従兄弟の一人だよ。祖父ちゃん、何人子供がいたかな？」

えっと、父さんに叔父さん……。

「んーっと、多分七人か。それでその直系の孫は僕を含めて――十人だな。」

「えー、じゃあ、一さんを除くから百合を含めて八人の従兄弟が？」
雪は驚いたように言った。

「もっとも、生きているのは百合を含めて四人だけだね。」

阿安時代の影響で花子と義経の二人が亡くなっていた。

花子は飢え、義経は強盗に入られた時に殺された。

最後の楊貴は行方不明だ。多分、死んでいる。

「残念ね……。」

雪は月を扇いで呟いた。

「犠牲者を出さないためにも。」僕も月を扇いで言った。

「この世に、僕の手で平穏を戻さないと。阿安の傷跡を早く消すために。」

「レイちゃんだったら出来るよ。私の心の傷を消せたのだから。」

雪は背中を見せながら言った。

いつしか見た、忌まわしき過去の火傷。

「ありがとう。」

僕は微笑んで言った。

「頑張ろう。共に。」

雪も微笑むと、湯の中で僕の手を握った。

旅行でキススル？番外編？

「ふー、楽しかったー。」百合は笑って言った。
帰りのバス。山を下っていた。

雪も満足そうにニコニコしている。

いやー、いろんな意味でみんなと進展できたし。
リラックスも出来たから本当にいい旅行だったー。

——ぞくつ。

背筋に殺氣らしき物を感じた。

若干、猫が『構ってくれー』という視線に似ている。
あー。

前言撤回しよう。

みんなと進展できたわけではない。

モカとはあまり関わっていなかった。

神様は不公平だよなー。考えてみたら。

何か飯を奢ってやるか。二人っきりのデート。

何て考えているとケイタイが震えた。

いや、音も出ている。マナーモードのはずなのに。

しかも、その音が……。

キュインキュインキュインという不吉な音なのだ。それがいろんな所から共鳴している。

運転手さんが察したように路肩にバスを停めた。

「え？なに？何の音？これ？」百合が戸惑ったように言う。

「バカ！これは緊急……。」僕が言いかけた時だった。

ガツンッ！

その表現がまさ相応しい、押し上げるような地震が起きた。

「全員、座席にしがみつけれッ！」誰かが叫んだ。僕はその通りに座席にしがみついた。

グラッグラッグラッと非常に激しい揺れが僕らを襲う。

「きゃあああああああああああ！」シャルの叫び声が響く。
と、僕の土産物ばかり詰めた紙袋が僕に勢いよくぶつかった。
その勢いで思いっきり吹き飛んで窓にガンッと激突する。

バコンッ！

え？僕が思ったときには身体が斜めに傾いていた。

あ、そう言えば、この窓って非常口だっけ。

非常口をぶち破って、外に放り出されてしまったようだ。

「零ッ！」モカの叫び声が聞こえた。

手に柔らかな感触がした。

と、次の瞬間、肩を地面に強打した。

反動でまた肉体が浮き上がる。

僕は体勢を立て戻そうと足掻きながら下を見てギョッとした。

崖……。

僕は物凄い勢いで崖に落ちた。

「う……。」「右肩がズキズキする。

起きあがると、草の茂った所に僕はいた。

そうか……。運良く草の多い所に着地して助かったのか。

「うう……。」「

呻き声が聞こえて振り返ると、モカが倒れていた。

「大丈夫か！？モカッ！」僕は駆け寄って揺すった。

「……。零……。？」彼女は細く目を開けて言った。

良かった。意識はあるみたいだ。

彼女は身体を起こして辺りを見渡した。

「少し、場所を移動しよう。崖が崩れたら大変だ。」僕は言うと、手を差し伸べた。

モカは頷いて、立ち上がろうとしたが、顔を歪めた。

「いたっ……。」

僕は屈んで、モカの足を見た。

血が滲んでいる。切り傷ならまだいいが、もしかしたら捻挫や骨折かも知れない。

僕は彼女の足の下に手を通し、もう片方の手で彼女の胴体を支えると、立ち上がった。

ようは、お姫様だっこである。

モカは頬を僅かに赤らめた。

……よくこんな状況で恥ずかしがれるな……。

僕は彼女を抱いたまま、移動を始めた。

「ここらでいいか。」僕は空き地のような場所にモカを降ろした。

僕は彼女に膝枕をしてやりながら考えた。

どうやら、地震にあってバスから放り出されたらしい。

ケイタイに入った緊急地震速報によれば、震度六以上の地震が長野県を襲ったと示されている。

とにかく、助けを呼ばないと。

僕はケイタイを開いた。

『圏外』

オレンジ色の文字が目飛び込んできた。

マジかよ……。

僕は携帯用のポーチバックを開いた。

タオルに、懐中電灯、ティッシュ、水、鉛筆と紙にガム、そして

何故かスチールウール。

……何で？

まあ、いい。

僕は辺りに転がっていた薪を拾い集めた。

ある程度集まると、僕は紙を取り出して軽く丸めて薪の下においた。

そして、懐中電灯の中の電池を取り出すと、その十極と一極にスチールウールを繋いだ。

途端に熱くなり、スチールウールが赤くなった。

僕はすかさずティッシュをそれに近づけると、すぐに発火した。

そのティッシュを紙と薪の方に投げた。

うまく火が回り、パチパチと機嫌良く火を爆ぜさせた。

「——零ってすごいね。」モカは驚いたように言った。

「これぐらい常識だって。」僕は微笑むと、適当に薪をくべた。

「助けがくるのを待とう。」

「うん。」

救助が来るのは……いつになるのだろうか。

旅行でキススル？番外編？

「ね、零。」「ん？」

たき火で暖まっているとモカは唐突に言った。

春とはいえ、長野はまだ寒い。

しかも、もう日が暮れている。

「私のこと、好きですか？」

む……いきなりの直球だ。

「——好きだよ。ってことは僕のが好きなのかな？」僕は問いを混せて素直に言った。

「バ、バカ、そんな話していませんよッ！」

うん、ツンデレだ。こいつ。

と、モカは真面目な顔に戻って言った。

「じゃあ好きだったら、何で他の人を……。」

「…………。」

僕は黙って苦笑した。モカも釣られて小さく笑う。

「——今の日本の法律じゃ、みんなを愛することは出来ないんですよ？」

そうだ。その通りだ。

そいや、祖父ちゃんはどうやってあんなに結婚したんだろう？

確か、四人だよな。うん。

「そうだな……。」

百合にも言われたこの事実。

家族であり続けるにはどうしたものか……。

思案していると、モカはプツと吹き出した。

「真剣に考えちゃって……零って優しいですね。本当に。」

「——まあ、どうかな。」

僕は曖昧に言った。実際、優しいかどうかも分からない。

「そんなのが優しさだったら……人は傷つくだけじゃないかな。」

モカは僕の言葉に微笑んで言った。

「お母さんから昔聞いたことなんだけど、好きって言葉は諸刃の剣なんですよ。」

「——ほお。」

「自分の感情を押しつけて相手を傷つけかねない……そんな反面を持つ剣。」

「……………」

僕はその言葉を胸にしまい込んだ。

「そんな覚悟を込めて、私はさっき聞きました。」

僕は真面目な彼女の頭に手を乗せた。

「——成る程ね。じゃあ、僕のこと、好きなんだ。」

「だ、だからそんな話してませんって!!」

「お。」 案外、早く来たものだ。

ヘリコプターがバタバタと音を立てて飛んできた。

まあ、さすがに警察に連絡しただろうし。

——あれ？

おかしいことに気が付いた。

夜になったら、警察は捜査を切り上げる。

だんだん近づいてくるヘリ。

そして、轟音を立ててヘリは着地した。

中から警備員の人が走ってきてヘリの轟音にかき消されないように叫んだ。

「大丈夫ですか？ すぐに中に入って下さい！」

「ハイ！」僕は叫び返すと、モカを抱きかかえてヘリに乗り込んだ。一体……………どうして……………？

ヘリは程なく長野市民病院に着いた。

僕は診療所にモカを運んで待合室にいと、雪が現れた。

「レイちゃん、無事で良かったわ。」

「サンキュー。助かったよ。」僕は礼を言った。

「いや……感謝するならシャルちゃんに。」

雪は僕の背後を指さして言った。

「え？どうということ？」

僕は振り返ってシャルを見た。

——否、シャルと共にいる老婆を見た。

見たところ、外人だな。欧米って感じ。

「さて、貴方がレイね。」老婆は唸るように言った。

「ハイ、そうですが。」僕は用心深く答えた。

「——まあ、無事で良かったわ。私の差し上げたヘリが速くて助かったでしょう？」

ああ、なるほど。この人がヘリを寄越してくれたんだ。

「ありがとうございます。」僕は頭を下げた。

しかし、シャルとの関係が読めない。

「しかし、貴方がねえ……シャルロットの婿、第一候補ですか。」

「……え？あ、はい。」

僕は否定しかけたが、シャルがジェスチャーで否定するな、と懸命にアピールしたので百八十度方向転換して答えた。

「失礼ですが、マダム、お名前をお訊ねしてもよろしいでしょうか？」

僕はへりくだって訊ねた。

そうしたのが正解だった。

老婆は胸を張って言い放ったのだった。

「エリザベス・ブラックよ。シャルロットの祖母でスワン財閥の社長よ。」

旅行でキススル？番外編？（後書き）

ハヤブサです。

旅行編が終わりました。

地震が度々、起こっておりますが、実はこれは……？

そして、シャルロット・ブラックの祖母、エリザベス・ブラックが登場です。

財閥の権力者である彼女の目的は！？

向後ご期待下さい。

感想お待ちしております！！

勅令による呼び出サレル？

——さて。

あれから僕らはエリザベスさんの手配した車で帰宅した。
シャルの強い希望で、僕らの家にまだ留まっている。

が、イギリスに帰らされるのも時間のうちかもしれない、と彼女は言った。

僕は静かに頭を撫でることしか出来なかった。

翌朝。

「溝口零様ですか？」

雪と一緒に買った買い物の帰り道に背後から声を掛けられた。
振り返ると、スーツの男が立っている。いかにも紳士のようだ。
不自然な点と言えば腕に輪ゴムがたくさんあることかな。ちよつと跡がついている。

「はい、そうですか。」

僕が答えると、紳士は近づいてきて、紙を差し出した。

「えー、何々？」雪が受け取って読み上げた。

「『勅令、溝口零殿を召喚すべし。手段は問わぬ。』……え？」

「よろしいでしょうか？」紳士が礼をして訊ねた。

「いやいやいや……。」

僕は思わず後ずさったが、後ろの誰かにぶつかった。

「あ、失礼。」僕は振り返って頭を下げて……。

え？スーツの人がまたいるんですけど？

「御用事でもございますか？」紳士は訊ねてくる。

「あー、ほら、買い物の帰りだし――」。

「お買いになった物は私どもが責任を持ってお宅にお届けします。」

「夕飯も作らないと――」。

「ご心配なく。目的地には一流のシェフがごいます。」

「いやいや、従姉妹や居候の飯がねえ――」。

「お宅にはシェフを手配致しますので。」

「……へー。」

思わず感心してしまった。ここまで手際が良いとは。

「御用がないのであれば早速こちらの車で。抵抗なさってもお乗せしますよ。」

「――あの、僕の人権ってどうなっています？」

「天皇陛下の前では無力です。」

「……へ？今何と？」

僕は思わず聞き返した。

「天皇陛下の前では無力です。」

紳士は淡々と繰り返し返した。

あー、そっか。さっき勅命って書いてあったもんね。うんうん。

「では、よろしいでしょうか？」

――う、抵抗の余地なし。

「分かりましたよ。江戸城でも皇居でもどこでもどうぞ。」

「どちらも同じですね。」

む……この紳士、なかなか突っ込みの素質があるではないか。

「あの、私も付いて行って宜しいでしょうか？」雪が遠慮がちに訊ねた。

「どうぞ。」紳士は頷いた。

「ではこちらに。」彼は手を上げると、目の前に車が颯爽と現れた。

「……あの、これ、トミタの試作段階の二酸化炭素車じゃないですか？」

「おや、よくご存じですね。」紳士は驚いたように言った。

親父が話していた。従兄弟の友人がトミタの技術開発部で最近、完成させた。

CO₂を吸収し、Cを排出されるのはO₂だけというクリーンな車だ。

「では、お乗り下さい。」

ハイハイ……常識にあわねえな。うん。

僕は百合にメールを送ると、紳士に目隠しをされた。

「……何で？」

「行く先を知られてはならないからです。お嬢様も失礼……。」

しかし、真っ暗だと妙な感じだ。

三半規管は強い自信があるから酔うことはない。

と、手に柔らかい物が触れた。

思わずビクツとなったが、雪の手だと分かった。

僕は雪の手を優しく握ると、彼女も握り返してきた。

「……失礼ですが、お二方。」紳士の声が響いた。

「はい、何でしょう。」

「お付き合いなさっているんですか？」

「は？」思わず口から間抜けな声が出てしまった。

「雰囲気がそうだと言うのか、何というのか……。」

「付き合っていますよ。」僕はため息をつきつつ、答えた。

「キスはした仲ですけどね。」雪が余計なことを付け足す。

「……それは付き合っていると言うのではないのですか？」

「いえ、零君は皆に愛を注ぐうとしてする献身的な男子なので。」

「……雪さん、それ、嫌みっぽくない？」

「いいえ、そんなことはありませんよ？」

うん、絶対嫌みだ。間違いない。

「——まあ、そういうことにしておきますか。」

紳士はクスクス笑い声を立てて言った。

「そういうことってどういうことだよ……。」

僕は一人でぼやいた。

「着きました。」紳士の声がした。

目隠しを取られると、一瞬、眩しくて目を閉じた。
が、目を開けると、そこは城だった。

——城？

「ここはどこですか？」

「帝聖城です。」

——え？

「住所は？」

「それを言ったら目隠しをした意味がありません。
はい、そうですね。」

「ささ、中へどうぞ。」

僕らは中に通された。

通された部屋は和室だった。

和服の美人さんが出てきて、抹茶を点ててくれた。

——破格なすごさ。

「陛下は間もなくお見えになります。暫くお待ち下さい。」
美人さんはそう言うのと、退いていった。

僕らは反応に困りつつも、とりあえず抹茶を飲む。

む、結構なお点前で。

「でも、何で天皇陛下がレイちゃんを呼び出す必要がある訳？」
雪が沈黙に堪りかねたのか、そう言った。

「心当たりなら、ある。」

僕が呟いた。脳裏に年老いた婦人がよぎった。

サ―……。。

背後で襖が開く音がした。

「待たせましたね。溝口零君。雪さん。」

男が僕らの前に現れて正座をした。

「私が帝聖天皇こと、秋人だ。」

天皇と大切なキズナ？

「さて……くつろぎ給え。」

天皇陛下はそう仰って、僕らの前で腰を下ろし胡座をおかきになった。

いや……天皇陛下の前でくつろぐなど……出来ねえって。

威圧感に肌がピリピリするのを感じる。

と、突然、陛下はクスッとお笑いになった。

「全く、緊張しすぎだって。身内だと思って良いから。てか、身内だし。」

「あ、ハイ……え？」

僕は素直に頷きかけたが、その前に聞き捨てならぬ事を聞いてしまった。

「——今、身内と？」

「ああ、身内だよ。遠い遠いね。」

そう言うと、陛下は巻物を取り出しになった。

「ええと……ここだね。」

陛下がお指しになった所を僕と雪は覗き込んだ。

平成天皇の曾孫の大天野様と繋がる矢印は——。

『溝口 真次』

は？

あのじじい、天皇家まで誑し込んでいたのか！

「うん、大天野様は身分を隠されて真次さんに近づいたみたいだね。その間、皇居内は大変だったよ。皇女が行方不明になっているんだ

から。しかもセキュリティが甘いなんて知れたら大変だから宮内庁が隠蔽に全力を注いでねえ……。発見したときには二人に子供が出来ているし……。」

陛下はお困りになったようにおっしゃった。

「強いて言うなら、僕らははとこ同士って訳。お分かり？」

「はあ……。僕はとりあえず、頷いた。」

家系図をよくよく見ていないから分かんのだが……。

「じゃあ、僕のことは秋人って呼んで。ため口でいいからさ。」

「あ、ハイ……。じゃなかった。うん、分かった。」

僕が答えると、陛下——秋人はにっこり笑った。

「でね。今回呼び出したのは、スワン財閥の件なの。」

「僕とシャルを結婚させたい訳ですね。」

「……よく分かったね。」

秋人は驚いたように言った。

まあ、はつきり言って予想はついていた。

帝聖政府はイギリスの財閥から支援を受けていたことを父を通して知っていた。

だったら、もう筋が通る。

血の関係があれば、より多い支援を受けられる訳だし。

「その通りだよ。あと、ため口でいいって言ったよね？」

「……今すぐは決められませ——決められないよ。」

「そうだろうね。他の選択肢も用意してあるよ。」

秋人は手を二回叩いた。

奥から和服の少女が現れる。

美しさのあまり、僕は息を呑んだ。

「僕の妹の小夜だよ。」秋人は自慢げに言った。

「この子と結婚するのもアリ。」

「——どちらにしろ、結婚、という選択肢しかないんですか？」

雪が静かに言った。——あの、怒ってますか？

「いやいや……零君に許嫁や婚約者がいれば自分は手を引くよ。」

「溝口零のお嫁候補はすでに三名おります。」

雪は鋭く切り込んだ。おお……って三人？雪にモカに百合……あ、三人か。

「へえ……零君、結婚する意味は今のところあるのかい？」

「いや、未だ無いけど……。」僕は答えた。その脇で雪がキッと睨んできた。

「だったら、シャルちゃんと小夜をお嫁候補入れておいて下さい。」

「小夜さんは今日、会ったばかりの零と結婚したいのでしょうか？」

雪は諦めない。頑張るな！

すると、小夜さんはススッと僕に近づいて手を取った。

「貴方様を一目見た瞬間、胸の奥底から貴方に惹かれるのを感じました。」

そして、僕の手を胸に掻き抱いて、上目遣いで僕を懇願するように見た。

ふと、サクラのような良い香りがふわっと香る。

「もし宜しければ、私を貴方様の嫁とし、その愛を私に注いで下さい。」

「あ……考えさせて。」僕は掠れた声で言うのが精一杯だった。

雪は、演技なのでしょう？という視線を秋人に投げかけたが、その秋人自身も驚いている。

「……マジで？」

ああ、天皇陛下の口からそんなはしたない言葉が零れ出ているよ。うん。

「陛下、そろそろお時間です。議会となります。」

ふと、襖の隙間からそんな声が聞こえた。

「ああ、環境基本法のあれか。分かった。すぐに向かう。」

彼は頷くと立ち上がった。

「そうだ。零君、今日はもう遅いから泊まってくれよ。部屋と着替え、飯は準備しておくから。」

え？そんな時間？僕は腕時計を見ると、すでに6時だった。

「小夜。後は任せたよ。」「はい、お兄様。」
うん、お兄様か。いつか呼ばれたいよな。

——その頃、溝口家では。

「美味しいねー。」「美味しいです。」

食卓にはキラキラと輝く黄金のスープ、朝露を思い浮かべる鮮やかなドレッシングがかかった野菜。

つまりは、一流の料理、ヴィヤベースとサラダが並んでいる。

「お代わりはお作り致しましょうか？」

溝口邸厨房——もとい、台所には一流シェフが包丁を振るっていた。

「お願いします。」モカはサラダを上品に食べながら言った。

シャルは満足げにスープを食し、百合もいかにも夢見心地といった顔である。

「……あれ？結局、お兄ちゃんってどこに行ったのかな？」

そして、家主がどうなったのかすら分かっていない……。

皇女とキススル？

秋人が去った後、小夜さんはスツと部屋を出た。数分後、食事のお膳さんまのにつけを持ってきた。

「御飯に御味噌汁、秋刀魚之煮付でございます。」

おお、完璧だ。言い方が。

何か全て漢字になっている気がする。

僕らはいただきます、と言って食べ始めた。

秋刀魚の煮付けを一口。うん、生姜も利いていてうまい。

「お口に合いますでしょうか？」小夜さんが心配そうに聞いてくる。

「美味しいよ。」僕は頷いて言った。

するとぽあぁと彼女の顔が明るくなった。

「おかわりはたくさんありますから！」

「ありがと。——ね、これって貴方が作ったの？」

僕は訊ねた。小夜さんは嬉しそうに頷く。

「ダメね。」おっと。

「今は春よ。旬じゃない秋刀魚を使うのはあまりよろしくないわ。毒舌意見の雪さんだ。まあ、それにも一理ある。」

何か、姑みたいだな……。

「そうですか………気を付けます。」

小夜さんは悄々とうなだれた。

「雪、そんなこと言うなって美味しいんだから。」

僕は可哀想に思えて、フォローを出した。

「——まあ、そうだけど。」

雪は不機嫌そうに言う、パクパクと御飯を食べた。

「お、このお米も美味しいね。ブレンドかい？」

「はい！分かりますか！？」

「うん、ひとめばれにササニシキ……うーん、奥ゆかしい味だな。」

「他にもあきたこまちを少量と琵琶湖米という米も混ぜております。」

「さすが、つやつやふつくらだな。」

「ありがとうございます。」

僕と小夜さんは楽しく話に花を咲かせた。

「ふう。」

カポーンといい音が響く。大浴場である。

あの後、おかわりをたくさん頂き、お風呂に入った。

広くて一人で使うには申し訳ないサイズである。

いや、長野のもすごかったが、これもすごい。

しかも温泉らしい。いや、敵わない。

「し、失礼します。」

——おや？

僕がそちらに顔を向けると、小夜さんがタオルを持って立っていた。

……。

とにかく、股間は隠そう。

「……ここ、男湯だよ。」

とりあえず、僕は言うのと、慌てて小夜さんは言った。

「あ、あの、れ、零様のおお背中をお、お流ししようと……。」

「あ……そう。」
なるほど。

ちなみに、僕は先程身体を洗ってしまった。

やはりちゃんと先に汗を流さないかね。

だが、この御厚意に甘えて背中を流して貰うか。

「ああああ、あの、ご迷惑でしたらさがりますが……。」

「ああ、いや、是非とも流してくれるかい？」

僕は股間をタオルで隠して湯船から上がって言った。

小夜さんの顔がぱあっと明るくなる。

「はい！喜んで！」

ここまで来ると、男冥利に尽きるってもんだ。

僕は風呂椅子に腰掛けると、小夜さんは和服の袖をたくし上げてゴシゴシと背中をタオルで擦り始めた。

「い、いかがでしょうか？」

「うん、気持ちいいよ。」

「あ、ありがとうございますっ！」

おお、嬉しいか。そんなに。

じゃばつと背中を熱いお湯で流すと、彼女は立ち上がった。

「では、これで。」

「うん、ありがと。」

僕も立ち上がりながら言った。（ちなみにしっかり股間は隠している。）

「あ、はい！では——ひゃっ！」

小夜さんは退こうとして見事に足を滑らせていた。

何故か石鹸を踏んでいる。このせいか。

僕は落ち着いて彼女の背中に回り込んでお姫様だっこの容量で抱きかかえた。

と、その拍子に唇と唇が触れ合う。

頬を朱に染める小夜さん。

……………。

——可愛い。そして柔らかい。

あ、いや、わざとじゃないんだぞ？ 言うておくが。

「あ、あの——。」

彼女の声で我に返った。

そして、今、どのような体勢か思い出す。

「ご、ごめんっ！ 大丈夫っ！？」

僕は慌てて彼女を起こした。

「だだだ、だ、大丈夫です。ありがとうございます。」

頭を下げて小夜さんは退いた。

今ので嫌われちゃったかなあ……………。

風呂を出ると、小夜さんと秋人が立っていた。

「や、会議が終わったよ。小夜は役に立ったかい？」

「ええ、もう。」僕は頷いた。

「じゃあ、まだ時間があるから、男同士少し話し合わないかい？」

秋人はそう言うのと、襖を開けて部屋に誘った。

「さあ、小夜のことをどう思うかい？」秋人は開口一番それと言った。

「美しいですね。」

「そんなのが聞きたいんじゃないよ、相棒。あと敬語抜きな。」

「――相棒？」

「あいつのこと、好きか？」

う、核心に迫る一言だ。

――よし、正直に言おう。

風呂場で抱いた感情は紛れもなくこうだ。

「好きだ。惚れたよ。」

「そうか。それは良かった！」

秋人はうんうんと頷いた。

「でもそれじゃあ、シャルや溝口家の居候に申し訳が立たないというか……。」

「なるほど。みんなを愛している訳だな。」

「だけど、本当に小夜さんのことが好きになった。」

「うん、でも捨てることができない。」

「そう。だから、どうしたものか……。」

僕が思索していると、秋人は小さく笑った。

「よし、私が何とかして進ぜよう。今日は寝ようか。」

彼はそう言うのと、僕を案内した。

「あー、でも部屋が三つしかないんだ。」

雪と小夜さんと合流して思い出したように秋人は言った。

「あの……零様、良ければですが、ご一緒にお休みになりませんか？」

小夜さんは控えめに言った。

ああ、嫌われた訳じゃなかった。

しかし、雪が強く言いはなかった。

「ダメよ。私とレイちゃんと一緒に寝るのだから。」

「いや、しかし、それだとお客に一部屋しか使わせなかったといわれ、天皇家の名誉がなあ。」

「く……ならば、秋人様と小夜さんがお休みになれば……。」

「それだと、近親相姦だと言われて天皇家の名誉が関わってくるなあ。私と雪殿と一緒に寝るのであれば全てうまく行くんだけど……イヤだよな？」

おお、うまいな。秋人。ここまで選択肢を絞らせるとは。

「失礼ながら嫌としか言えません。ならば秋人様とレイちゃんが同室になれば……。」

「男同士！？それはどうかな……。」

これだけは僕の意見を主張した。どうせ寝るなら一人か女と一緒に良い。男なんて修学旅行以外ではお断りだ。

「く……ならば、私と小夜さんで……。」

「大事な妹を部外者と寝かせたくない……っていうのが私の心情かな？」

ひくひくと雪は頬を引きつらせた。

確かに血縁の上では雪は溝口の養女とはいえ、血は繋がらぬ部外者だ。

秋人、超うますぎる。

よって、結論、一つしかない。

「よ、よろしく願います！」

小夜さんは嬉しそうに頭を下げた。

皇女と……？

小夜さんは僕を案内した。

「こちらです。」

襖を開けて通される。僕は室内に入った。

可愛らしい部屋だな。それが第一印象だった。

引き出しなどの上にぬいぐるみが置いてあり、壁紙も和室って感じを崩さないようにしているとはいえ、またその淡い桃色がかわいらしさを引き出す。

「あ、あまり見ないで下さい……。」

「ああ、ごめん。」僕は苦笑した。

「えっと……どうぞ。」

小夜さんは椅子を出して置いた。

「あ、どうも。」僕はその椅子に座る。

「夜も長いので、少しお話しましょう。」

「そうだね。」僕は頷いた。

——沈黙。

気まづくなる一方だ。

「そう言えばさ、何で僕に惚れたの？てか、マジで惚れたの？」

「はい。」小夜さんは頷いた。

「その鋭い眼光、さらにその中に含まれる優しさ。」

「あ、そなの。」

「はい、そして何気ない仕草が女心を揺さぶるのです。」

「はあ……。」

「私はもう、一目惚れしてしまいました……運命的な物を感じます。」

「いや、そこまで言われると恥ずかしいんだけど。」

「ああ！申し訳ありません！」

「いや、別に良いんだけどさ……。」

僕は苦笑すると、言葉が続けた。

「小夜さんもっとマシな人間を好きになればいいのに。その容姿だったら靡かれない人なんていないぜ？」

「しかし、貴方様に惚れてしまったのです！ しかも貴方様に唇は奪われてしまった！」

「いや、ね、あれは、事故だから――」。

「責任取ってやる、とか言ってくれないんですか？」

「……よくそんなこと、知っているね。お嬢様だからそういうの知らないと思った。」

「ここにしても本は読めます。」

なるほど。僕は視線を本棚に移すと、少女マンガなどが置かれていた。

「責任取れるなら取りたいよ。だけど国規模で関わってくるんだよ？」

「ですよね……」。

小夜さんはしょぼんと肩を落とした。

「あのさ、」僕は気になって聞いた。

「僕の布団ってあるよね？」

布団が一つ敷かれており、他には本棚、机、筆筒などはあるのだが……。

「え？ 布団は私の一つだけですけど。」

彼女はキョトンとなった。可愛いなあ。

――じゃなくて。

「え？ じゃあ、僕は床で寝なきゃ行けないのかな？」

「私と一緒に寝てくれないのですか……？」

う、疑問を疑問で返された。

「あ、いや、そしたら、僕、狼になっちゃうかも知れないし。」

「そうしたら、私は羊になります。」

「ふ……なるほど、うまいもんだ。」

僕は思わず笑ってしまった。

「お褒めにあずかり至極恐縮でございます。零様。」

「ああ、苦しゅうない。」

そう言った応酬をしていると、お互い可笑しくなってクスクス笑い出した。

「面白いですね。零様は。そ、その、あ、貴方様のもっとすすす好きになってしまいました。」

顔を朱に染めて小夜さんはどもりながら言った。

「そんなに無理して言わなくてもいいよ。それに敬語じゃなくても構わないし、零って呼び捨てでいいから。」

「そ……そう？」

「おお！」

凄い親近感が湧いて尚一層愛らしく感じる！

素晴らしい。うん。

「な、何か変？」

「いや、すごい愛らしく感じられてさ。」

「え、あ、う……。」

おや？顔がゆで卵の如く赤くなっちゃって……。

「そ、その、それって、私のことがすすす、好き……ってこと？」

小夜さんの顔はもう爆発しそうなぐらい赤い。そして可愛い。

「うん、好きだよ。」

ボンッ！あ、爆発した。

あー、いや、さっきから不思議に思えるんだけど何でこんなに自分が冷静でいられるのかなー。

好きな人と一緒にいて、告白されて、自分の想いも告げているのに。

あ、彼女が明らかに暴走しているからだ。

ほら、火事場で自分よりパニックっている奴を見ると冷静になるってあれ。

「小夜さん、落ち着いて。」

「ひゃ、はいっ！」

いや、落ち着けてマジで。

「コホンコホン。」

ペチンペチン、ボフボフ。

えっと、順番に解説すると小夜さんがまず咳払いをした音、次に顔を叩いた音、そして枕に顔を突っ込んだ音が最後って訳だ。

「お待たせしました。」「おう。」

彼女は顔も元通りにし、冷静になっていた。

「では、そ、そしたら私のことも小夜と呼んで。」

「おう、分かった。小夜。」

「!？」

お、記号だけ喋った的な感じになってまた顔を真っ赤にした。

「じゃあ、小夜と僕はもう俗に言う、その、恋人同士っていうので、いいのかな？」

僕は話を整理するように言った。

でも、何だ、落ち着いていても恥ずかしい台詞を言うときは恥ずかしいな……。

「は、はいっ！よろしくおねがいますっ！」

「ああ、よろしく。」

僕らは握手した。彼女の手は熱かった。

「じゃあ、早速――。」

そう言うと、小夜は明かりを消して僕を布団に誘い始めた。

「っておいおい、準備が出来ていないって！」

「大丈夫。ティッシュとかあるし。」

「いやいや、そっちの準備じゃなくてこっちの準備！」

「零は然るべき物を突き出していればいいから。」

「然るべき物って……とにかく、こっちの心の準備が……。」

「男だったら、覚悟を決めて下さるよね？」

小夜はジッと真っ直ぐに僕を見た。

あ、いや、これは反則だと思う。

若干乱れた着物に、潤んだ瞳、布団の上で女の子座りしているこ

の体勢は。

しかもそれが月光で照らされている。

いや、誰がこんなシチュレーションを作ったんだよ。

神様ってのがいたらぶん殴ってやりたい。いや、マジでさ。

でもそんなことを言うと、またすごい状況に陥るような……。

覚悟を決めよう。

「――分かった。」

そうだ、僕の初めてを捧げるときが来たのだ。

僕は布団の中に入ると、小夜は静かに帯を引いて着物を脱いだ。

月光の元に露わになる裸体に僕は息を呑んだ。

美しい……。

「早く――。」

彼女の細い声に我に返ると、僕も衣服を脱いだ。

「さあ……狼になって私を食べて。でも優しくね。」

「ああ、分かっている。」

月光が、静かに降り注いでいた。

皇女と……？（後書き）

ハヤブサです。

えー、タイトルを見て不審に思われたと思いますが、まあ、ストーリーに言うには難しい言葉でして。

とにかく、零君は運命的な出会いを遂げ、そして結ばれました。しかし……それに対して雪はどう思うのか。

そして、すっかり蚊帳の外であるモカ、百合、シャルは？……さて、皆さん。

貴方でしたら、このような状況に陥ったらどうしますか？この事実を隠しますか？公にしますか？それとも……？

感想、意見、お願いします！

皇女が引っ越してクル？

「ただいま。」

僕は家に帰宅した。

「お帰り、お兄ちゃん！」

百合が飛び出て抱きついてくる。

「ダメだよ？ 無断外泊なんて。雪姉に何にもされていないよね？」

「ハハハハ、何、心配するな。」

「モカは？」

「学校だよ。お泊まり先でお休みの電話したの？」

「ん？ いや、していないよ。」

「えー、何かさっき電話が掛かってきてね。公欠になっているってモカが。」

秋人が連絡したのか。さすが、天皇陛下。実に手回しがいい。

「そいや、お前、今日学校は？」

「えー、こっちは休みなの。」

イーだ、って顔をして、そして顔が固まった。

「ん？ どうした？」

「お兄ちゃん……後ろの人は？」

「ああ、紹介するよ。新しい同居人の——。」

「小夜です。よろしくお願いします。」

後ろに立っていた和服の少女——小夜は礼をした。

「あ、ハイ、どうも。」

百合はパツと頭を下げた。

どうも、彼女の気品がそうさせてしまうのかも知れない。

「じゃあ、荷物は後で来るんだっけ？」

「あ、うん。だからとりあえず衣服だけ……。」

「分かった。じゃあ、上がろうか。あ、百合？」

僕は小夜の荷物を受け取りながら言った。

「あ、何っ!？」

「——んな大きな声出さなくてもいいのに。」

「ご、ごめん。それで？」

「あ、うん、お茶をいれてくれないかな？」

「分かった。」

落ち着きが無くキョドキョドしている。

やっぱ、いきなり過ぎたかなあ。

「じゃあ、まずはさ、同居したら？」

秋人は朝、朝食をみんなで食べている時に言った。

「鉄は早いほうに打った方がいいし。」

「ええ、そ、そうですね。零さえよろしければ……。」

「あ、いいよ。家族が増える分には賑やかでいいし。」

雪はこのやりとりを訝しげに見ていた。

「ねえ、昨日の夜、何かあったの？」

「「いや、何もっ!」」

あ、しまった。明らかな何かあったような感じだ。

秋人は目玉焼きを食べながらニヤニヤ笑っている。

フォローしろよ。おい。

「——何があったの？」

「あー、いや、それはね、この味噌汁にレモンが入っていると思われるぐらい意外なことだよ。」

「え？この味噌汁にレモン入っているの？」

「あ、おう、微妙な果汁が酸味を出して良い感じだろう？」

「そんなわけないでしょう!？」

あ、誤魔化そうとしたけどなあ……。

「雪さん。」秋人はニヤニヤしながら口を挟んだ。

「これはさ、二人の秘密であって無理矢理こじあけちゃいけないパ

ンドラの箱なんだよ。」

「しかし……。」

「雪さん、君は零君の私生活に口を挟む権利があるのかい？」

「う……。」

「一応、養女という訳で姉妹だ。だがね、血のつながりというのは重要でね。これで結婚云々が関わってくるんだよ。」

「まあ、そうですね。」

「だけど、これでも扶助の義務なども異なってくる。つまり、言いたいことは分かるね。」

「——はい。」

おお！何だか分からんが丸め込んだ。さすが天皇陛下！

「じゃあ、小夜。早速行っておいで。」

「はい、お兄様。」

という事の顛末である。

だからさつきから雪はいるかいなか分からないような感じで背後にいたのである。

百合も、哀しいかな、スルーしていたのでその存在は文章にしたら分からないのだ。

同室でいいや〜っと。

僕は自室に小夜を招き入れた。

「よっと。」僕の部屋に彼女の荷物をおいた。

「じゃあ、後で母さんの部屋から筆筒や布団を持ってくるから。」

「布団は一つで充分でしょ？」

「あ、そっか。じゃ、下に降りて少しお茶でも飲もうか。」

「うん。」

僕らが居間に入ると、百合が三人分のお茶を丁度いれ終わっていた。

「どうぞ。」「ありがとうございます。」

ガチガチに緊張している百合に対して、小夜は落ち着き払っていた。

「美味しいですね。お兄様のことを敬愛してなさっているのですね。」

「そ、そんなじゃあ……。」

さらに殺し文句で顔を真っ赤にされた百合。
褒められる事なんてあんまりないからなあ。

「そいや、シャルは？」

「ん、老婦人とお出かけ。」

ふーん、ブラックさんとね。

「じゃあ、話そうか。百合は祖父ちゃんの孫だし。」

「ん？」百合は首を傾げた。

「口外無用の話だよ。」

僕は前置きすると、祖父と天皇家が繋がっていること。その諸々関係などで天皇に呼び出されたことを説明した。

「へえ……。」「それは興味深いことを聞いた。」

「だろう？——っておい、吟！」

「いやあ、すまんね。」吟詠は立っていた。

「家宅不法侵入罪だぞ。」

「まあ、許し給え。インターホンを押したが反応が全くなく、ノックもしたがそれでも反応がない。仕方ないのでドアノブを捻ってみたら開いていたのでこれは昼ドラでよくある展開で君の死体でも転がっているのかと思って入ったら面白いことを聞いてしまったただだ。」

「あ、ごめん。昨日からインターホンが壊れていたの。」百合は口を押さえて言った。

「う……じゃあ、非はないって訳か。」

「いや、厳密にはそうではないがね。君が警察に突き出そうと思えば突き出せる。だが——。」

「突き出したら今の話を掲示板に手当たり次第に貼り付けるって言うんだろ？」

「そゆこと。」

吟詠の顔を見ながら僕はため息をついた。

敵をたくさん作るが、こいつは一回恩を受けた人間にはきっちり返す。

かく言う僕もその一人だ。

「ばらさない、よな？」

「まあ、ね。その辺はがっちり保証するよ。」

こう言う時はこいつはしっかり守ってくれる。

「あの――。」小夜は話が飲み込めないようだ。

「ああ、文脈から判断するのに天皇家の血を引くお嬢様で溝口零の嫁第一候補の小夜さんかな？」

「あ、はい、その通りです。」

「僕は吟詠。こいつは吟と呼んでいるが、好きに呼んでくれていいよ。」

「あ、よろしくお願いします。吟さん。」

吟詠は微笑んで小夜と握手した。

「土産話が期待できそうだなあ。」

「お手柔らかに頼むよ。」

「ハハッ、そうする。じゃあな。」

彼は毎度の如く上機嫌で帰っていった。

と、突然、ゾクツと後ろで殺気がする。

「…………嫁第一候補だって…………？」

「へえ…………そんな関係なんだ…………。」

二人の同居人が、仕事人に豹変していた。

「止めるよ？ 皇女がいるんだからな？ な？ 話せば、ぎゃあああああああ！」

真っ昼間ら断末魔の叫び後が響いた。

皇女が引っ越してクル？（後書き）

ハヤブサです。

忙しいので予約掲載に頼っています。

すでにデビルヴァーヴァアは18日までぎっしりと更新予約を入れています。

2、3日、間を空けてですがね。

大分、この話は入れ込んだじやうんですよね。

もちろん、こちらの話もですよ！

さて、皇女が引っ越してきましたよ！

でも、宮内庁が黙っちゃいないでしょうね。きっと。

それを秋人君はどう口封じするのか！？

もしくは・・・？

さて、シャルロットがどうなるかも楽しみです。

零君はすっかり小夜さんに惚れちゃっているみたいですけど。

お互い蜂蜜みたいにべったりで周りが見えていない・・・？

さて、地味にいり吟詠君です。

これは私一押しの登場人物でしてね。

自分の移し身と言っても過言ではないですね。

彼らの動きに注目して下さい！

・・・では、『機巧少女は傷つかない』って本を読みましょう。フフ。

感想、アイデア、お待ちしております。

風呂でまたキススル？

『全く、んな中途半端な関係が続けていくからそうなんだよ。』

父親の有り難いお言葉が胸に突き刺さった。

僕は昼間の同居人（仕事人？）達の仕打ちでもはや精も根も尽きていた。

んで、それで父親から平均、月に一回の『調子はどうだ？』コールが来たのだった。

それで、僕はこれまでの経緯を部分部分に話した。ということである。

「——元々、誰のせいだよ。」

『お前だな。』

「あんただろうがっ！」僕は猛烈に突っ込んだ。

『親に向かってあんたって……。まあ、いい。何故そう思う？』

「父さんが引き取ってくるからこうなるんじゃないか。」

『おう？それは営業上の都合だが？雪は秘書のために。そして、モカはこの仕事に就いた上、一人は引き取らなくては建前がつかんから引き取ってきた。百合は、まあ、お前が引き取ったんじゃないか。』

「う……まあ、そうだけど……。」

『とにかくだ。お前が白黒はつきり付けないからそうなるんだろうが。で、お前はとうしたい？誰と結ばれたい？』

『結ばれたいって言う段階じゃあなあ——。』

そう言うのと辺りに視線をやった。誰もいない。

念のため、外に出てそこでも誰もいないことを確認して小声で言った。

「僕としては小夜と結ばれたい。」

『そうか。じゃあ、そうすればいい。』

「安直に言うなあ……。』

『安直じゃないか。それともお前、今のグダグダな感じが気に入っているのか?』

「いや、そんなことは……ないぞ。」

『その空白は何だ。全く……。』

電話の向こうで父さんが、はぁ、とため息をついた。

『一回、横浜の老人ホームに行つてこい。』

「は? 何で?」

直後、電話の向こうからドサツという音がした。

まさか、転けたのか?

『お、おい……お前、自分の祖父がどこにいるか知っておけ。』

「あー、祖父ちゃん。」

そうだ。真次祖父ちゃんは横浜の海に見える老人ホームで暮らしている。

ぴんぴんしているが、何故か腰痛が酷いらしい。だからホームに入つたそうだ。

老人も大変である。

『あの人は女の天国を創り出した人だ。参考になるだろう。』

「あー……うん、分かつた。」

出来るなら、会いたくない気もするが……。

何となく、昔から女にガンガン手を出している。

伝説に寄れば、最大7人いてきっちり一週間に一日、一人ずつ愛したそうだ。

『こっちはイギリスの復興で大分帰国にも時間が掛かりそうだ。シヤルロットちゃんはどうか?』

「ああ、元気に暮らしているよ。」

『まさか、お前、彼女にも手を出していないだろうな?』

「まさか、そんなこと……ないぜ。」

唇は……アリか?

『はぁ……分かりやすいな。お前。』

父さんはまたため息をついた。

『とにかくだ。この子の祖母さんは富豪さんで帝聖政府も厄介にな
っているんだから少しは丁重に扱わないとまずいんだし……。』

「ああ、最近会ったよ。」

ぶっ、と電話越しに吹き出す音が聞こえた。

『マ、マジか。で、お前のことは？』

「えっと——シャルロットの第一婿候補……みたいなこと言って
いたけど。」

『ますます厄介だな……。ってことは皇女が家にいるのもその関係
か。』

「ああ……うん。」

そのへんまでは話していなかった。

僕は補足説明を行った。

『——え？ウチって天皇の一族だったの？』

「みたい。」

『……帰国したら父さんに問い質そう。あ……。』

電話の向こうで何やら話し声が入った。当然ながら英語だ。

Heyとかaccidentとか聞こえたから何かあったのだろ
う。

『すまん。用事が入った。』

「火急なんだろ？すぐ行けや。」

『——お前、英語うまくなったな。じゃあ、頑張れよ。』

そこで父さんは電話を切った。

「零？」僕は後ろから声を掛けられて振り返った。

「ああ、小夜か。」小夜が立っていた。

「どうしたの？こんな外で電話して。」

「父さんとね。さ、家に戻ろうか。」

「うん。」

僕は小夜の手を引いて家の中に戻った。

夕食を終えると、風呂に入った。

雪は百合の宿題を手伝っていて、モカとシャルはチェスをやって
いた。

で、僕と小夜で皿洗いを済ませて風呂に入ってたって感じた。
まあ、ウチではこんな家族だから当番表と風呂の時間割を作って
進めているのだ。

便宜上、即席で僕の時間帯に小夜が入っている。

ちなみに、今日は僕が皿洗いでモカが料理、百合と雪が掃除で、
シャルは休みだ。

そして風呂の順番は百合、雪、モカ、僕、シャルの順番だ。
一人当たり40分。延長は最後の人のみ有効。
という訳で僕は悠々と湯船に使っているのだ。

ああ……生き返るう……。

「お、お邪魔します……。」

カララ、と誰かが入ってきた。

間違いなく女だ。男だったら怖い。警察に通報している。

こういうのも時々あるので僕は落ち着いて腰にタオルを巻きなが
ら後ろを向いた。

「誰？」「さ、小夜です。」

「え、あ、おう……どうしたまたそんなことを。」

僕は言う、彼女は少し困ったように言った。

「あの、零の時間帯に私が入るので……。」

あちゃあ……そうだった。

何で誰も気付かなかったんだ。全く。

「あの――背中、流しましょうか？」

「うーん、若干敬語なのは気のせい？」

「あ、いえ、そんなことは――はっ！」

可愛い奴め、緊張すると敬語になってしまうらしい。

「まあ、いいや、背中、流してくれる？」

「あ、はいっ！」

僕は風呂を上がって風呂椅子に座ると、小夜がゴシゴシと背中を流し始めた。

「うん……いつ背中を流して貰っても気持ちが良いな。」

「ありがとう。零に言って貰えると、一番嬉しい。」

う……何だろうな。この子、人の心を掴むのがうまいな。

じゃばっとお湯が掛けられて綺麗に石鹸が流された。

「サンキュー。」僕は湯船に戻っていく。

「……………」小夜は何か物欲しげな顔で見ている——のは気のせい
いか？

「——あ。」僕は思い当たってしまった。

「この前のハプニングは無いぞ？」

「え、あ、いや、そんなのを望んでいた訳じゃ……………」

慌ててわたわたと否定する小夜。

「いつでも言えって。キスして欲しいならさ。」

僕は浴槽の縁に顎を乗せて言った。

「キスなんて、減るものじゃないぜ？現にウチんちはキスが挨拶
みたいなものだ。」

「え…………じゃあ…………お願い、していいの？」

「おう、もちろん。」

僕は浴槽に足をついて立ち上がった。

小夜は僕より少し背が小さい。そして浴槽も普通の床より少し低
い。

なので、丁度良い高さになるのだ。

そして、少し遠慮がちに唇を重ね合わせる。

「ん…………あう…………はあ……………」息継ぎの時の声が艶めかしい。

そこから、濃密なキスへと変わっていく。

お互いの舌を求め合う。

そんなディープキス。

「O h . . . S o r r y .
」

英語が聞こえた。

——あ。

時間だ。

「ごめん。シャル。すぐ出る。」

「あ、も、申し訳ありません！」

僕は頭を下げると、そそくさと浴室を後にするのだった。

風呂でまたキススル？（後書き）

ハヤブサです。

風呂ネタ二度目……三度目？いや四度目ですが勘弁下さい。

ふぁ……8月5日1時に完成です。

眠いです……。

宿題も終わらせないと……。

身も心も健全な高校生です。ただちょっとめんどくさい人間なので
す。

感想お待ちしています……。

天皇の城でキススル??

帝聖学園、美術室。

僕はそこでカリカリとデッサンに勤しんでいた。

これも文芸部の一貫……って訳じゃない。

少し、事情がある。

まあ、それは後々お話しするでしょう。

「よお、零君。」

「ああ、吟か。」

僕は木炭を置いて脇にいる友人の顔を見た。

「女性の絵画とはまた粋なもので。」

「あはは。吟はどうしてまた？」

僕はお茶を濁しながら、訊ねた。

「ああ、美術部の友人から助けを求められてね。新人歓迎用の……あれだ。分かるだろう？」

「ああ……。」

もうすぐ新学期となる訳だが、そうになると新入生が入ってくる。

その時の美術部勧誘のためにでっかい絵画を毎年作っているのだ。

「僕のノルマは終わったけどね。」

「ほー。」

僕は木炭を再び取ると、またデッサンの続きを始めた。

「―――また、あの絵画を見ていたね。」吟は笑いながら言った。

う、何というか鋭い奴だ。奴が話している間、僕はチラとモノリザの贋作を見ていたのだった。

「あの絵画を見ていると、素晴らしいと思うが個人で利用方法は違うようだね。ただ見て感嘆するか、デッサンの元にするか、それを元にまた贋作を作るか、または悩みをぶつけてみて答えを見つけてみようとする奴もいる訳で。」

「回りくどいぞ。吟。まあ、いつものことだが。」

僕ははあ、とため息をつきながら木炭で細部の調整を行った。

「ならば、結論を言おう。また悩んでいるな？」

「当たり前。」

こいつに隠し事はしない方が良い。

なぜなら、弄られるからだ。

「フフ、この前のちよつとばかり面白い話が原因……ではなさそうだな。」

「まあ、な。」

「となれば結論は一つ。また内輪もめか。」

「——よくもまあ、そこまで当てられるよな。」

僕は半ば感心しながら言った。

「お前はそれ以外じゃ悩まない。少しは進路のことで悩めよ……。」
吟はため息をついて言った。そして続ける。

「まー、お前の家族はうまくやれば円満に行けるよ。裏を返せば——。」

「うまくやれなきゃやばいってことか……。」

「イエス。」

僕は憂鬱に思いながらもデッサンを片づけて仕舞うと鞆を持った。

「お、帰るのか。どうせなら一緒に帰ろうぜ。」

「ああ。」

僕は頷くと、吟と共に美術室を後にするのだった。

「お？」

校門で見覚えのある男が立っていた。

「零様。」その男は頭を下げた。

「天皇陛下が週末なので宿泊にいらしたらいかがかとおっしゃっておりますが。」

「あー、うん。小夜は？」

「零様次第でございます。」

さて……どうしようかな？

また車で数時間目隠しされた状態で揺られるのもなあ……。
「何だ。天皇陛下のお呼び出しか。羨ましいな。」吟は茶化して言う。

「お友達もいかがでしょうか？」

「は？」

この展開はさすがの吟も予想していなかったらしい。

僕は少し悪戯心が湧いてきた。そして言う。

「どうせだから吟、行こうか。」

「え？ いや……。」

「ずばり訊こう。火急の用事はあるのか？」

「いや、あると言えばあるかも知れないし……。」

「ないと言えないんだな。よし、行こう。」

「へ？」

僕はガシッと吟の右腕をホールドした。

「車、お願いします。」

「はい。」男がパツと手を上げると車が走ってきて止まった。

ガチャ、と扉が開くと吟を中に押し込んで、僕も続けて入った。

「じゃ、お願いします。」

「はい。」

ぶおんつと音を立てて車が発進した。

「――はあ？」

突然のことで驚きを隠せない吟。

可笑しくて仕方がない。

僕は鞆で顔を隠しながら声を出さずに爆笑した。

「あの……着替えとかは？」

「こちらで準備します。」

「親には何て言えば――。」

「私共が人をやって報告致します。」

こんなやりとりを戸惑った顔でやっている吟が普通とは違いすぎてもはや抱腹絶倒である。

思わず声が漏れ出す。

「おいっ！笑うな！」彼はこっちに矛先を向けて吼えた。

「あははは！——わりい、わりい、超おかしくてさ。」

僕はひいひい言いながら顔を上げた。

僕は落ち着く頃には、僕の家に着いていた。

予め示し合わせていたのか、小夜はすでに門の所にいた。

「お帰り。零。あら、吟さんも。」

「やあ、小夜さん。今回は零が全く以て奇想天外なことを思いついてくれたお陰で今ここにいるんだよ。」吟は皮肉たっぷりの口調で言った。

「えっと……つまり、零が吟さんを連れ込んだんですね。」

僕の隣に小夜が入りながら言った。

「さすが、物わかりがよくて助かりますな。」

やがて、車が発進した。

「——ん？」僕は気になって言った。

「今回は目隠ししないんですか？」

「ああ、今回はスモーク式に致しました。」

運転手さんはそう言うと、スイッチをカチッと入れた。

ウィーンッと音を立てて窓が曇って外が見えなくなる。

「そして、今回は皆様に楽しんで頂けるよう、即席カラオケをご用意致しました。」

そう言うと、運転手は後ろ手でカラオケボックスでよく見るリモコンとマイクを渡した。

そして天井から液晶テレビが降りてくる。

「——すごいなあ。」

僕は思わず感嘆した。

そして、僕らは例の城に着くまでカラオケを堪能するのだった。

「到着しました。」

数時間後、車は止まった。

小夜は僕の肩に頭をもたげて寝ている。

起こすのも可哀想なので、僕はお姫様だっこで彼女を輸送することにした。

「やあ、零君、それにお友達殿。」

秋人が門で待っていてくれた。

吟の身体が若干強ばるのを感じたような気がした。

「出迎えどうも。秋人。」僕は挨拶を返した。

「さあ、入り給え。」彼は城の中に招き入れた。

吟を居間で待たせて、僕は小夜を抱きかかえて彼女の部屋に行った。

布団に彼女を降ろす。そして、髪の毛を整えてやる。

可愛いな……。

改めて感じる、その美貌。

そして、清楚な感じが僕を引きつける。

身分違いだろうけど、惚れてまったなあ……。

僕はそんなことを考えていると、小夜が目を開けた。

「おお、おはよ。小夜。」

僕は微笑んで言うと、若干頬を赤らめて小夜は言った。

「おはよう。零。」

そして起き上がって彼女は軽く背伸びをした。

「行こう。秋人が待っているよ。」

「うん。あ、零、ゴミくっついてるよ。」

小夜は気付いたように僕の耳の当たりに手をやってゴミを払う。

そして、少し顔を朱に染める。

ん？どうしたんだ？

と、もう片方の手を僕の顔に添えると、僕の唇に口づけをした。

「……こりゃ、どうも。」

僕は若干驚きながら言った。奥手な彼女からしてくるとは。

小夜は顔をまだ赤くしていたが、僕の手を無言で引っ張った。

「うし、じゃあ、行くか。」
僕は言おうと、彼女の手をしっかりと握って廊下に出た。

吟詠は推理スル？

「おお、零君、小夜。もう少しゆっくりしてきても良かったんだぞ。」

秋人は僕らが部屋に入ると同時にそう言った。

「ハハハ……まあ、吟もいるんで。」

僕はそう言って彼の隣に腰掛けた。小夜も僕の隣に座る。

「彼と税金の運営方法について談義していたのだよ。いやあ、選挙とか年齢とか無視して彼を国会議員に加えたいよ。」

「有り難きお言葉。但し、これは単なるインチキとひらめきの賜物ですよ。」

吟は頭を下げて言った。秋人はそれに対して呵々と笑った。

「だから敬語じゃなくていいって。ほら、零君も普通にためで話しているんだし。」

「零に関しては身内だから呼び捨てオーケーだと思ったのですが。」

吟は訊ねるように言った。うむ、問うてるように思えて問うていない。

「仔細気にしないでいいさ。さて夕ご飯にしようか。お腹が空いただろう？」

「おう。」「はい。」「ええ。」

僕らは各々答えた。ちなみに順番は僕、吟、小夜。

「よし、じゃあ給仕！頼む！——あ、吟詠君、敬語でなくていいから。本当に。」

「——だったら、お言葉に甘えてため口で行かせて貰おう。」

う、いつもの吟の感じだな。何か不敵な笑みを浮かべているし。

「いつもシニカルな微笑みを浮かべていますね。」

小夜は微笑んで言った。シニカルって言うか？普通。

「フフ、お褒め頂き感謝します。小夜さん。まあ、零は多分、シニカルではなく不敵だとお考えで？」

「当たり。」

僕は苦笑して言った。何故、こう看破されるんだ？

夕食後、秋人と吟は再び談義を始めた。

いろいろと資料を見ている。

しかしまあ、部外者にそこまで見せていい物なのか？

宮廷日記や家系図、貿易帳簿など……。

ちなみに、僕と小夜は将棋をやっていた。

小夜もなかなか強く、良い勝負となった。

「さて。」

突然、吟が少し大きな声を出したので僕らは将棋盤から顔を上げた。

「何だい？吟詠君。」秋人が訊ねる。

「少し、私の考えを零、小夜さんなどにも知って貰いたくてね。」

吟はそう言うのと、家系図を出した。

「さて、私としては回りくどい言い方が好きなのだが、天皇陛下、それに物分かりの悪い零君もいるので極論から行きたいのだが、秋人さん、よろしいかな？」

「ああ、構わないが。」秋人は頷いた。

吟は咳払いして言った。

「ぶっちゃけ、溝口家と天皇家に繋がりがあるって、嘘だろ。」

「——は？」

「待ってくれ。吟詠。」僕は言った。

「家系図には我が祖父、溝口真次と天皇家、大天野様と結びつきがあるのは見ただろう？」

「ああ、如何にも。だがな、ある矛盾があるのだよ。」

吟は人差し指を振りながら宮廷日記を手を取った。数十年前の物

だ。

「大分古いな。確か、阿安天皇とその皇后の結婚記念日を探していたのではなかったのかい？」

僕は訊ねた。将棋をやっている程度のある程度の情報は耳に入る。

「そうだな。だが、ページめくっている時、興味深い文献が目に入っ
てね。ええとこの辺りか。」

吟は慎重にページをめくってお目当てのページを開いた。

『大天野様、死去。』

死因は肺炎で享年は12歳だったらしい。

「さて、真次さんは12歳の少女にまで手を出すかな？」

「――出さない、な。」

祖父さんは当時、12歳との恋愛はロリコン、と呼ばれるだけの
年齢以上はあった。

さすがにそこまでは出さなかったはずだ。

「そう、その通りだ。つまり、実際は結婚していない。」

吟は言ったが、僕はまだ腑に落ちない点があった。

「じゃあ、この家系図は？」

「昔、平成の頃か、摩擦熱で文字が消えるというボールペンが発明
されたのをご存じか？」

吟はニヤツと笑って言った。そして家系図に軽く手を置く。

「ああ、聞き覚えがあるな……。フリクショ――とか何とかって
会社だったな。」

「そのボールペンで書かれていた。」

そう言う吟は家系図から手を退けた。

――溝口真次の字が消えていた。

なるほど、体熱で消えてしまったらしい。

「以上のことから、血縁はない、と証明しました。異論は？」

吟詠は素晴らしい論理で天皇陛下を追いつめた。おお、すごい。

「ククク……ハッハッハッ！君の論理は素晴らしいよ。是非とも我が内閣に加えたい！」

秋人は大声で笑い出した。小夜は信じられないような顔をしている。

「その通り。これは私の捏造だ。」

彼はふう、と息をつくと言明を始めた。

「私はシャルロットさんと零君が結ばれ、日本との関わりを強くしようと思ったただけだった。だが、零君を連れてきた時、小夜の表情が変わってね。従者が言うにはこれは恋ではないか、というので大慌てで捏造した訳さ。」

「なるほど、小夜さんと結ばれるのであれば血縁という理由がないと難しい。また、シャルロット殿と結ばれても天皇家と血縁があればスワン財閥から財産が降る、という策だったのか。」

吟はふむふむと頷きながら言った。

小夜はあああっ！っていう顔で俯いている。

僕もそうだ。

「どうするんだよ……もう一緒に寝てしまったし……。」

「妊娠していたら大騒動だな。」吟は続けた。

沈黙が走った。

「まあ、まずは宮内庁だな。言えば融通が利くだろう？」吟は言った。

「そんな簡単に行くか？」僕は力無く問うた。

「ああ、憲法やら民法を振りかざせば上等だろう。」彼は悪戯っぽく言った。

「まあ、確かに。」秋人も言う。

「皇族に人権があってもいいはずだ。恋愛や結婚の自由も。」

「ちよつとコネを使って言い回そうかなあ……」と。秋人さん、悪いようにはしないで。」

吟はそう言いながらウィンクした。

ちなみに、こいつのネットワークは凄まじい。

親戚は医者、弁護士、警察など公務員が勢揃い。

外交にも広く、噂だとロシアの大統領とも繋がっているらしい。

「うまくできたら、従者に召し抱えてくれよな？」

「――君は何者なんだ？」

秋人は笑いながら言った。

うゝん、と悩む吟。そしてこう言った。

「影を追う者、だよ。」

――全く、言い回しが本当に好きだな。

天皇の城でキススル??

「さすがやな。大将。」

僕は茶化した。大将は振り返る。

「まずは一つ、だな。」

大将こと、吟詠は憲法やら何やらを盾に宮内庁に貴族に一般の人と同じ人権を求めたのだ。

もちろん、秋人の名前で電子メールを用いてだ。

すると、宮内庁のお偉いさんは国会で審議しようと言ってきたのだ。

しかし、吟詠はそこで終わる訳ではなかった。

電話で何やらロシア語で会話を始めている。

「ちよいと、ロシアに圧力を掛けて貰う。」

電話の合間に吟詠はウイंकしながらそう言った。

「本当に、君、何者なんだ？」秋人は啞然とした様子で言う。

「過去だったり親戚だったりがあっちよこちよこでね。」

要領を得ない説明をすると、吟は電子メールを打ち始めた。

「ああ、零。もう寝て構わないよ。後は秋人さんと一緒にやる。」

「小夜も。お風呂に入ってゆっくりしな。」

秋人は微笑んで言った。その言葉に小夜は少し顔を赤くして僕に小声で言った。

「……一緒にお風呂に入りませんか？」

「いいよ。」僕は快諾すると、彼女の手を引いて部屋を出た。

「ごゆっくり。」部屋を出る時、吟の声が僕らを追いかけてきた。それでまた顔を朱に染める小夜。うん、可愛い。

僕らは共に風呂に入った。

お互い、裸を見合っているので恥ずかしい物はない。

——と思うのは僕だけのようだ。

小夜はもじもじしていてなかなか脱衣せず、僕の裸を見てまた顔を朱に染める。

仕方ないので、僕が先に風呂に入ったのである。
シャワーを浴びているとカラカラ、と音がした。

小夜が入ってきたらしい。

「せ、背中、流すね。」緊張している声色。

「わりい、頼む。」僕は軽い感じで言った。

いつもの通りゴシゴシと程良い力で背中を擦ってくれる小夜。

「気持ちいいな。」

「ありがと。」

そしてジャバツとお湯を掛けられて終わりっつと。

「サンキュー。お返しに流してあげるよ。」

「ええ！？いいよ、そんな――。」小夜の声が見事に裏返った。

「いや、遠慮しなくていいんだぞ？」

「え……あ……う……。」

彼女の視線が僕の頭上を彷徨い、やがてコクンと頷いた。

立ち上がって交代する。

なるほど、綺麗な背中だ。

水を弾くよう、というのか。

僕はタオルに石鹸をつけて泡立て、彼女の背中を適度な力で擦る。

「痛くない？」

「き、気持ちいい……よ。」

緊張しているようだ。

緊張する方が普通なのかなあ……？

僕は最後にジャバツとお湯を流して景気よく言った。

「ほい、終わり！」

「あ、ありがと……。」

ギクシャクとした動作で立ち上がり湯船に入る小夜。

僕は隣に入ってくつろぐ。

「ああ……良い湯だ……。」

「そ、そうね……。」

——緊張しすぎ。

僕は身体の位置をずらして小夜と向かい合った。
「そんなに緊張しなくてもいいじゃないのさ。」

「だって……血縁がないのに……。」

小夜はモジモジとしながら言った。

「大丈夫だ。吟がいる。」僕は請け合った。

「それでも緊張しない？」

「しないよ。奴を信じているからさ。」

小夜は一瞬、ぽかん、といった顔になった。

「何故、そんなに信じられるの？」

「友達だからさ。」

僕はニヤリと笑って言った。

「奴は友達の期待を裏切らない。」

「羨ましい。」小夜はぼつりと言った。

「信頼できる友人がいて。」

「でもさ。」僕は言った。

「僕がいるぜ。」

「え？」

「それに秋人や吟、雪やモカ、百合、シャルだって。」

僕はグッと親指を突き出して言った。

小夜はクスッと微笑んだ。

「確かにそうね。一人じゃないよね。」

「そうだよ。僕は絶対一緒にいるから。」

僕はそう言っていると、彼女の華奢な身体を抱き締めた。

そして、首筋に舌を這わせる。

「う……ひゃっ……止めてっ！」

僕は突き飛ばされて湯の中に頭から突っ込んだ。

鼻から水を吸ってかなり痛い。拷問に近い。

「がはっ！げほっげほっ……ぜえはあ……。」

僕は呼吸を整えて頭を振る。その後深呼吸して酸素を確保。

「ごめん……でも、そういうえっちなことは、部屋に戻ってから……ね？今だと我慢できなくなりそう……。」

小夜は僕を助け起こしながら言った。

——何となく、ちよつと嬉しい。

部屋に戻ると、吟と秋人が真剣な顔で談義しメールを打っていた。

——邪魔しない方がいいか。

僕はそう判断すると、小夜と共に彼女の部屋に向かった。

いそいそと布団を敷く小夜を手伝いながら僕は考えた。

天皇家は国民ではないのにどう行くのか。

国民というのは日本国籍がある者を示す訳であって。

天皇家はその国籍がない。

吟はどんな策を取るのか？

まさか、ロシア大統領に頼んで、認めねえと攻めるぞ、とでも言

わせるのか？

うーん……何だか不安になってきたなあ……。

「ねえ、零、どうかした？」小夜が訊ねてきた。

「あ、いや、何でもない。ちよつと電話してくる。」

僕はそう言うと言席を立った。

僕は電話を置いてふう、と息をついた。

場所を機密にしているだけあってここで携帯電話を使うことは出来ないので電話を貸して貰ったのだった。

僕は小夜の部屋に戻ると、彼女は布団にすでにくるまっていた。

「——寝ちゃった？」

「寝てないよ。」

もぞもぞと動いて小夜は言った。

僕が布団に入ると、いきなり彼女は抱きついて唇を重ね合わせてきた。

「あまり……焦らさないで……はぁ……あうっ……。」

一旦、唇を離して言うど、またキスをする。

小夜って結構積極的なんだな。

僕は舌を絡ませてキスに応じる。そして同時に衣服を脱ぐ。

小夜はすでに何も着ていない。

唇を離すと、彼女の身体の上に舌を這わした。

首筋、乳房、お腹、背中、下腹部、おしり、太ももと隅々まで。

詳しく表現しようと、まずい気がする。

何だか知らんが、多分、まずい。神様がそう言っているかも。

とにかく、味わいながらも際どい所は際どく通る。

焦らしながら彼女の身体を吟味する。

「ああ……はううっ……焦らさないで……お願い……。」

小夜は潤んだ瞳で懇願する。

僕は体勢を立て直すと、彼女の身体と僕の身体を一体化させて一

気に交わった。

彼女の喘ぎ声が部屋中に響いたのだった。

「一緒にいて……。」

小夜は片手で僕の手をしっかりと掴んで、そしてもう片手で僕の首に絡みついて言った。

「何があろうと絶対……。」

「ああ、もちろんさ。」

僕は彼女の額に口づけして言った。

「ずっと、一緒さ。」

天皇の城でキススル?? (後書き)

ハヤブサです。

ヴァーヴァラの方で忙しいです。

キススル? もいよいよ30話目!

ラブラブな零と小夜。

しかし、まっしぐら行かないのが世の定め。

身分の差が重くのし掛かる……が、それ以上に重い存在が身近にいたり?

ハーレム系が結構好きなお方はデビル・ヴァーヴァラーズも見て下さい。

お笑いの要素も少々。

話の数はあっちの方が多いのに、こっちの方が圧倒的にお気に入り数が違うんですねー。

需要と供給の関係というのか。

まあ、愚痴はここまでにしまして。

感想、引き続きお願い致します。

意見、命ですッ!

ゲームでキススル？

「もしもし？」

僕は電話を片手に外を見た。

『あ、レイちゃん？また秋人様の所って聞いたけど。』
雪が出たようだ。

「ああ、そこから掛けているよ。そっちはどう？」

『秋人様がいい料理人を寄越してくれたから良い食事が出来ているわ。』

「そうか。モカは？」

『ふて腐れている。早く帰ってきて。あの子に構っていないで。』
若干、声の不機嫌だ。仕方ない……か。

「分かった。今日には帰ろうかな。」

『ん、待ってる。』

声が嬉しそうな響きを孕んだ。

「―――すまないな。小夜。」僕は振り返って言った。

「大丈夫。家族との交流の方が大切でしょ？」

「んー、選べないな。どっちも大切だから。」

僕は言うのと、小夜はクスクス笑った。

「ありがと。じゃ、帰ろっか。家に。」

「そうだな。」

僕と小夜は秋人に挨拶をして、帰りの車に乗った。

吟はまだいろいろあるとかで残るそうだと。

彼には感謝しても仕切れない。

「ただいま。」

僕は昼頃に無事帰宅した。

「お帰りなさい。レイちゃん。―――小夜さん。」

雪は挨拶した。何か変な間があったが……。

「お帰りっ、お兄ちゃん！」

と百合が駆けてきて僕にキスをした。

「おうおう、元気がいいな。……おや、モカとシャルは？」

「居間にいるわ。」

僕は玄関から居間に移動する。その通り、二人はソファで雑誌を読んでいた。

「あ、零！お帰りなさい。」

ソファに座っているモカは微笑むと、隣をポンポンと叩いた。座れと言うことか。僕が隣に腰掛けるとモカは首に腕を絡めてキスをした。

「おう、随分大胆になったな。」

「バ、バカ！これのどが大胆って言うんですか！」

——思いっきり大胆ですけど。

「レイ、お帰り。」シャルが雑誌から顔を上げて微笑んだ。

「いや、不在にして済まなかったな。週末だし、みんなでどこ行く？」

「ん……いいや。零と一緒にいられるだけで充分。」

モカは微笑んで言った。雪がお茶を出す。

「お、サンキュー。」

僕は礼を言ってお茶を飲んだ。

「じゃ、たまにはゲームでもして遊びましょ。ほら、『バトルロイヤル大炎闘』でもさ。」

僕が言うと、皆頷いた。

ちなみに、バトルロイヤル大炎闘とは最大六人プレイの乱闘アクションゲームだ。プレイヤーは格闘家、剣士、魔法使い、狩人、エイリアン、牛、エンジェル、ヒーローのうちから一つ選んで対戦するのだ。

「ほら、小夜も。」「お菓子もあるよ。」「ちよっと机をずらそうか。」「勝者は零のキスですね。」「おいおい……まあ、いいけど。」

ガヤガヤやって皆、テレビの前に座った。
そして、キャラを選択する。

僕は剣士、モカとシャルがヒーロー、百合がエンジェル、雪が魔法使い、小夜が狩人だ。

『Ready...Go!!』

ゲームが始まった。

ステージは森だ。狩人はフィールドパワーを得ることが出来る。
ちなみに、フィールドパワーというのはそのまんま、その場で得られる力である。

基本値がちよつとずつ上がるだけだが。

ピョンピョンッと木々を飛んで上の方に飛ぶ狩人。

なるほど、慣れていないからそう逃げようって算段か。

しかし、我が家はそんな甘くない！

百合の操るエンジェルがそれを撃墜しようとする。

「このっ！」「はっ！」

壮絶な弓矢の打ち合い。

その被害は下にいる剣士とヒーロー二名にも及んでいた。

まともに戦えず、木陰に避難する。

僕は弓矢が止んだ一瞬の隙に攻撃に移った。

剣奥義でヒーロー一体に大ダメージを負わせる。

「くっ、強いですね！でも！」モカはヒーローを操りながら言った。

「一人じゃないのよ。」

いつの間にかシャルの操るヒーローに背中を取られた。

「必殺！ヒーローキック！」

バコンッと無防備な剣士の背中にヒーローの必殺技がのめり込む。
剣士、戦闘不能。

その頃、上では決着がついていた。

経験の差の故か、狩人は倒れてしまった。

そして、上空からのエンジェルの攻撃にヒーローはダメージを負う。

僕の奥義が決まって体力がもう少なかったモカのヒーローは倒れた。

シャルは地形を利用しながらエンジェルに肉迫して必殺技をぶち込もうとした。

が、外れた。

「必殺！残酷な天使の怒り！」

一撃必殺尚かつ命中率が一割の必殺技がのめり込んだ。

空中では身動きの取れないから必ず命中する。

シャルのヒーローは一撃で沈められた。

「やった！——って誰か忘れているような……。」

次の瞬間、百合のエンジェルに光線が降り注いだ。

魔法使い——雪か。

補助魔法の保護色を使って存在を消し、メンバーが減るのを待つという初歩的な手段を使ったのだ。

「雪ね！」

弓矢を浴びせるエンジェル。が、防御結界が発動して魔法使いには届かない。

矢の装填のタイミングに合わせて魔法使いは動いた。

一瞬でエンジェルに肉迫する。

矢の装填中には移動が出来ない！

「必殺！マジックカーニバル！」

必殺技は必殺ゲージというのがあってそれが一定値を超えないと発動できない。

雪はそれがたまるのを待っていたのだ。

しかもこの技は攻撃力が低いが、当たる確率が高い。

さらに、必殺ゲージが満タンならば三度連続で行える。

——結果。

「じゃ、王子様の唇を頂きましょうか。」

「ハイハイ……。」

僕は苦笑しながら、雪の首に腕を回して唇を重ね合わせた。

彼女の唇が開き、艶めかしく息を吐く。

その瞬間に舌を口の中に滑り込ませて彼女の舌と絡め合わせた。

そして、舌を吸うと、ん、と彼女は声を漏らした。

唾液は甘い。密のように。

この甘い時間は十分以上続いた。

買い物でキススル？

「よっ。」「ほっ！」

雪、モカ、シャル、小夜は『大炎闘2』で盛り上がっていた。

ちなみに、2の方は1に比べて画質や戦闘技術は良い。

が、勇者や魔法使いなど、RPGを重視したような設定であるので、ヒーローやエンジェルがいない。

だから、僕は1の方が好きなのだ。

ちなみに、今は3まで販売中。

3はまだ人気なのでまだ買わない。

人気が落ち着いたら買う。それ、我が家流なり。

「ん、百合はやんなくていいのか？」

僕は皿洗いしながら言った。大炎闘で負けた罰ゲームである。

この後に買い物……って厳しいな。おい。

「いいの。お兄ちゃんといった方が楽しいし、同時に負けたからね。」

百合は僕の隣で皿洗いを手伝ってくれている。

「若干、僕の方が早かったけどな。」

「またまた。」

百合は笑いながら食器についた泡をよく流して水を切った。

「よし、片づいた。じゃ、買い物に行くか。」

「うんっ！」

僕らは近所の商店街に行った。

商店街は勢揃い。八百屋、魚屋、お茶屋、惣菜屋、理髪店、本屋、ゲーセン、古本屋、写真屋……。

挙げてもキリがない。

「今日は何がいいかな？」

僕らは馴染みの八百屋さんを訪れてみた。

「おお、真ちゃんとこの！久しいね！」

おじさんがやたらと大きい声で言う。

このおじさんは祖父さんと友達だったらいい。

「いろいろありましてね。」

僕が苦笑して言うと、彼は爪楊枝に刺さった苺を差し出した。

「ほい、食べな。甘いよ。」

僕らは受け取ると、食べてみた。爽やかな甘さが広がる。

「あ、美味しい。」

「ホント。」

ちなみに、百合の場合はこうだけれど、他の人だと異なる。

モカの場合、

「あ、美味しい。」

「ん……確かに。」

雪の場合、

「あ、美味しい。」

「そうかしら？この値段でこの味は普通だけど。もう少し早めだったら美味しかったかも知れないわね。そうでしょ？レイちゃん？」

「——そんな専門の話題を振るなよ。」

シャルの場合、

「あ、美味しい。」

「んー、ストロベリーにしてはまだ若いわね。イギリスのはもうちよっと熟してから食べるわ。」

「へ、へえ……。」

と言った訳だ。

小夜はどんな反応するのかなあ。

「どう？買っていくかい？」

「まずは野菜よね？お兄ちゃん。」

「ああ。」

「それだったら春キャベツだな。」

おじさんはドンツとキャベツを出した。

「少し安めで百十円でどーよ。」

さて、ここでも場合分けを試してみようかな。

モカの場合、

「何で百十円にするんですか？小銭が面倒だから百円にして下さいよ。」

「いや……ウチの儲けがあるからさ。」

「——ケチですね。」

「……分かった。百円にする。」

（美少女の冷たい視線&声におじさん涙目。）

雪の場合、

「へー、これで百十円ですか。色や状態から言って仕入れ値は七十円辺りですよね。」

「残念、一個六十円さ。」

「へえー、利潤を元値の二倍近く取るんですか。消費者のこと、考えていますか？」

「……分かった。九十円にする。」

シャルの場合、

「百十円？まだ日本のお金は慣れない……。」

（そうやってシャルはユーロを出す。）

「え……ユーロじゃあなあ……。」

「おじさん、これ、三百円の価値がありますよ。」

（こっそり耳打ちする僕。）

「よし、二個売った！」

（実際は二百円以下……。）

さて、百合の場合は……。

「ん……ねえ、お兄ちゃん、さっきのお店の方が安かったよね。」

「あ、ああ。」

さっきのお店というのは通りかかった時の店だろう。

「いくらだっけ……？」

「ああ……えっと……特価セールで八十円だっけな。」

僕は咄嗟にでっ上げながら言った。

「しかもあっちの方が大きかったよね。じゃ、あっちで買おっか。」

そう言っていると、百合は僕の手を引いて歩き出した。

「待った！分かった！一個六十円でいいっ！」

おじさんは慌てて言った。百合は振り返って怪訝そうな顔をする。

「六十円……？」

「……くっ、分かった、二個で百十円だ！」

「キリ悪いね。」

「……百円だ！」

少女の威圧には勝てない。

しかし、乗りに載った百合は止まらない。

「じゃあ、ついでに苺も買おうかな。」

「おお、活きの良い奴で一パック二百円だよ。」

「……やっぱ、果物専門店で買った方がいいかな。」

「分かった！二パックで三百円！」

「えー、でもウチ、大家族だからな……。」

「よしっ、五パックで七百元！」

「ウチ、もう一人増えたからさ……。」

「くっ、ええい、六パックで八百円でどうだ！」

「もう一声！」

「持って行け泥棒！キャベツ二個合わせて七百元！」

「よく言った！偉い！」

あらま……。

僕が呆然と眺めている中、七百円と苺が詰まった箱、キャベツ二個が取引された。

「―――すげえ。」

「でしょ?」

「悪魔のような女。」

「それはないでしょっ!」

バシツと勢いよくデコピンされた。

一瞬、目の前が真っ白になる。

「いってえ!」

「あ、ごめん!」

百合の怪力は言うまでもない。射的の時にデコピンだけで正確にコルクを飛ばして缶の山を崩す奴だから。こいつを怒らせたくはない。

「痛い痛い飛んでけー!」

ひんやりとした柔らかい物質が触れて痛みが和らいだ。

―――てか、額にキスしているだけやん。

「治ったでしょ?」

「う……もうすっかり。」

僕は苦笑いすると、百合の荷物を持って歩き出した。

「あ、荷物持つよ。」

「いいって。大丈夫。」

「じゃあ、片方だけでも寄越して。」

「仕方ないな。」

苺が入っている方を渡す。百合はもう片方の手に持つと、僕の空いた手を握った。

「じゃ、いこっか。」「ああ。」

たまにはこういう買い物も悪くはない。

兄さんと麻雀スル？

ピンポン、とチャイムが鳴る。

誰だ？もう夜なのに……。

僕はランプを置いて玄関に向かった。

ちなみに今は夕食後でみんなでランプを興じていた。

「はい！」僕が玄関の戸を開けるとドスンッと音が響いた。

「――ってー！」

「あ、兄さん。」

僕はぼそつと呟いた。

目の前でドアにぶつかり倒れているのは一兄^{はじめ}さんだ。

僕は無言でドアを閉めて施錠した。

「え？や、待て、離せば分かる。」

ガチャ。

「おいっ！今、チェーンロック掛けただろ！」

「ふう、全く。」

兄さんは雪の出したお茶を飲みながら呟いた。

「兄さんが帰ってくるなんて天地がひっくり返るっつーの！」

僕は言いながらも上着を掛けてやったり荷物を運んだり兄孝行する。

何かと世話になっているからな。

「あ、そうそう、お土産。」

兄さんはバッグを引き寄せて中から何かを出した。

「信玄餅。」

「山梨に行ったのか？」

「ああ、今度は中部地方に支店を出そうと思ってね。」

彼はそう言いながら、信玄餅のお徳用パックを雪に渡した。

「えっと……また増えているな。」

「ああ、こっちがシャルロット・ブラック、愛称、シャルね。で、こっちが小夜。」

「ふんふん、なるほど、お前も大変だな。」

兄さんは悠長なことを言いながらお茶を啜った。

「で、兄さんが帰ってくるなんて天変地異だけど、どうしたんだ？」

「ああ、少し病を患ってね。自宅養生しろと部下に諭されてね。」

彼は苦笑すると、ふと、何か思いついたように言った。

「そうだ、久しぶりに打たないか？」

「あ……そうか。でも、あったかな？」

兄さんの声に僕はうなずいて物置の方に行った。

「手伝います。」モカが一緒についてきた。

「ああ……でもどこにしまったかなー。」

「ん、ここじゃないですか。」

「ああ、これこれ。」

僕はお目当てのセットを出して台車に乗せて運んだ。

「Wow。」シャルが英語を思わず漏らした。

「麻雀ね。」

そう、麻雀である。しかも自動雀卓。

非常に重たくて仕方がない。

父さんが今の仕事に昇進する前は、兄さんと父さんで三麻をやったもんだ。

そのうち、雪、百合が引き取られてその代わり、兄さんが出て行き、四人でよくやった。

父さんが海外に行ったのでやることは全くない。

「私、得意。」

シャルはそう言うと言った。

「お？マジか。」

兄さんは笑って言った。

「あ……止めておいた方がいいと思うよ。」

僕は忠告した。雪も頷く。

「大丈夫。」

シャルは頷いて聞かない。

仕方ない。

百合と雪、兄さんが席について始めた。

シャルが親だ。

「ねえ……麻雀って何？」小夜が小声で訊ねてきた。

「ああ、大雑把に説明すると、同じ物を二つ揃えた物一つと、順番に一、二、三、と並んだもの、ないしは同じ物を三つ揃えた物を四つ揃えたら勝ち。その出来た物で得点が決まっていてその分だけ相手からぶんどれる訳。東四局、南四局やって一番高得点の人が勝ち。」

「ふん。」

と、説明している間にそれぞれ準備が終えた。

——ほう。

シャルも伊達じゃない。

すでにイーシャンテン——あと一つ必要な牌が来れば上がれる状態だ。

「リーチ！」

おお、ダブルリーチ。『東』を切った。

さて、これじゃあ待ちが分からんからリーチ一発も……。

「ロン。」

は？

今何と？

兄さんはパタツと牌を倒した。

「国士無双十三面。」

え？

「ええええええ！？」

シャルが信じられないように声を漏らした。

「ご愁傷様。だから言わんこっちゃないよ。退いて。」

僕が半ば強引にシャルと交代するとセットをする。

「ほう……久しいな。お前とやるのは。リーチ。」

パコツと兄さんは牌を倒した。

「ポン。」

僕は兄さんの捨てた牌を拾って自分の牌、二枚と一緒に隅に置いた。

「ダメだよ。兄さん。クセがばればれ。あ、百合、それカン。」

僕は百合の捨てた牌を取って四つまとめて隅にまた置いた。

そしてリンシャン牌を取る。

また、牌を倒す。

「く……さすがだ。」

兄さんは悔し紛れか呟いて取った牌を捨てた。

「ロン。」

僕はパタツと牌を倒した。

「タンヤオ、トイトイ、ドラフ、その他もろもろ。一発トビだね。」

「全く——敵わないな……。」

兄さんは苦笑いした。

「私から見たら二人ともなかなか分かりやすいと思いますけど。」

雪が横から牌を機械に流しながら言った。

「レイちゃんは鳴きたがるし、一さんは大三元とか小四喜、国士とか狙いますもの。」

「ハッハッハ。」

僕と兄さんは同時に苦笑いした。

「おっし、じゃあ、もう一回やるか。」「小夜もやろうよ。教えてあげる。」「私も。」

日常に加わった兄さんスパイスで夜はより楽しくスパイシーになった。

兄さんと麻雀スル？（後書き）

ハヤブサです。

久しぶりに一さんが出て来ました。
皆さん、お忘れではないですよね？

阿安時代の不景気にカラオケ会社を立ち上げて勢いで関東有力チェーン店となったその社長の一さんです。

さて、今回は麻雀でした。

麻雀、自分はボチボチ打ちますが。

分からない人には申し訳ありません。

グダグダと話が進んでいるように見えますが、着実に進んでいます。
伏線に気をつけて下さいね・・・。

感想、お待ちしております^^

ハプニングギススル？前編★

「ツモ、リーチ一発、ツモ、平和^{ピンフ}、タンヤオ、ドラ2。」
雪の音が響いた。

「南四局終了。雪の圧勝だね。」

シャルは笑って点数を書いた紙をヒラヒラとさせた。

「うわ、四万点差……。」

「雪には敵わないな。」

僕ら、溝口兄弟は唸った。

「捨て牌と性格で分かっちゃいますよ。何待ちか。」

雪は自動雀卓を隅に追いやりながら言った。

「それでも、これだけの役を出せるのもすごいよ。」

「これ並みの力がなければお父様の秘書は務まりません。」

バラバラと散らばっている輪ゴムを拾いながら雪は兄さんに言った。そして、その輪ゴムは指でパチンパチン飛ばして一つ残らず、輪ゴムケースに収めた。

———すげえ。

「Oh……。」

背後でシャルが呟いた。ケイタイを取り出す。電話らしい。

「Hello. Oh, grandmother. How are you?」

「お祖母様か。」

僕は呟いた。あの存在は忘れられない。

「シャルのお祖母さんか。どんな人かな?」

兄さんは言いながら雪の入れたお茶を手を伸ばしてお茶を飲んだ。
「財閥の人。」

僕の台詞に兄さんは激しく咽せた。

「ゲホッゲホッ……あ、まさか、ブラックって……。」

「そ、スワン財閥の。」

「うわ……何で、ウチにそんな偉いさんが――」。

「それだけじゃないですよー。」

小夜は微笑みながらお茶菓子を運んできた。

「どうだった？ 零。」

「雪に完敗さ。完膚無きまでにやられた。」

「雪さんには何のゲームに關しても負けるよね。」

小夜は言いながら、ソファ―に腰掛けた。

「ねえ、それだけじゃないって……。」

「あ、レイ？ ちよつといい？」

兄さんの言葉を遮るシャルの声。若干、拗ねる兄さん。

「おう。」

僕が立ち上がってシャルの元に行った。

「会食をしたって。」

「お祖母様が？」

「――うん。」

「分かった？ いつ？」

「え？ いいの？」

シャルは驚いたように顔を上げた。

「ああ、構わないし、連休で暇じゃん。それに最近、一緒に外出していなかったからね。たまにはいいかな。」

「……今日の夜。」

「急だな。ま、いいさ。場所は？」

「ロサンゼルス。」

「は？」

「ジョークよ。」

シャルはクスクス笑って言った。

「十条だって。」

「うわ。」

あの高級都市か。

阿安時代の流れで当時栄えていた銀座、六本木などは相次いで倒

れていった。

そんな仲で人気を集めたのが土地の値段もまあな十条、赤羽付近である。

埼玉県と東京都を繋ぐ場所でもあって一気に高層ビルが雨後の竹の子のように立った。

——実はあれ、秋人の細工のせいらしい。で、売れると同時に税を掛けてガッポガッポ金を集めたとか。

そして、池袋、赤羽、秋葉原と帝聖三大都市が出来た訳である。ちなみに不況の煽りを受けなかったのはオタクの聖地だかららしい。

一度、乙女ロードって言ってみたいな……。。

「分かった。」

詳しい場所を聞くと、僕は準備をした。

しかし、十条かー。

確か、曾祖父さんが務めていた場所だっけ。

そこが反映するとは曾祖父も思わなかったろう。

「あ、零。これ、持っていけよ。」兄さんは何かを持ってきて言った。

「んー？黄色いハンカチ？持っているよ。」

「いや、これは占いのラッキーアイテムだから。」

「占いなんて信じているのかよ……。。」

僕は呆れながらも受け取った。

「それで自分は事業で成功した。きっと何かいいことある。」

兄さんは無邪気な笑顔でぐっと親指を突き出した。

と、ケイタイがポケットの中で震えた。

「はい、もしもし。」僕はケイタイを出して言った。

『親愛なる詩吟だよ。』

「ああ、吟か。」

僕は言い回しを理解して言った。

『全ての手回しを終えてね。数ヶ月後にはもう小夜さんも結婚オー

ケーだ。』

「一体、何やったのよ。」

『ロシアにちょっと人権の矛盾を解消しろって圧力を掛けさせた。』

「――大胆だな。やること。」

『まあな。この借り、いつか返して貰うぞ。』

「ん、でもこれから出かけるからさ。」

僕はバッグを準備しながら言った。

『どこに？』

「シャルのお祖母様と会食に十条に。」

『……ふうん、その話は突然か？』

「あ、ああ。」

『――用心しろよ。』

「なんでだよ。あ、そろそろ行かないと。」

『ああ、行ってこい。』

彼はそう言うと、電話を切った。

――用心しろって？

「おお。」

十条につくと思わず声を漏らした。

辺り一面の高層ビル。

その中、ひとときわ高いビルに足を向けた。

「あんなバカでかいビルのレストランをよく予約できたな。」

僕が言うと、シャルはそうかしら、と言わんばかりに首を傾げた。

金髪をツインテールで結った彼女のその仕草は可愛らしい。

よしよし、と頭を撫でるとシャルは嬉しそうに微笑んだ。

と、その拍子にポケットからハンカチが落ちてしまった。

いけないいけない。兄さんのハンカチが。

僕は屈んでそれを拾った。

ヒュンッ！

空を切る音が頭上からした。

「へ？」

僕は顔を上げると、顔に傷跡がある男がバッドを持って立っていた。

「兄ちゃん、小癪なマネするな！。」

ゾロゾロと人混みから同じような人が現れた。

——ヤクザだ。

僕は咄嗟にシャルを庇いながら後退した。

「兄ちゃんは寝てりやいいんだよ。寝てりやあつ！」

そういうとヤクザの一人が木刀を振り上げて襲ってきた。

僕は咄嗟に腕で庇った。

ドスッ！

「おいおい、ウチの生徒に手！出すなや。」

その木刀は空中で止まっていた。

見ると、逞しい腕によって受け止められている。

僕は視線を滑らせて驚いた。

「服部先生！」

「おう、溝口。デートとは良い身分だな。っと！」

我が学校の職員、服部先生は再び向かってきたバッドを片手で握って受け止めながら言った。

「なんだあ！？やるのかあ！？」

ヤクザが吼えた。

「ちつとうるさいな。黙らせるからその箱の影にでもいろ。」

先生はそう言うのと、パッと地を蹴った。

僕は言われた通り、近くの居酒屋にあった空き缶回収の箱にシャルと隠れた。

「あの、teacher、何者？」

「ああ、彼は体育の先生だが、文芸部の顧問だね。ウチの担当。」
最近、部活に出られなくて会っていないが。

「でも、あの尋常じゃない強さは？」

「ん？」

僕は少し首を伸ばして様子を伺った。

服部先生が正拳突きで三人ほどまとめて吹き飛ばしていた。

「ああ、彼は、」

僕は一呼吸開けながらニヤツと笑って言った。

「空手の大会で名を馳せている人だよ。」

「何やっとなじゃ！拳銃^{チャカ}出して仕留めんか！」
ボスらしき人が吼えた。

同時に二三人が銃を出して先生に発砲した。

が、先生は引き金の動きを見きって三方の銃弾を避けた。

同時に踏み込んで三人にラリアットを囓ました。

そして、ボスらしき人の首を掴んだ。

「ウチの生徒に喧嘩売ろうなんじゃー、百万年早い。少なくとも俺の目が黒いうちは。」

先生はそう言うと、不敵に笑ったのだった。

ハプニンググキススル？後編☆

「は、服部先生……？」

僕が呟くと、彼はヤクザを蹴散らしながら僕らの元に来了。

「おう、無事か？」

「ええ……。」

「良かった。」先生はボリボリと頭を掻きながら続けた。

「さつき、ウチのケイタイに非通知の電話が来てよ。十条で学校の生徒を襲おうとしている連中がいるってタレコミがあったんさ。デマかも知れんが、用事があったから来てみたらこれだ。」

「え……。」

一体誰がタレコミを……。

……。

……。

あ。

あいつだ。

吟詠。

てか、あいつしかあり得ないだろ。

と、考えている間に先生はヤクザの胸ぐらを掴んだ。

「おい、お前、どこの差し金じゃ。」

「んな……。」

「惚けんやない。平田組のやることじゃー、依頼だけって知れ取る。」

」

「……何故、ウチが平田やと……。」

「阿呆、ここらで張ってるのは平田か内田しかおらんやろ。さ、吐けや。」

服部先生は関節を締めながら言った。

「わ、わーった！ だら関節は止めてくれ！」

ヤクザが悲鳴を上げた。先生が少しだけ力を緩めた。

次の瞬間、ヤクザの口から信じられない言葉が零れ出た。

そして、同時に電話が鳴った。

「……はい。」

「遅かったわね。」

僕とシャルはレストランにつくと、エリザベスさんは眉をひそめて言った。

「ええ、途中で暴徒に襲われまして。」

「あら、言い訳？」

「事実です。」

「そうだったら、こんな危険な町にシャルは置いておけないわ。」なるほど、それが目的か。

『エリザベス婦人、茶番はそこまでにしようか。』

声が響いた。無機的な声。

「……誰？」

『名前は言いません。ただ、零君の友人です。』

そう、それは僕の携帯電話から響いた。

吟詠の声である。

そして、先ほど電話を掛けてきたのも彼だ。

『服部先生、こちらに。』

吟詠の声で先生がレストランに入ってきた。

先生はヤクザの一人の首根っこをつかんでいた。

「……これは？」

『貴方が差し向けたヤクザですよ？彼は貴方の名前を吐きました。』

「……そんな覚えがないわ。罠でしょう。」

エリザベスさんは顔色一つ変えずに言った。

『そうかもしれないね。しかし、これで辻褄は合います。』

吟詠はそういうと、一呼吸おいた後にまた語り始めた。

『もし、そこで零君が殴り倒されシャルロットさんがさらわれた場合、その時点で零君は信頼におけずこの国は治安が悪い、という理由でシャルロットさんをイギリスに返せます。もし、逃げられてもまた、この国は治安が悪い、という理由でイギリス行き。と、なります。』

「しかし、証拠はないわね。言いがかりは止してちょうだい。訴えますよ。」

エリザベスさんは多少語気を荒げて言った。

『知っていますか？エリザベス婦人。』

「何が？」

『このヤクザ、平田組は仕事を受けるときには半額の前金と契約書を取るそうです。』

「……………」

『今、警察に言いまして平田組の家宅捜索を行ってもらっているとことです。——おっと。』

吟詠が電話から少し離れた。なにやら話し声がする。そして戻った。

『服部先生。携帯電話にメールが行ったはずですよ。』

吟詠の声で服部先生は携帯電話を取り出して開いた。

「確かに。」

『その添付ファイルを。』

服部先生はケイタイを操作すると、僕らにそれを見せた。

「これは……………」

エリザベスさんは色を失った。

携帯電話のディスプレイに映っていたのは、エリザベスさんの名がしっかりと書かれた契約書だったからだ。

『言い逃れはできませんね。』

その声と同時に後ろから人が入ってきた。

警察官が何人か、だ。

警官は懷から紙を取り出してバツとエリザベスさんに見せると早口で何か言った。

おそらく、逮捕状を出して罪状を読み上げたのだろう。

そして、冷たく輝く鉄の輪を彼女の手には掛けるとヤクザと共に連行していった。

僕らはその後、事情聴取を受けた後、帰宅した。

「やあ、零君。」

「お邪魔しているよ。」

二人、客人がいた。

「――何であんたらがいるんだ？」

僕は半ばあきれながら言った。

「んー、恩人に向かってその口調はないんじゃないかな。」

吟詠は微笑んで言った。その脇には天皇陛下――もとい、秋人がいた。

「いや、本当にびっくりしたよ。吟君が切羽詰まった声で応援を頼んできた時は。」

「一応、切羽詰まっていたんだ。」

僕は言いながらソファーに腰掛けた。隣にシャルが座る。

「ああ、警視総監が捕まらなかったから焦ってね。たまたま服部先生が用事で十条に行くことを知っていたから、一応手を回した後に秋人さんをお願いしたんだ。」

「警視総監って……。」

貴方、そんなに知り合いがいるんですか？

まあ、ロシアの大統領と知り合いならあり得なくはないか。

「秋人さんは皇居を抜け出してよかったんですか？」

「ああ、護衛付きでね。外に何人かいるぞ。」

「ああ……あのグラサンのごつい人ですか。」

ちなみに、帰り着く前にうちの近くに新聞を読んでいるおっさんやたばこを吸っているおっさん、ジョギングしているおっさんがたくさんいた。全員、グラサンで。

うちの前で十人くらいたばこを吸いながら新聞を読んでいるおっさんがいた時はどうしようかと思ったぐらいだ。

「ふう……明日の朝刊は大変だろうな。」

秋人はお茶を飲みながら言った。と、雪がすかさず僕の前にお茶を出した。

「サンキュー。——なんでですか？やっぱりエリザベスさん？」

「それだけじゃないんだ。……明日は学校かい？」

「あ、はい。」

「じゃ、明日はうちに来てくれ。学校には話を通しておく。」

「え……またですか？」

三学期のケツだから出席したいのだが。

「大事な話がある。シャルロットさんも。——さて、お暇しよう。小夜、また明日に。」

「はい、お兄様。」

小夜の見送りを受けて、秋人さんは闇に消えていった。

「シャル、大丈夫か？」

僕は声を掛けると、シャルはコクンとうなずいた。

「……Unbelievable。」

それだけ言葉を漏らすと、僕に抱きついた。

「……泣いてもいいんだぞ。」

「……泣かないもん。」

僕は苦笑すると、優しく唇を重ね合わせた。

「……意地悪。優しくされたら……泣いちゃうじゃない……。」

涙を漏らす彼女を抱きしめながら、日本語が達者になったな、とぼんやり思うのだった。

ハプニングキススル？後編☆（後書き）

ハヤブサです。

服部先生、かっこいいですね。

さすが、銀メダリストがモデル。

これからもちょうくちよく出てきますねー。

学校が絡んだら多分出ますよ。

さて、エリザベスさんの陰謀がばれましたが、次回、それ以上の事実が流れ出ます。

久々のお父様、登場……かも！？

感想、お待ちしております^^

事実が発覚スル？

僕らは午前七時に迎えに来た秋人の車に乗り込んだ。

メンツは、僕、小夜、シャルである。

一兄さん^{はじめ}には留守番をお願いしたから家はよしと。
兄さんも役に立つときは役に立つな！。

「やあ、零君。朝刊は読んだかい？」

秋人は出迎え早々に言った。目に隈ができています。寝不足のよう
だ。

小夜がシャルをつれて中に入ったのを確認してから、僕は口を開
いた。

「ああ。」

僕は家から持ってきた朝刊をヒラヒラさせた。

そのトップ記事にはこう書かれている。

『スワン財閥、麻薬売買に関与。』

「——シャルロットさんには？」

「言っていない。シヨックがこれ以上大きくなると大変だから。」

「……ありがとう。さ、中に。」

僕と秋人は中に入った。

「どういことだ？」

僕は秋人の部屋に入っていた。

そういえば、秋人の部屋に入ったのは初めてだ。

ちなみに、部屋の中はベッドとカラーボックスしかない殺風景な
部屋だ。

いや、タペストリーが一つだけある。

「――ああ、このタペストリーは小夜が誕生日にくれたものでね。どうでもいいが。」

僕の視線を追って秋人は呟いた。そして、カラーボックスに腰掛けた。僕はベッドに腰掛けた。

「平田組の家宅捜索の際に奥の隠し部屋から段ボール入り的大麻が発見された。そして、奥に売人がごっそりとね。」

「……なぜ？」

「供述によると、今日は集会日らしい。イギリスの息のかかった航空会社をごまかして持ってきたようだ。で、念には念を、少し離れた場所で下っ端が事件を起こしてそこに警官を集中させるようにしていたようだ。で、その事件が――。」

「僕らのか。」

「そゆこと。平田組もエリザベスさんの依頼を利用しただけだったが、そう裏目に出ると思わなかったようだ。で、イギリス空輸の人間や、輸送人もあえなく御用。で、ばれちゃったわけ。」

「なるほど……な。で、どうするべきかな。シャルには。」

僕の問いに秋人は考え込んだ。

「――そうだな。隠し通せるのが一番、いい。だが――。」

「この騒動だから耳に入るのは時間のうち、だよな。」

僕は彼の言葉を継いで言った。彼はうなづく。

「ここに置いておくのならば、支障はでない。」

「でも、彼女は嫌がる。」

「だよなー。」

と、ドアからノックの音が響いた。

「陛下、お電話です。」

「ああ、入れ。」

部屋の中に執事さんが入ってきて電話の子機を渡すと退出した。

「もしもし……ああ、吟君か。え？スピーカーホン？かまわないけど……。」

秋人はスピーカーホンにすると、僕にも声が響いてきた。

『やあ、零君。いるんだろう？』

「ああ。」

『公欠って時点で分かったけど。で、シャルロットさんのことだろう？』

「ご名答。よく分かったな。」

『朝刊を見れば分かる。昨日の調子だと彼女に言う方法が思いつかないのだろう？』

僕は苦笑した。奴には敵わねー。

「そうだよ。名案でもあるのか？」

『いや、ヒントをくれてやろうと思って。』

「え？」

『家に電話をしてごらん。』

家に電話？出るのは兄さんか雪だろ？

「あ、そういえば学校じゃ電話は御法度じゃないのか？」

『なんだ、そういうことか。』

そういうと、あっちで何かごによごによと誰かと話す音が聞こえた。

『私が許可した。』

聞き馴染みの声だ。

「あ、服部先生。」

『次回、文芸部に来たときは分かってるやろな？お前のノルマが山積みだげんな。』

「う……。」

『そういうことだ。頑張り給え。』

「助けてくれは……しないよね？」

『ふふ、十分、助けたろう？——むしろ、こっちが助けてほしいくらいだが。』

「え？」

今、珍しく吟が弱音を吐いたような……。

『いや、何でもない。じゃ、家に電話をしてごらんなさい。』

そういうと、彼は電話を切った。

「——家？」

僕は秋人と顔を見合わせると、自宅にダイアルした。

『もしもし。』

雪の声だ。

「僕。零。」

『あ、レイちゃん？今ね、帰ってきてね……。』

「え？誰が？」

『私だ。』

——あれ？ずいぶん、久々な声……。

「どなた？」

『おいっ！自分の父親の声を忘れるなっ！』

「あー、父さん。」

『……全く、襲われたと聞いて夜の便で飛んできたんだぞ。吟君から聞いてね。』

「……早くね？」

『今の科学力を舐めるな。で、今、どこ？どうせ、帝聖城だろう？』

「ご名答。」

『吟君からメールで聞いた。すぐに行く。シャルちゃんを説得するには私が適任だろう。』

「じゃ、溝口さん、申し訳ないのですが、大宮駅まで出て頂けませんか？」

秋人が口を挟んだ。電話口の向こうで息を呑む気配が伝わってきた。

『陛下！仰せのままに！』

そう言うのが聞こえると、乱暴に電話が切れた。

「あーあ、ったく……。』

僕ははあ、とため息をつくと、電話を切った。

「すぐタクシーで行きますよ。多分。」

「……せっかちな。」

「だね。」

僕はため息をついた。はあ……。

こんこん、とノックが聞こえた。

「どうぞ。」秋人が言うと、戸が開いた。

「あ、やっぱりこっちにいたのね。お兄様。零。」

小夜が入ってきて僕の隣に腰掛けた。

「ん。じゃ、役者がそろったから、話すか。」

と、秋人が目を輝かせて言った。

「皇族の人権について。」

皇族の人権が変化スル？

「――変えられたのか？」

僕は緊張して訊ねた。小夜も緊張した面持ちだ。

「結果から言えば、そうだ。吟君の細工でね。元々、天皇に政治をやらせた時点で『天皇は国民の象徴』っていう謳い文句は使えないんだからごり押しすれば何とかなったんだろうけど……。」

「じゃあ、私は――。」

小夜が言いかけると、秋人はこっくり頷いて言った。

「結婚もどこに住もうが自由だ。ただ、由緒正しき皇族一族だから男子は認められていない……だから自分は認められていないけどね。」

「――なるほど。」

僕はそれだけ言うと、秋人はおどけた様子で言った。

「んな悄氣るなって。元々、小夜のためだし、好きな人なんていねえからよ。」

そう言われても何か悪い気がするが……。

てか、本当にいなかったのだろうか？と少し気に掛かった。

と、小夜が突然、三つ指をつけて秋人にぺこりとお辞儀した。

「お兄様、ありがとうございます。」

「ん、ま、いろいろな規定も絡んでいるからしつかり覚えて貰わなきゃいけないけどね。まあ、大事なことは、零君と小夜の結婚が認められたということさ。」

秋人がそう言った瞬間、ドアがノックされた。

「入れ。」

「お電話です。陛下。」

従者が入ってきて電話を手渡した。

「私だ。……ああ、分かった。会見はいつだ？……分かった。じゃあ、その時間までに溝口さんを。……え？……ああ、分かっている。」

任せたぞ。」

秋人はやりとりを済ませると、電話を従者に返した。従者が出て行くのを見届けると、秋人は口を開いた。

「あと、数十分で溝口さんは来る。軽く説明をした後、会見に向かわねばならない。」

「分かった。シャルは今、どこに？」

「客間にいる。テレビでも見ているだろう。ああ、もちろん、麻葉関連のは省かせている。」

「少し、話をしてくる。もちろん、そのことは言わないが。」

「ああ、分かった。小夜、案内を。」

「はい。」

僕と小夜は秋人の部屋を出ると、廊下を歩いた。

「よかったな。小夜。」

「ええ、これで……一緒にいられる。」

小夜は嬉しそうに僕の手を握った。が、少し彼女の瞳には翳りが見えた。

「……秋人のこと、気になるか？」

「ええ……仕方ないとは思うんだけど……お兄様、どこか寂しげな顔をしていたから……。」

健気な妹さんだよな……。

「大丈夫、あいつなら。それにまじめに恋愛したいなら、まだ何らかの手段はあるよ。」

僕はそう言いながら、小夜の頭を撫でた。

と、頭の中で思いつきが生まれた。

「……なあ。どっか、旅行に行かないか？」

「ん？どうしてそんなことを？」

「……いや、何となく。」

僕がそう言うと、彼女はくすっと笑った。

「零らしい。いいね。旅行。」

「だろ？みんなでどっか行こうぜ。」

「ええ。でも二人つきりでもいいかも。」

「ああ、それもいいな。」

「ま、みんなが許してくれるか分からないけど……あ、ここ。」

小夜がある部屋のふすまで立ち止まった。

「一応、時間があるから早めにお願ひね。」

「分かっているよ。」

僕は小夜の言葉に頷いてから部屋の中に足を踏み入れた。

「……あ、レイ、ここすごいね。和菓子も多いし。」

シャルが落ち着いた笑みを浮かべて抹茶を啜っている。

「だよな。一流の人が勢揃いだからな。」

「あ、えっと……エンペラーと何を話していたの？」

エンペラー？——あ、皇帝か。

「ん、皇族の人権について。それに関しては父さんの方が詳しい。」

「そうなんだ。互いが身分の差を気にせずに結婚できるときがくれば……こんなことがなくなるだろうね。」

シャルは遠い目をして言った。こんなこと、とはエリザベスさんのことだろうな。

「——いや、なくならないかもな。人が感情がある限り。」

「——リアリスト。」

「悪かったな。」

「でも、そんなことが好き。」

「どうも。」

僕は微笑んで言うと、シャルは僕に軽くキスした。

「私、いつか、この世界に愛の格差を無くしてみせる。」

「……いいな。できたら。」

「やる。」

「ああ、協力するさ。」

シャルは輝かしい笑顔を浮かべると、僕に抱きついた。

「一緒に……いてくれるよね！」

「ああ、もちろんだよ。どんな事実があらうと、家族であり続ける

限り、ね。」

しばらく彼女と話すと、頃合いを見て席を立った。ちやうどそのとき、秋人と父さんが歩いてきていた。

「父さん。」

「ああ、陛下からお話を伺った。すぐに彼女に話す。」

そう言うのと、疲れたような表情で僕の頭を撫でて入れ替わりに客間に入っていった。

英語が聞こえてきたことから英語で話すらしい。

親父らしい。

「秋人は、もう会見？」

「ああ……随分、世間を騒がしているからな。今月はワイドショーの話題がいっぱいだろうな。」

「——他に何か変なことしたのか？」

「いや、そーゆー訳じゃないが、やはり人権を変えた者だから日本国憲法を変える事態にもなる……国民投票などの手配も回さねばならない。」

へー、そうなんだ……え？

「まだ決まっていらないの？」

「あー、厳密にはそうだ。小夜がいるところ、建前で言ってしまうが……。とりあえず、結婚は認められたが、天皇が国民の象徴であることは変わらないから……。だが、うまく行けば私の恋愛も認められる……。これはオマケだがね。」

「——人間って難しいな。表現の違いだけで。」

「そうだな。」

僕と秋人は揃ってため息をついた。

「じゃ、行ってくるよ。……ああ、吟君に伝えてくれないか？ 依頼料は三日後につて。」

「依頼料？……ああ、あれか。分かった。」

ロシアに関与させるなど派手なことをさせたもんだから依頼料ぐ

らいとつてもおかしくはない。

「ん、任せた。じゃ、後で。」

秋人は手を振って廊下を歩いていった。

それが最後に僕が見た彼の無事な姿だった。

皇族の人権が変化する？（後書き）

ハヤブサです。

オーストラリアに行ってきました。

いや、疲れました。

つくづく自分は日本が性に合っているようです……。

タイトルがネタ切れ気味だったりします。

スル？にするのはしんどかったりしますし。

まー、次回から一気に事態が動きますけどね。

最後の文で分かりますよね？

次回、秋人が……。

ご期待下さい！

魔の手が迫ったりスル？

会見場に僕は来ていた。

小夜が来ようと言ったので。

まあ、言われなくても来るつもりだったけど。

なんでこんな席ですかねえ？

壇上のすぐ脇。警備員さんが立っているような場所。

「――超VIP待遇じゃん。」

僕の呟きに小夜は苦笑した。

「ごめん。さすがに記者さんでいっぱいだったから……。」

「まあ、だろうけど。」

僕はパイプ椅子の背もたれにもたれかかりながら言った。

視線を滑らせると、会場の天井には無数のライトとロープがある。

そいや、劇場でもあるんだっけ。ここ。いや、便利だな。

壇上の隅には……おや、誰かが来た。

「さて……陛下のご登場か。」

カッソカッソと靴音をたてて、現総理大臣、そして天皇陛下である帝聖天皇が入ってきた。

記者は早速フラッシュを放ち始める。

が、秋人が手を挙げた瞬間、それはやんだ。

しかし、ここからだとはよく見えないな……。明かりのレバーが邪魔で……。

「えー、今回お集まり頂いたのは――。」

彼の言葉が紡がれ始めると同時にボールペンのカチカチという音や機械の作動音、輪ゴムを弾くような音まで聞こえてきた。

記者も忙しいな……。

——ひゅんっ。

何か橙色の物が目の前を走った。

——かこん。

何かが動く音がした。

ふっと明かりが消える。

「な!？」

僕は腰を上げかけた時、何か閃光が走った。

次の瞬間、ごつと凄まじい音が響いた。

同時にまた閃光が走る。何なんだ？

——ばりんっ！

ガラスの割れる音。所々で悲鳴が走った。

僕ははっとなって目の前にあった明かりのレバーを探った。

こつと手に何かが触れた。レバーだ。下がっている。

僕は力を込めてぐっと持ち上げた。

バツと明かりが会場に満ちた。

「き、きゃあああああああああああああ！」

悲鳴が上がった。

壇上には血まみれの秋人がいた。

秋人が救急車で搬送されたのを見届けると僕は不自然な寒気に思

わず深く息をついた。

「――小夜、行かなくてよかったのか？」

「後で、行く。私には私のつとめがある。」

そう言うのと、小夜は報道陣の方に歩いていった。

つくづく、大変な職だと思う。

「さて、どうしたものか……。」

僕は思案した。自分の頭の中には複雑な渦が生まれていた。

自分の義理の兄に当たるようになる人間を致死するような傷を負わせた奴への怒り。

そして、それにつく疑問。

分からね、なんだ、これは。

しばらくして小夜と病院に向かうと彼は集中治療室に入っていた。

「……お兄様……。」「秋人……。」

僕と小夜はソファ―に腰掛けて呟いた。

と、誰かが病院の廊下に靴音を鳴らして歩いてきた。

「溝口様。」

僕が視線を投げかけると、いつも送迎している執事さんだった。

「今、警察と天皇私設護衛隊が総力を上げて犯人確保をしております。」

「でしょうね。彼の様子はどうですか？」

「――何とも言えません。側頭部を鈍器で強か殴られておりました。」

「凶器は？」

「特定できていません。」

「……くう……なんてこった。」

天皇に恨みを買う人間といえば、政敵かスワン財閥、ないしは平田組……。

「小夜様、もし、秋人様の意識が戻らなかった場合、小夜様が天皇となります。これは先ほど、宮内庁で決まったことです。つまりは、

零様との縁談も――。」

「分かっています。」

小夜は執事さんの言葉を遮って言った。

「ただ、お兄様は絶対、戻ってきます。ですから、その方向で。」

「……どちらの対応もとれるようにしておきます。」

……大変だなあ。他人事じゃないけど。

僕もやれることをするか。

義兄の敵を討つために。

僕は近くにあった公衆電話に硬貨を押し込んだ。

番号をプッシュし三コールほどで彼は出た。

「ああ、吟？ ニュースは見た？」

『ああ、どこの病院だ？』

吟にしては単刀直入に切り込んでくる。

車の音がしているということはこっちに向かっていているかな？

「国立帝聖病院。」

『だろうな。今、向かっている。ロシアの政府に協力を要請した。

あっちは日本に恩を売れるって興奮していたからすぐに医師団をよ

こす。最近、あっちでは機巧人間を作ったとかでその術を応用すれ

……まあ、その辺はついてから話すが。』

「すまない。」

『その辺もいい。どうせ、秋人さんから治療費ふんどくるから。』

「人聞きの悪い言い方だな。」

『いいだろ？ さて……問題は犯人だな……。と、着いた。今、そこ

に行く。集中治療室の前だろ？』

「ご名答。」

『あと三分でそこに行く。待ってろ。あ、運ちゃんこれ。領収書も

お願い。』

精算の音を最後に電話は切れた。

「――誰と話していたの？ 吟君？」

「ん。ロシアに手回ししてくれたって。」

僕が受話器を置きながら声をかけてきた小夜に微笑んで言った。

小夜は安堵の表情を浮かべてソファーに座り込んだ。

「なんか、零と吟君がいるだけで無敵って感じがする。」

「あながち間違っちゃいないな。吟だけで無敵だけだな。」

と、もう到着だ。早いな。

「ロシアが国家をあげて医師をかき集めて送ってくるはずだ。小夜さん、安心してくれ。」

吟は息を切らしながら小夜の隣に腰を下ろした。

「溝口さんに連れてきて貰った。執事さん、これを。」

彼は息を整えながら懷からUSBメモリーを取り出した。

「これは……？」

「見れば分かる。さあ、家に帰ろう。ついでに話を聞きたい。」

僕は頷くと、腰を上げた。同時に小夜も立ち上がる。

「行こう。彼の傷害の瞬間を思い起こすことになるのは悪いとは思うが……警察はおそらく役に立たない。」

彼は苦々しい口調で言いながら立ち上がって歩き出した。

「……え？」

僕と小夜は思わず聞き返した。

「今回、秋人の政敵——反天皇集権国家派が警察に圧力を掛けた。」

「——なんだって？」

「つまりそれは……。」

「政府の中に犯人がいる可能性が高い。」

魔の手が迫ったりスル？（後書き）

ハヤブサです。

推理物の要素が入りましたが、ご安心を。

ただ、彼らは秋人に怪我を及ぼした人を探しているだけですから。

次回、久々の家族勢揃い、そして、平田組の魔手……？

お楽しみに！

謎の人物、訪問スル？

「なるほど、確かに。」

父さんがチャーターした車の中で僕らはそのときの状況を話した。

「閃光……ねえ。スタンガンの類か……。」

ちなみにさっき聞いたのだが、父さんに送ってもらったというのは父さんの財布で送ってもらったことらしい。

「少し行って調べてみたけどね。不自然な点がいくつか。」

吟はメモを取りながら言った。指を三本突き出してゆらゆらと揺らしている。

「一つ。上のスポットライトのいくらかがあるけど、それを支える鉄骨のいくつかに溶けたゴムがくっついていたこと。」

「ゴム？何でそんな物が？」

「二つ。ブレーカーに細工の跡がなかった。なのに照明が落ちた。」

「え？マジで？」

「おう。他の場所に電源もなかった。つまり、零の前にあるレバーしか照明を弄れなかった。だが、それを弄っていないのは小夜さんが見ている。」

吟の言葉に小夜はコクンと頷いた。

「そいや……明かりが消える直前に何かが目の前を通過したな。橙色の何か。」

「橙？うーん……。」

吟はメモを書き足した。そしてまた口を開く。

「三つ目。会場の近くには川があるのは知っている？」

「初耳。」

「そ。まあいいんだけど。近隣の住居の人がそこで同時刻に水音を聞いている。どぼん、って。」

「じゃあ、凶器はそこに？」

「いや、警察が調べたがなかった。しかし、面白い物が手に入って

ね。」

吟はにやっと笑うとテープを取り出した。

「その近隣の人が川の音を集音していたんだ。生態系調査の人でね。そのテープを貰ってきた。これを元手にどんなものか調べてみるよ。凶器の特定は時間はかかるまい。」

「――それが気になる点？」

「ああ、最後のは気になるわけでもないが。」

吟は言いながらテープを仕舞った。

「――で、この話、運転手さんが聞いているけど大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。」

僕が指摘すると彼は冷静に言った。

「秋人の従者でね。ちゃんと信用になる。」

「ん……分かった。」

僕が答えると、次に吟は父さんに話しかけた。

「溝口さん、秋人さんを恨んでいた政治家をピックアップしてデータくれませんか？」

「ああ……構わんよ。調べはついている。」

父さんはぐっと親指を突き出して言った。ちなみに彼は助手席にいる。

「――吟さん。」僕の隣でずっと手を握っていた小夜が口を開いた。

「お願いします。お兄様に怪我を負わせた犯人を捕まえて。」

「……それは正式な依頼かな？」

吟は間をおいて言った。その顔にはどこか楽しい表情が浮かんでいる。

「え……あ、はい。」

「分かった。この吟詠、しかとこの犯人を捕まえよう。」

「あ、吟君が、」「探偵になった。」

父さんと僕は思わず呟いた。

この吟詠は『哀れな魂の懇願依頼』を受けるとそれをどんな代償を払っても遂行

する『探偵』となるのだ。

ただし、値段はぼったくり。

「契約書は書けないが、握手だけでそれを済ませてくれ。溝口さん、それを見届けてくれ。」

「分かった。」

そう確認するがより早く、吟は小夜に右手を差し出した。真実への梯子

（ちなみに補足だが、こうルビが振ってあるのは本人が僕の依頼を受けたときにそう言ったからだ。）

小夜は少し躊躇して僕の顔を見た。

僕は真剣に彼女を見返すと、コクンと彼女は頷いて吟の手を握った。

「契約は成り立った。やろう。」

吟は真剣なまなざしで言った。

と、そのとき頃合いを計ったかのように車が停車した。

「溝口様、着きました。」

「ああ、ありがとう。少ないけど、お礼だ。」

お父さんは札を何枚か運転手に渡すと、僕らに合図して外に出た。

「僕はこれから調査に赴く。確認するけど、零君、協力してくれるね？」

僕らが外に出ると、吟が顔を突き出して訊ねてきた。

「愚問だな。」「ありがとう。」

僕らは笑みを交わすと、それぞれの道へと進んだ。

「零、小夜さん、大丈夫でしたか？」「お帰りなさい。」

モカが出てきて出迎えた。一拍遅れて雪が出てきて安堵の息を出した。

「ああ、肉体的にはね。」

僕はそう言いながら居間に上がった。

「——最近、忙しいね。お兄ちゃん。」

百合が僕にぴょんと飛び乗りながら言った。肩車状態です。

「まあな。でも父さんよりはマシだよ。」

「どうだか。」

僕と父さんは笑いながらソファに腰を下ろした。その膝の上にシャルが飛び乗る。

続いて僕の右隣に小夜が座る。そして左隣はモカ。膝の上はシャル。肩の上に乗っているのが百合。

「――何というかすごい光景だな。」

「ハハハハ……。」

兄さんがひょこつと出てきて言った。僕は苦笑するしか出来ない。「だってお兄ちゃんは私の物だもん。」

「わ、私の物ですっ!」

「私も!」

おいおい、僕は僕の物だ。勝手に言うんじゃない。

「人気ね。レイちゃん。はい、お茶。」

「サンキュー。」

僕は雪が差し出したお茶を受け取って上に乗る百合のためバランスを崩さぬように茶を飲んだ。

「ああ、暖まる。モカ、明日、学校だよね。」

「そうですよ。零は公欠取りすぎです。」

モカはふくれっ面で言った。

「わりいわりい。部活は?」

「部長はもう来なくて良いって言ってます。」

「げ。」

あの部長だったら言いかねないな……。マジ凹む。

「冗談です。早く戻ってこい。お前のノルマが山積みだ、と。」

「あー、だろうな……。モカ、手伝ってくれるか?」

「零の態度次第ですね。」

僕は苦笑して、モカの腰に手を回してぎゅっと抱き寄せた。

仄かに、彼女らに心が温められるのが分かった。

「わーったよ。――ん?」

ピーンポーンとインターホンが鳴ったのはそのときだった。

「誰だ？こんな遅くに。」怪訝そうな顔をした父さんが腰を上げた。雪と父さんが玄関に行つて戸を開けた。

「……どなた？え？零？いいですけど……。」

父さんのやりとりが聞こえる。僕を所望か。

「わりい、百合、シャル、降りてくれ。」

「うー、またやってね。」「OK」

百合とシャルはすぐすごごと僕の肩から降りる。

僕はすぐさま立ち上がって身だしなみを整えてから玄関に向かった。

玄関には父さん、雪、そして見知らぬ少女が立っていた。

ちっちゃくて茶髪のツインテールで可愛い。が、鋭い目つきがその可愛らしさを払拭する。

「——どなた？」

僕は少し気圧されながら訊ねた。

彼女は無言で鋭い視線を僕に向けていたが、やがて口を開いた。

「私は平田恵。平田組長の娘よ。」

謎の人物、訪問スル？（後書き）

ハヤブサです。

最近、キスネタが出てきません。

しかし、そんなにキスしていたら唇もすり切れてしまいそうなんですよ。すけどねー。

ま、次はキスネタですね。

どうぞお楽しみにー。

ヤクザとキススル？

僕は雪と父さんを腕で後ろに追いやった。

「――何が目的だ。」

「邪険ね。あたしは何もしていないのに。」

ツインテールをくるくる弄りながらその少女は鋭く僕を見据えた。

「ま、いいわ。あたしは礼を言いたくて来たの。」

「は？礼？」

「そ。平田組って言うのは二つあるの。兄弟がそれぞれ立てたからね。で、闇商売の方をやっていたのが兄側の方で、こっちもさんざん搾取されていたの。弟側だから。」

「ふむ……で、兄側が告発されたから……搾取から解放されたと。僕は少し考え込んで言った。」

んー、この少女、そういう立ち位置なら利用できないかな……。

「ま、上がってよ。少しお茶出すから。」

「ありがとっ。」

少女はニコリと笑った。その笑顔があどけなくて一瞬見とれてしまった。

「――じゃ、どうぞ。雪、悪いけど。」

「お茶ね。分かったわ。」

雪は頷くと台所に行った。父さんが素早く平田さんを居間に誘った。

僕は携帯電話を出す素早く吟詠にメールを打った。

『平田組（弟）の組長の娘が訪問してきた。どうする？』

送信ボタンを押すとポケットにしまつて居間の中に入った。

ちょうど、挨拶が済んだようだ。平田さんはソファに座っていた。

「挨拶遅れました。僕が溝口零……っていつでも知っているけど。」
「ま、何はともあれ、よろしく。」

僕と平田さんは握手をすると僕は向かいのソファ——すでに父さんとモカが座っていた。他は多分、自室に戻ったかな？——とにかく、ソファに座った。

「平田組ってどんなことしているんですか？ ちょっと興味があるんですけど。」

僕が訊ねると、彼女は鋭い視線で僕を見た。——やべ、ちびりそうになった。

「……話す義理はないけど、恩人だもんね。あ、敬語じゃなくていいから。それに恵って呼んで良いよ。」

「はあ……じゃ、恵さん。」

「ん。暴力団だけど、あんまりそんな悪いことはしていないよ。主な仕事は用心棒かな。探偵稼業もしているけど。悪いことをしているのは、伯父——平田の兄組の方だよ。」

「へえ。」

僕が何となく背景を理解しながら頷いていると、雪がお盆を持って入ってきた。

「お、お茶です。……ひゃっ！」

と、雪が足をもつらせて倒れてしまった。

湯飲みは弧を描いて恵さんの方に——。

なんて間の悪い！

「くっ！」

僕は反射的に手を伸ばして左手で湯飲みをつかんだ。

が、お茶が飛び出て恵さんの方に……。

万事休すか！

と、次の瞬間、モカが布巾をバツと広げて飛び出たお茶を吸収した。

僕は湯飲みを置くと、モカに感謝をこめて頷きながら恵さんに訊ねた。

「だ、大丈夫？」

「あ……うん、大丈夫。ありがと……。」

何となくボツとしたような声で言う恵さんに本当に大丈夫か確認してから、湯飲みを置くと、父さんが雪を助け起こしていた。

「大丈夫か？雪。」

「う、うん、ごめんなさい。」

雪は申し訳なさそうに俯いて言った。

「大丈夫。代わりを頼む。」

「うん。」

雪が再び台所に行くのを確認してから僕と父さんは再度ソファに座り直した。

「いや、娘の見苦しいところをお見せしました。」

「あ、いえ、そんなことは――。」

父さんの言葉でボツとしていた恵さんははっとしたように言った。
と、そのとき、携帯電話がふるえた。

「失礼。」

僕は居間から出ると廊下で電話に出た。

『零か？』吟だ。

「ああ、メール見たようだな。」

『ああ、平田の弟側の娘が来ていたのは驚きだ。』

「それはだな……。」

僕は居間に声が行かないように小声で状況を話した。

『なるほどね。その娘は使えそうだな。』

「だろ？で？」

『そうだな……。その平田組長から話を聞きたいんだが……。』

「そうすれば良いんだな？」

『ああ、そうすれば、平田組が政治関与していたか分かる。』

吟の言うことももつともだ。

「了解した。」

『気をつけろよ。お前と天皇との関わりは悟られないように。』
「分かっている。」

僕は電話を切ると、居間に戻った。

「へえ、なるほどね。そういうサイクルか。」

「そうそう、おじさんも物わかりいいね。」

「同じような商法をしている息子がいるものでね。」

———会話が弾んでいますね。

「ああ、零、帰ってきたか。」父さんは僕を見て言った。

「ども。お待たせしました。」

「いえいえ。」

僕が再度席に座ると同時に父さんに目配せをした。

父さんは分かっていると頷いた。

僕らはしばらく談笑を続け、頃合いを見計らって話題を切り出した。

「そう言えば、お父様ってどんな趣味があるの？」

恵さんはくすつと笑って言った。

「ん、そうね、カバディかな。」

うわあ、意外と似合いそう。

「へえー、そうなんだ。カバディって体育でやったけどすごく楽しいよね。」

これは嘘だ。だが、カバディの経験はある。

「そう？分からないけど。———でさ、言いたいことがあるなら率直に言ってくれる？」

恵さんは僕を見て言った。笑顔が消えて鋭い視線で僕を貫いていた。

「……分かった。お父様とお会いしたい。」

僕は率直に言った。恵さんが驚いたような顔をした。

「本当に率直に言うのね。もしかして、『娘さんを下さい』とか？」
「違うよ。」

「残念。結構、気に入ったのに。あたし。あんたんこと。」

えと……反応に困るな。

「聞きたいことが、あるんだ。」

「……麻薬？」

「違う。でも、聞きたいことがあるんだ。」

僕が真摯な態度で頼むと、恵さんは考え込んだ。

「……恩人だもんね。分かった。明日、あたしと行く？」

僕はほっとした。第一段階クリアだ。

「——それでさ、お願いがあるんだけど。」

「ん？」

「あんたの恋人……ってことにしてくれない？」

「へ！？」

いや……それは……。

「父さん、部外者はあんまり入れたくないから……さ。」

「……う……。」

背に腹は代えられない。仕方ない……か。

罪悪感を家族に覚えたが、僕は頷いた。

「良かった。でも、一つ。」

「何？」

「ここに泊めてくれない？今日は。」

「えと……。」

僕は視線を父さんに投げかけた。

「ん、いいぞ。ただ、部屋が足りねえな。それは何とかしろよ。」

「——へいへい。」

「オッケ。僕の部屋を使っていいいよ。」

「ありがとっ！よろしくね。あたしの恋人さん！」

そう言うと思さんは僕に抱きついて唇を……！？

「んぐっ……あはっ、気持ちよかった？」

「いや、んな、馬鹿な……。」

僕の口から言葉が零れでた。

「ちなみにファーストキス。うふふ。」

女の子大事にしなさい女の子！！

しかし……まあ……気持ちよかったけど……。

「……零……人の前で……何を……。」

——ってモカさん？何か黒い邪気が……！

「天に召しませ！」

「ひぎゃああああああああああ！」

乙女ロードでキススル？

「うう……モカの奴、阿修羅も良いところじゃねえか。」

僕は文句を言いながら、町中を歩いていた。

「いいじゃん。心配してくれてるんだよ。きっと。」

恵さんは僕の手を握って隣を歩いていく。

現在地、東京都豊島区にある大都市、池袋である。

ここも不況を逃れた場所。どうも、一種の特異な人種が金を使い込んだおかげで助かったらしい。

いや、しかし、その特異な人種にはついていけねえなあ……。

で、現在地がその特異な人種が集う通りである。

——分かった。単刀直入に言おう。

「腐女子道……ねえ。」
乙女ロード

呟いた瞬間に、恵さんに腕をつねられた。

「いたたた……。」

「悪かったわね。事務所はここにあるのっ！」

む、何となく可愛い。ツンデレ属性だよな。

モカ以来の才能の持ち主か。てか、モカは中途半端なんだよなー。

「ここよ。平田組の事務所は。」

「ここ……？」

いや……ないでしょ……。

「マジで？」

「うん、マジ。」

恵さんはそれを指さしているが……信じられん。

「ヤクザってメイドの代名詞だったんだ……。」

そこはメイドカフェである。

「バカっ！それじゃない！その二階！てか何、その言い方！」

恵さんは猛烈な突っ込みをしてくる。

おお、突っ込み人員がまた増えた。いいねえ。

「二階か。なるほど。一階がメイドカフェってのもどうかと思うけど。」

「立地上仕方なかったの。それに組員が働いているから。」

「は……？」

まさか……女装カフェ！？

「一応、言っておくけど、掃除だからね。」

「ああ……。」

「あと、痴漢退治。まあ、これは上がヤクザってことで成り立つけど。」

「へえ……なんか、皿洗いとかやりそうだけどね。」

「皿は割りまくるからダメ。」

「あ……そ。」

お気の毒に。

しかし、なんだかんだで緊張してきたな……。

「安心して。零。あたしがいるからさ。」

恵さんはそう言うと、僕の頬に手を添えて唇にキスした。

——なんだか緊張がほぐれてきた。

「さんきゅ。」

「ん。じゃ、行こ。」

恵さんが僕の手を引いてそのメイドカフェの脇の階段に向かった。

そして、階段を上がると、がちやっとドアを開けて入っていく。

ノックとかしなくていいのかな……。

「おじゃまします……。」

僕が恐る恐る言いながら入ると——。

「お嬢！」 「お帰りなさいませ！」 「お嬢！」 「お嬢ッ！」 「お帰

りなせえ!」

屈強な男達が溢れ出て来て一斉に礼をして銅鑼声で挨拶をした。

「お嬢!この貧弱男は誰ですか!」

む、失礼な。貧弱男とは。

「あ、これ?あたしの婿候補。」

む、失礼な。これとは。

「な!?!」「こんな男が!?!」「てめッ!ざけんな!」「勝負しろ!俺と!」

男どもは一斉に反応して僕に殺気丸出しで向かってきた。

「あ?」

次の瞬間、空気が凍り付いた。

恵さんが鋭い殺気を感じさせる目で男らを見下していた。

「てめえら、あたしの連れに手!出したら分かってんだろうな?」

「――はっ!」「へい!分かってます!」「バカ、存じてますって言え!」「いや、損していますじゃないのか!?!」

――何だ、この突っ込みどころ満載な男共は。

「すみません、お嬢、このデータ見るにはどうしたらええんですか?」

と、男が進み出て言った。

「ん?どれ?」

恵さんがそっちを一瞥すると、その男がUSBメモリーを差し出した。

「あん・・・あんにゃろ、やっとフロップの使い方を覚えたつつのに。」

彼女はそう言いながらそれを受け取ってパソコンに向かった。
そして――。

「ん、入らねえぞ。舐めてんのか？あたしを。」

「ああ！何でフロッピの所にメモリー突っ込んでいるんですか！？」

僕は慌てて突っ込んだ。前言撤回。この人は突っ込みじゃない。ボケだ。

「これはUSBメモリーって言います。ここんところに――」。

僕は恵さんからそれを受け取って正規の所に差し込んだ。

「すげえ。これはここなのか。」

男が感心したように頷いている。常識でしょ……。

「あれ？フォルダが空かないぞ。零。」

「はいはい。」

僕は恵さんが変わってフォルダを開けて中のデータを出した。

「すげえ……。」 「マウス捌きかけー。」 「機械出来る人間、初めて見た……。」

――おい。

「おい、てめえ……。」 一人の男が僕の肩を乱暴につかんだ。

「あ？」

「すみません！お嬢！――あの、すみませんが、この機械を音楽が聴けるようにしたいんですけど……。」

差し出されて機械は音楽機器だった。

「えっと……どの曲が入りたいんですか？」

「これっす。」

差し出されたのは最近の人気女歌手の曲のCDだった。

「このパソコン借りますね。」

僕は機器とCDを受け取って言った。

「すげえ！兄貴、尊敬します！」 「兄貴！次はこいつを動かしてください！」

えっと……今度は携帯電話？

僕は視線を走らせ、落ちていた充電器を拾った。
それをコンセントにさして携帯電話に接続した。

「数分経ったら大丈夫なはず。」

「あざーっす!!」 「兄貴!次はこいつをお願いします!」 「いや、こっちを!」

もう六件処理したぞ……。

何で、機械音痴なんだよ……。

「あの、恵さん?それでお父様は?」

「んー、外出中みたいだけど……もうすぐじゃない?」

「じゃ、その間にこっちを!」 「いや、俺が先だ!兄貴!これを!」

男達は電子機器を持って僕に群がってくる。

えー、ちょ、待って……。

「おい、てめーら、何やってんじゃボケ。」

低い声が響いた。

大して大きくない声だが、シンと事務所が静かになった。

それで僕は悟った。

あの人が、組長か。

ヤクザと勝負スル？

「お疲れ様です！ボス！」「お疲れ様です！」「お帰りなせえませ！御主人様！」「組長、お疲れ様です！」

男達は慌ただしくそちを向いて平身低頭し挨拶をした。

「ふん、何の様な、これは。」

組長はずいずいと組員を退けながらこっちに来た。

こええ……。

「てめえ、何者だ？まさか、内田の手のもんか？」

「違うわよ。あたしの彼氏。」

恵さんの声に組長の目の色が変わった。

「……ふん、この小僧がか？小賢しい……。いいだろう。来い。」

組長はそう言うのと、奥の部屋に入った。

僕はびくびくしながら恵さんと一緒に奥の部屋に入ると、組長はどっかりと椅子に座っていた。

「――さて、何のようだ。小僧。」

「なんて態度取るの？あたしの彼氏なのよ！？」

組長の素っ気ない態度に恵さんは語気を荒げた。

「ふん、それは俺が決める。」

……変だな。彼は僕の目を見ない。

ヤクザほどの男ならそれくらいすると思うけど……。

うん、変だ。

妙に彼の握った場所が濡れているし、どうも慎重に歩いているように見える。

こりゃ……あれだな。

「じゃあ、勝負しましょう。僕が勝ったら正直に僕の求める情報を喋ってくださいるか？」

「「！？」」

組長と恵さんは揃って驚いたような顔になった。

「やめた方がいいって！」恵さんの制止の声。
しかし、僕はすでに組長に詰め寄っていた。

「――逃げませんよね？」

次の瞬間、視界から組長が消えた。

間一髪、僕は身体を逸らせて拳をかわした。

次のモーションに移ろうとする組長の顔が微かに歪み、隙が生まれた。

その隙に乗じない僕じゃない。

素早く彼の後ろに回り込み、そして――。

「ていつ。」

ぶすつ。

「――ッ!？」

声なき声。

組長は力無く前のめりに倒れ込んだ。

「――え？」

恵さんはよく分からなさそうな顔をして驚いている。

「あの、すみません！誰か、この人をトイレに運んでください！」

僕は外に向かって叫ぶと、野郎共が集まってきて組長を抱え上げた。

「ボスッ！」「しっかりして下せえ！」

「……あの……。」

恵さんだけが状況についていけないようだ。

「冷や汗、慎重な動き、挙動不審。これだけくれば何らかの体調不調があるのは分かる。」

僕は淡々と説明した。何故、淡々としているかという、卑怯な手段だったからだ。

「恐らく、下痢だな。」

「は？」

そこで僕がぶち込んだのは、両手を祈るように握りあわせた状態で人差し指と中指を突き出した状態でそれを相手の肛門に鋭く差し込むという……いわゆる、かんちょうだ。

「今頃、トイレで悶絶しているだろうな。」

僕はにやりと笑った。

「待たせたな……。零、といったか。なかなかやるな。認めてやろう。で、聞きたいこととは？」

すっきりした顔で組長は訊ねてきた。

「天皇が襲撃された会見はご存じですね？」

「ああ。」

「そこに関与していますか？」

「している。」

彼は断言した。そして説明した。

「といっても俺たちはただ、警備員で立っていたただけだ。」

「警備員……？」

「ああ。雇われた。その時にブレーカーが何だか知らんが落ちてな。それでブレーカーを上げた。これが目立ったことだな。ああ、その時だったな。事が起きたのは。」

僕はそれを聞いて即座に会場の見取り図を開いた。

ブレーカーは会場の一番左手前の扉のすぐ傍に設置してある。

奥の中央にステージ、その右手に僕らがいたから対角線上にいたのか。

見張りはメイドさんが左壁中央と右壁中央。ステージ左手にあの毎度出てくる執事さんと……。

ふむふむ、こんな配置だったのか。

「これ以外に関与は？」

「いや、全然だ。疑うのも分かるが、兄の手の者は混じっていない。」

これは保証する。」

まあ、真実だろうなあ……。

「さて、話は変わるが。」

組長の口調が変わった。僕は緊張して言葉を待った。

「娘のことだが……頼んだぞ。」

——え？

マジッスか？

「将来、この組を率いて貰うことになる。その覚悟も、あるんだろうな？」

「……あ……はい。」

僕は肯定しろという鋭い視線を向ける恵さんを見て言った。

「うむ、お前のような切れ者がいれば我が組も安泰だ。これからも頼むぞ。」

——えー。

なんかすごいことになっちゃった気がするの……気のせい、なのかなあ……。

別れのキススル？

『んー。』

吟詠が僕の報告を聞いて唸った。

『なるほどね。大体、ピースが当てはまってきたが……決定的な証
拠が……。』

「え？もう？」

『説明は後でするよ。まあ、素人のトリックだったら素人でも解けるからね……フフ。』

吟詠は意味ありげにそう言うと、電話を切った。

「――マジで分かったのかな？」

僕は自分なりに考えていたのだが、つながらなくて放棄した。
何か見落としがあるのかな……。

「ま、いいか。」

それは専門に任せよう。

てか、あいつの方が情報が集まっているだろうし。

僕と恵さんは事務所から家に帰っていた。

とりあえず、恵さんは自分の部屋で寝て貰って僕は居間で寝た。

だが、節々が痛いな……。

さすがにソファで寝るのは身体がきついかな……。

「ああ、零、ちよつといいか？」

「ん？いいけど。」

僕は承諾すると、父さんが居間に入ってきた。

「また少し出張に出かける。一ヶ月ほど、だ。」

「またか。今度は？」

「スバルだ。温暖化が急激に早まってもう沈んでいるも同然の場所
だな。」

そうか……平成時代はまだ大丈夫だったようだが、帝聖の世にな
って急激な経済回復と共に温暖化が加速して海の水位が上がってい

るのだ。

これは社会問題になり、孤島や海拔ゼロメートル以下の場所が沈みかけているのだ。

すでに日本でも沖ノ鳥島が沈んでいる。

「そこで取り残された孤児の保護に向かわねばならない。」

「日本もそこまで抱える財力があるのか？」

僕はほとほと呆れて言った。

「——ここだけの話。孤児というのは実質、かなり少ない。だが、ユネスコからの支援金は莫大だ。むしろ、支援金のために孤児を保護するのだ。」

「うーわ。せっこ。」

僕は思わず呟くと、父さんは苦笑した。

「まあ、そんなものさ。で、急ぎの用事だから明日に出る。」

「また急な——いつものことだけど。」

「うん、まあ、それでだな。今回の出張には雪とシャルロットを連れて行きたいのだよ。」

「ふむふむ。」

雪とシャルをね。

「で、何で？」

「む……オーバーアクションを予想したんだが……。」

「ま、取り乱したってどうなるもんじゃないし。」

「大人になったな……。」

父さんは感心したように僕を見た。

「いつまでもガキじゃないんだ。」

「——どうかな？とにかく、連れて行く理由だが、今回、煩雑な手続きが多い故、内部処理で秘書がほしい訳だ。また雇えばいいと思うかもしれないが、実は懐状況があまり宜しくなくてな。一応、保護家庭だから補助金は出ているのだが……。」

ここで豆知識。

孤児を保護している家庭を保護家庭といい、政府は補助金を出し

ている。

ただし、この補助金は孤児が成人になった後、コツコツと返さねばならない。――利子付きで。

「あー。」

僕は理解した。

雪はもう成人に達し、秘書業をやることによって収入を得ている。しかし、その収入は父さんの懐から出ているのだ。

百合は血縁関係、父さんが引き取らねばならない存在だった。つまりは家族認知で補助金は下りない。

かなり厳しい財政なのだ。

その上、小夜や恵さんまで居候していてかなり財政圧迫されているのだろう。

「ごめん、父さん。」

「何、謝ることはない。その優しさは何より大事だ。」

父さんは嬉しそうに言うと、僕の頭を撫でた。

「シャルロットの方は英語が達者な女の子がいるとうち解けるのも早いと思ってな。」

「二人はなんて？」

「二人とも興味は示しているが、ここの家が気に掛かるようだな。――だろうな。」

「正直、モカや百合が頑張ってくれるから大丈夫だよ。小夜もいるし。」

僕が言うと、父さんは笑みを浮かべた。

「お前の気持ちはどうなんだ？」

「え？」

「別れたく、ないんじゃないか？」

僕は父さんを見て黙考した後、答えた。

「まあ、分からない。そりゃ、別れてからじゃないと。ただ、寂しくなるな……って。その分、埋めることの出来ない空虚が出来るから。そこは雪やシャルでなければ埋めることが出来ない場所だから

ね。」

「——見ない間に言葉が達者になったなあ。」

父さんはまたも感心したように呟いた。

「でだ、それを踏まえて、二人に決心して頂きたいのだが。」

——ん？

視線を居間のドアに向けると雪とシャルが嬉しそうな悲しそうな表情で立っていた。

「——ありがとね。レイちゃん。」

「……うん。」

雪は父さんの方に歩み寄ると決心したように口を開いた。

「……お父様、行かせて頂きます。」

「そうか。」

シャルは未だ悩んでいる。

僕は立ち上がると、彼女の頭に手を置いた。

「悩んでいるくらいなら、行くな。」

「え……？」

「出来れば家族には家にいて欲しいってのは僕の思いだよ。」

シャルは複雑そうな顔で僕を見上げた。

「ただ、ここで行かなければ後悔するっていうのなら……行つていい。」

「——うんっ！」

シャルは涙を微かに目に浮かべて頷いた。

そして彼女は父さんに向き合って言った。

「お願いします。」

「おう。」

父さんは満足げに頷いた。

「いや、お前、本当に祖父ちゃんの血を引いているなあ。」

一兄さん^{はじめ}が欠伸をしながら入ってきた。

「悪かったな。」

僕は呟くと、雪とシャルを両腕で抱きしめた。

「何かあったらいつでも電話しろ。吟や天皇家に相談して即刻飛んでいってやる。」

「……うん。」

「……はい。」

二人はコクンと頷くのを確認した後に、僕は素早く二つ口づけをした。

「——行ってこい。」

「行ってきます！」

部活でキススル？

「ふー。」

僕は久々に来た文芸部でノルマを淡々とこなしていた。

これで三作目である。

大体、モカからどんなものか聞いていたから良かったけど。

多いなあ……。

カタカタ……。

……。

……。

——暫く単調な動作が続きそうだから少し回想していよう。

そう、今日の早朝だな……。

「見送りしなくても良いのに。レイちゃん、モカ、今日学校でしょ？」

雪は苦笑しながら言った。シャルも同意するように頷く。

「でも一ヶ月会えないんだぜ？それだったら間際まで顔を見ていたからさ。」

僕は照れくさくなりながらも頬を掻いて言った。

二人とも嬉しそうに微笑むと同時にアナウンスが流れた。

『まもなく、大宮、大宮……。』

三人はここで降りて特急に乗り換え空港まで向かう。

電車はゆつくりと停車し、扉を開けた。

「よっと。」

僕は二人のスーツケースを持つと、ひょいっと降りた。

「え？ いいよ！ すぐそこだし……。」

「大宮駅舐めるなよ。」

僕は苦笑して言った。

埼玉県庁所在地兼政令指定都市であるさいたま市の中心地、大宮地区の中心にあるこの大宮駅は（前置きが長いわゴラ。）東西にぐっと長くのびている。

というのも、阿安時代、ただでさえ不景気であるのに、ある年に大洪水が起きここの地域は綺麗さっぱり流されてしまったのだ。

高地に逃げて助かった人達も経済的困窮で子供達を捨て、生きようと足掻いた。

保険金が降りたり、銀行から金が降ろせる、と思うだろうが、保険金会社や銀行も流され鉄道や車で逃げようにも線路や道路も流されているというもの。完全にさいたま市は孤立したのだ。

物資がへりで送られたりしたが、それは災害後の三日目。阿安時代の政府が墮落していた故である。

本当は一週間かかるのではないのか、と思われていたのだが、皇太子（今は天皇——すなわち、秋人。）が執事をおどし——説得して、その執事が放送局を脅迫——もとい、説得して皇太子の名で全国に義援金や物資を募り、それを送ったという訳。

で、尊皇主義者の人が『この政府は墮落しているー。天皇が政治をやれー。』と言いまして。

秋人も乗り気だったためにこのような現状になっています。

えっと、尊皇主義者の人がやる気がなさそうなのは突っ込まないでください。

何故か途中から丁寧語……。

——と、説明が脇道に逸れた。

で、洪水で線路も流され、新たに線路を引かねばならなくなった

のだけれど、金がない。

なので、イギリスのスワン財閥に掛け合って、大宮駅の営業権を与える代わりに線路をバツと引いて貰った訳で。ついでに援助も貰って。

まあ、スワン財閥はやることが派手で。

そのお陰で今の駅があるのだ。

どれくらい派手か……それは東西に一キロも延びているということとで分かるだろう。

「Grandmaもやることが派手。」

みんなと特急乗り場（東に五百メートル。）へ歩いていると、シヤルはそうばやいた。

まあ、だからヤクザさんも雇うのだろうけど。

ちなみに、駅の端と端にはミニシャトルもある。

いや、便利だねー。

しかし……スツケース重いな……。

何を入れたらこんなに重くなるんだ……？

二人分でおよそ五十キロほど。

——重いです。

自分でもよく持てると思います。

いや、さすがにキャスターで転がしていますけどね。

——とそんなことを考えているうちにホームについた。

「うむ、あと三分でつく。ちょうどいい時間だ。」

——父さん、いつもぴったりですからね。

もう少し早く出ようよ……。

「よっと。」

僕は階段を下りるために抱えていたスツケース（×2）を降ろした。

ゴーツと丁度良く、特急が滑り込んできた。
停車するとドアが開いた。

「よいしょ。」

僕と父さんでまずスニーカーを積み込む（ごめんなさい、もう筋肉痛でダメです。一人じゃ。）と雪とシャルが乗り込んだ。

「じゃあ、頑張ってきて。毎日でもメールしていいから。」

おいおい、勘弁してくれよ。金が……。と言う父さんを乱暴に列車に乗せながら言った。

「うん、着いたら連絡する。」

「Goodbye!」

僕は手早く二人にキスをした。

やがて、ベルが鳴り響く。

「――帰ってきて、な。」

「うんっ!」

しゅーっとドアがしまった。

僕とモカは手を振って見送った。

列車はすぐに見えなくなってしまうた……。

「――ぱい!先輩!」

僕は我に返って振り返った。

「すごい集中していたんですね。手だけが物凄いスピードで動いていました。」

「ああ……まあ……ノルマがたくさんあるからね。」

僕は苦笑すると、ファイルを保存した。

山内さんはおかしそうにくすくすと笑うと、デスクに鍵を置いた。

「私、上がるので鍵、お願いしますね。」

「あ、はい、お疲れ様。」

「はい。」

山内さんはニコツと笑うと、一礼した。

僕が作業に戻ろうとしたが、気になることがあって声を上げた。
「そういえば、服部先生は?」

「え？先生ですか？何でも、大切な用事でお休みとか。」

山内さんは扉を開けようと手をかけた状態で振り返った。

「ふーん、あ、ありがとう。お疲れ。」

「あ、はい、お疲れ様でした。」

山内さんが出て行くと、ふーっと長く息を吐いた。

大切な用事……ねえ。

吟のせいでもうでも良いところに注意が向くようになった。

「さて……これで終わりつと。」

「零、こっちも終わりました。」

ずっと一言も喋らなかったモカが僕に顔を向けて言った。

いや、ずっと左のデスクで黙々と僕のノルマをやってくれました。頭が上がりませんねー。

「じゃ、お礼の時間といたしますか。」

「ハイハイ。ではよろしいですか？お嬢様。」

僕は冗談を交えつつ、立ち上がると彼女の手を取った。

——ここで『いつになく大胆ですな！』とか入れると『バ、バカ、そんなもんじゃないですっ！』と言ってくれるのだろうが、本日は疲れているのでさっさと終わらせたい。

僕は彼女の頬に手を添えると、サツと頬に朱が差した。

やばっ、可愛いー。

なんて思いながら唇を近づけていく。

『溝口零君、至急職員室に来なさい。』

放送が突然入った。

「——残念、お預け。」

僕は言うのと、鍵と荷物を取った。

「むう……また今度ですよ？」

「ハイハイ。」

タクシーでキススル？

ガラガラ……と音を立てて職員室の戸を開けた。

「溝口零です。放送で呼ばれましたが……？」

僕がそう言うと、先生の一人がこっちに来了た。

「溝口君、服部先生から電話が来ていてね。すぐに代わって欲しいと。どうも緊急らしい。」

先生はそう言うと、電話機を僕に渡した。

「はい、溝口です。」

僕は電話を受けると、先生の荒い吐息が聞こえた。

『やっとか……や、俺の車がよ、カージャックに遭ってなー。』
はい？カージャック？

『さっきからどっかの敷地をぐるぐる毎時八十くらいで走っているんだよ。』

「でも、そんな事件は――。」

僕は部活の合間に見たネットのニュースを思い返したが、なかった。

『警察の黙殺だ。そんなことで国民がパニックになっちゃいけないだろう？』

「警察には？」

『もちろん、言った。そしたら、そのどっかの敷地に誘導されてガソリンを継ぎ足しながら走らされている。犯人のメモだと、誰か一人でも降りたらドカンだとよ。』

マジですか……？

僕は冷や汗を感じた。もしかして……平田組？

と、そこで不自然な先生の表現に気がついた。

「誰か一人……？」

『ああ、運のいいことによ。俺の嫁が乗っていてくれてな。それで一緒に半永久的にドライブさ。まあ、そのお陰で運転を代わって貰

って今、電話を掛けられているんだ。』

服部先生はそう言うと、女性の声が少し聞こえた。

「じゃ、そのまま半永久的に？」

そしたらぞっとするね。うん。

『いや、爆処理が解体中。もうすぐで解放される。だけどよ、俺の家がちっと面倒な娘がいてな。』

面倒な娘？なんだ？その言い方は。

『あー、詳しい事情は本人に聞いてくれ。嫁と運転を変わないと――嫁、免許なしでさ。』

おいッ！免許なしに運転させているんかい！

と、突っ込みたくなるのをぐっと堪えて僕は言った。

「――分かりました。それで？」

『ああ、この件は内密に、ってこととその娘を一日だけ引き取ってくれねえか？』

そう言うと、服部先生は早口に住所を述べた。

僕はそれを暗記すると、頷いた。

「了解しました。」

『あいつには〈Merlin-100〉と言えば通じる。じゃな！何だ？その機械みたいな名前。』

僕はそう思いながら電話機を握りしめた。

「服部先生は何だって？」

電話機を渡した先生は訊ねてきたが、僕は「明日、部活は休みだと伝えてくれて言われました。」とごまかした。

だが、僕の脇にいたモカにも聞こえたようだ。

モカは青ざめた顔で僕の握っていた電話機を見ていた。

僕は電話機を返すと、モカと共に学校を出てタクシーを捕まえた。乗り込むと、運転手さんに先生の言った住所を伝えた。

道路をゆっくりと滑り出すのを感じながら、僕は吟詠に電話した。

『なんだ？零、今、ロシアと連絡を……。』

「それどころじゃない。」

僕は電話に出るなりそんなことを言った零を遮り、早口にカージヤックのことを言った。

『――何だって？まさか平田の連中か？』

「僕もそう思った。だから帰ったら恵さんに確認する。」

『そうしてくれ。だが、爆弾なんて使うなんて……。』

「そいや、秋人の件はどうなった？」

『ああ……だから今、ロシアに連絡しているんだ。もしかしたら最悪の手段を使うかも知れない。』

吟詠の声が強張っている。いつもは余裕綽々なのに。

いや、余裕綽々すぎるんだな。

あいつは授業中に本を読んで、それを見つかっても平気なのだから。

「最悪の手段？」

『ああ、カージヤックが犯人の仕業なら。』

「――ロシアじゃなきゃダメなのか？天皇家が力を貸してくれるだろ？」

『その真偽は今度明らかになる。じゃ、確認を頼むぞ。』

吟はそう言うと、電話が切れた。

少し考えながら、傍らを見るとモカが青ざめた顔で震えていた。

「大丈夫か？酔ったか？」

「いえ……。」

どうしたのだろうか？何かあるのか？

そう言えば、カージヤックの時を聞いた時から青ざめていた。

もしかしたら……トラウマ、か？

「大丈夫だ。モカ。」

僕は耳元で囁きながら、口づけをする。

ちなみに運転手さんには見えないようにちよつと苦心中。

「僕がいるから。」

唇を離すと、モカは頷いて僕の手を握った。

よし、少し元気になったか。

と、車がゆっくり停車するのが分かった。

「着きましたよ。お客さん。」

運転手さんが低い声でそう言う。

「少し待っていてください。」

僕はそう言うと、外に出た。

目の前には二階のモダンな家があった。

表札は『服部』である。ここ……だな。

僕はインターホンを押すと、ピンポンと音がした。

そして、扉を開けて誰かが出てきた。

身長はモカぐらい……ということは僕よりちょっと下だ。

ドレスを着ており、腰にはナイフらしき物——最近読んだ漫画に載っていたサバイバルナイフが差されている。

そして……髪が赤い。それがストレートで腰まであった。

穏やかそうな面影だが、その赤い髪だけは……現実味がない。

そして顔は……機械のような印象を受ける。

アニメか？これは。

僕は突っ込みそうになったが、ぐっと堪えて笑顔を作った。

「何の御用ですか？」

少女は微笑を浮かべて言う。——機械的な笑みだな。

「僕は溝口零。服部先生に言われて迎えに来ました。」

「……お父様が？その証は？」

「えっと……Merlin-100。」

僕は小声で先生に言われた言葉を囁いた。

「——承知しました。ついて行きます。」

少女は頷いて尚も機械的に言った。よし、首尾よく言った。

「名前は？」

「ありません。ですが、源治郎様から蓮^{れん}という名を頂きました。」

「——どういことだ？」

ひとまず、うちに連れていくか。

「行こうか。蓮。」「はい。」
僕は彼女の手を引いてタクシーに乗り込んだ。

明太子のキススル？

僕は家に帰ると、蓮を家に上げた。

恵さんや小夜が出迎えてくれる。

「お邪魔します……。」

蓮は丁寧にそう言うのと、靴までそろえてから家に入った。

あとに続きながら僕は言った。

「小夜、申し訳ないけど……。」

「お茶ね。分かっているわ。」

出迎えてくれた小夜はコクンと頷いた。

僕は蓮の手を引いて居間に案内した。

「ようこそ、溝口家へ。」

僕はそう言うとりあえず微笑んだ。

コミュニケーションにおいて、スマイルは大事だぜ？

「詳しいことは服部……源治郎さんから君に聞けと言われているけど。」

ちなみに、源治郎というのは先生の名前だ。

「承知しました。お話しします。」

蓮は咳払いをすると、機械的な目で僕を見た。

酷く、無感情な目だ。

「私は日本技研で開発された生物アンドロイド日本一号です。試験段階ということで一般家庭として研究員——源治郎様の奥様、一恵様のご家庭に派遣されました。源治郎様からは蓮という名を与えられ、私を服部家の娘として迎えてくださいました。」

「アンドロイド……？」

百合が信じられなさそうに言った。

ちなみに、一家全員集合している。

「聞いたことがあるな。ロシアの方で生物アンドロイドの開発が進んでいると。」

兄さんはぽつりと言った。そう言えば、吟もそんなことを言っていた。

「――まあ、服部先生が迎えに来るまでは君は溝口家の一員だ。気兼ねなくゆっくりしてくれ。」

「はい。」

機械的な口調。

何となく、寂しい感じがした。

僕は少し遅い夕食を取った。

皆、僕らが帰ってくるのを待っていてくれたらしい。

ああ、嬉しいな。

「生物アンドロイドっつーけどさ、普通に飯は食えるんだな。」

僕が指摘すると、蓮はコクンと頷いた。

「私は食事からエネルギーを取ります。」

「ふうん……。」

どういう仕組みなんだろうか。

ちなみに、献立は肉じゃがに明太子ご飯である。

「具体的には何から取っているの？炭水化物？」

百合が興味津々に訊ねる。

「ブドウ糖、アミノ酸から専ら取っております。」

蓮は淡々と言いながら、肉じゃがを口に運ぶ。

本当に機械的だな……機械だから当たり前なのか？

「ふんふん。」百合はどこから出したメモに何かを書き込んでいる。

「何だ？百合はそういう研究所に行きたいのか？」

「んー、そうだね。こういうアンドロイドを作れば孤児院の子供達も寂しくなくなるのかな……って。」

百合は少し笑うと、メモを乱雑に取った。

「ごちそうさま。」

モカは感情のこもらない言葉で言うと、席を立った。

そして、階段の昇る音がした。

どうしたんだ……？

「零、行ってこいや。」

兄さんは悟っていたようだ。コクンと頷いて言った。

僕は二階に上がってモカの部屋をコンコンとノックした。

「モカ？入って良いか？」

「――反応はない。」

「入るぞー。」

僕はそういうと、ドアを開けて中に入った。

部屋の中は暗かった。

ベッドの布団が微かに膨らんでいる。

僕はそこを避けてベッドに腰掛けた。

「――大丈夫か？」

「……大丈夫ですよ。心配しなくてもいいです。」

いつもの強気……だが、弱々しい声。

僕は布団の中に手を滑り込ませた。

こっちが枕だから……大体このあたりか。

僕はそう推定しながら、ぎゅっと彼女の手を握った。

「……何で……そんなに優しくするんですか……っ？」

軽く嗚咽が混ざってくる。

「家族、だから。みんなにも言っているよな？」

僕はそういうと、モカは手を握り返してきた。

温かくも、小さい手。

保護施設にいた……ずっと孤独だった子の手。

それには訳があるに違いない。

それを知るにはその言葉^{弾丸}を放つしかない。

だが……彼女の胸を抉ってしまうかも知れない。

それでも……。

「——カージャック、か？」

僕はあえてその引き金トリガーを引いた。

案の定、彼女の手がピクリ、と反応した。

「……………」

「……言いたくなければ言わなくていいさ。だけど、分かち合えることがあるなら分かり合おうよ。」

僕はそういいながら優しく彼女の手を握りしめた。

「……ジャック……ハイジャック………今から七年前の……。」

彼女はぼそつと呟いた。

その事件は覚えがある。

福岡から東京に飛ぶ飛行機にテロリストが侵入し、ハイジャックされた。

犯行グループの要求は、三億円。

要求を呑まなければ飛行機を東京のどこかに落とす。

という非常に悪質な物だった。

だが、事件はあつけない幕切れであった。

中に居合わせていた警察官が命がけで取り押さえて事なきを得たのだ。

その警察官は銃弾を三発胸に受け、出血多量で死亡。

——まさか。

「お父さんがその飛行機に乗り合わせた警察官で——銃弾を受けて死んでしまったのです。」

モカが淡々と言った。そして付け加えるようにおかしそうに言った。

「それで……遺品が明太子だったんですね。何でしょう、馬鹿みたいですよね……。」

——今日の夕食か。

「そうか。」

僕はそれだけ言って軽く彼女の手を握りしめた。途端に彼女の声

が震えた。

「母親は離婚して行方知れず……肉親は、お父さんだけだったのに……。」

僕は黙って彼女の頭を撫でた。

そうすることしか……出来なかった。

「……僕には、聞くことしか出来ない。モカの肉親になることは世界の理が、メンデルの法則がさせてくれない。だけど……家族、だよな？」

僕はそう言いながら軽く自己嫌悪した。

何でこんな言葉しか言えないのだろうか。

「——悪い、うまく言えないんだが……家族だから……僕の胸で泣いてもいいじゃないか。」

僕の言葉に驚いたようにモカは顔を上げた。

涙が輝いているように見える。

「——卑怯です。零は。そんな優しい言葉で私を拐かすなんて……っ！」

モカは僕の胸に飛び込んでぼかぼかと叩いた。

「——最悪の男だよな。」

僕は彼女にキスをして言った。

明太子の風味がまだ、残っていた。

それが切っ掛けになったのだろうか。

モカは僕の胸の中で大声で泣いた。

悲しみという呪縛から、ジャックというトラウマという海から初めて顔を出して息を吸ったように。

アンドロイドとキススル？

僕は蓮と並んで皿を洗っていた。

「わりいな。手伝わせちゃって。」

「いえ、源治郎様のお宅ではいつもやらされております。」

蓮は淡々と言いながら機械並みの正確さで皿をスポンジで次々と擦りながら言った。

「何でそんな淡々としているんだ？」

僕は蓮の洗った皿を水で流して、食器乾燥機の中に入れてながら訊ねた。

「アンドロイドですから。」

蓮は作業を進めながら言った。

「でも、アンドロイドが感情を持たないという理はないと思うけど。」

僕が言うと、蓮は一瞬作業の手を止めた。

だが、次の瞬間にはまた淡々と皿を洗っていた。

「感情が何か私は知りません。」

「——そうか。」

僕はふう、とため息をついた。

僕らは作業を終えると、居間に戻った。

「——はあ。」

僕は再度ため息をついた。

兄さんがソファで寝ていた。

小夜か誰かが毛布でも掛けたようだが、それを見事に跳ね飛ばしていた。

「ボデ——」。――

僕は助走をつけて飛んだ。

「ブローツ——！」

ズドンッ！

「ごふっ！？」

兄さんは腹に飛び膝蹴りを喰らってソファから滑り落ち身もだえした。

「そ、それが実の兄にする仕打ちかッ！」

じたばたと転げ回りながら兄さんは叫んだ。

「ここで布団を蹴り飛ばしながら寝ている方が悪い。」

僕は兄さんの寝ていたソファにどっかりと座って言った。

「そりゃ、まさしく布団が吹っ飛んだんだな！ハッハッハ！」

「そんな洒落は止めなしゃれ、なんて言うと思うか！このクソ兄貴！」

「ごふっ！」

踵落としが再び兄の腹に炸裂した。

そんな様子を少し笑いながら蓮は向かいのソファに腰を下ろした。

「——え？」

今……。

僕と兄さんは同時に顔を見合わせると、バツと蓮の方を見て彼女の顔を凝視した。

「——蓮？今、笑った？」

彼女は無表情だったが、頬を手で押さえた。

「——今、お二方の話を聞いていたら表情の筋肉がつり上がって——。」

「兄さん。」

「あ、おう……屋根がないって。いやーねー。」

兄さんが駄洒落を発した瞬間、蓮はふ、と顔を綻ばせた。

そして、彼女はパツと頬を押さえた。

「今……私……。」

「蓮ちゃん、今思った感情が『おかしい』って奴だ。」

兄さんは微笑みながら言った。と、何かを探すように辺りに視線を彷徨わせた。そして口を開く。

「あれ？ みかんが見つかんねえ。」

ぷっ、と蓮が小さく吹き出した。その隙につけ込んで僕は追撃を放った。

「ああ、アルミ缶の上にあるみかんだよ。」

ぷーっ、と勢いよく蓮は吹き出した。

「あはははっ！ 面白いっ！ あはははははははっ！」

そして、大声で腹を抱えて笑い出した。

その様子を見ながら僕と兄さんはハイタッチを交わした。

彼女が落ち着いたところでとりあえず、今日は寝ようということになった。

蓮は寝る前に嬉しそうに、おやすみ、と言った。

「いや、悪かったな。預けちゃってよ。」

服部先生は早朝、僕の家に来た。

「いえ、大丈夫だったんですか？」

「ああ、爆処理の人が安全に解体してくれたよ。この件は内密にしろ、とな。」

先生は呵々と笑いながら、僕に封筒を渡した。

「これは礼だ。」

「どうも。お茶でもいかがですか？」

僕はそれを懐にしまいながら、先生に訊ねた。

「いや、いい。蓮は？」

「呼んできますね。先生が来た時、呼びに行きましたがまだ寝ていましたので。」

「ん……おかしいな。あいつはいつも呼んだらすぐに目を覚ますのに。」

「へえ。」

僕は不思議に思いながら二階に上がって雪の部屋——蓮のある部屋に行った。

コンコン、とノックする。

「蓮？」

——反応なし。

「入るぞ。」

僕がそう言って入ると、蓮は雪のベッドで寝ていた。

寝顔が可愛い。

無表情……っつー訳でもない中途半端な顔だ。

「可愛いな。」

僕は思わず呟いた。

機械的な少女がこんな笑いを浮かべていると、可愛いと思ってしまふ。

と、少女の頬が少し上気した。

「——蓮、起きているだろ。」

「……はい。」

蓮は少し申し訳なさそうな表情になると起きあがった。

「随分、表情が豊かになったんだな。」

「^{はじめ}一様が昨日、部屋を訊ねてきてどんな表情、気持ちがどうい言う言葉なのか教えてくださいました。また、ここの部屋の書物を少し拝見致しまして。」

——兄さん、夜遅くに女子の部屋で何を……。

僕は視線を走らせると、カラーボックスに入った雪の少女漫画が目に入った。

「なるほどな。面白かったか？」

「はい。」

少女は笑みを浮かべてこくりと頷いた。まだぎこちないが。

「そうか。頑張れよ。僕も出来るだけ協力するから。」
僕が笑って蓮の頭をぽんぽんと撫でた。

「……っといけない。先生が待っているんだ。行こう。」

僕は思い出して言うと、蓮の手を引いて階下に降りた。

「連れてきました。先生。」

「ああ、世話になったな。じゃあ、蓮、帰るぞ。」

先生は頷くと、踵を返した。

「イヤです。」

「は？」

先生は振り返って怪訝そうな顔をした。

その声は紛れもなく、蓮から発されていた。

「私は感情という物をこの人達から教わりました。それについて、これからも知っていききたいのです。ですから、私をここに置かせて頂けませんか？」

蓮はすらすらと言うと、僕の方を向いてそう願ひ出た。

「や……うちは別段、構わないけどさ……。」

僕はそう言いながらちらっと先生の方を見た。

「承伏は出来ないな。」

服部先生は腕を組んで言った。

「ここは資料によれば親は出張で度々、家を空けるそうじゃないか。」

「……はい、今もそうです。」

「そうしたら平日の日中は留守だ。そんな危険な場所に一人、蓮を置くわけにはいかない。」

「保護者がいればいいんですね？」

背後で声が割り込んできた。

振り返ると、兄さんが僕の後ろに立っていた。

「初めまして。零の兄の一です。」

兄さんは微笑むと、名刺をぴしッと差し出した。

「今、とある理由で長期休暇中なので普段はここにいます。」

「それならば——うむ。」

先生は腕組みしていたが、こくんと頷いた。

「溝口、一ヶ月に一回はウチに蓮を連れてこい。いいな？」

「ええ、もちろんです。」

僕がにこやかに言うのと、先生は頼む、と言って出て行った。

「ありがとうございます。零さん、一さん。」

蓮は頭を下げて言った。

「いやいや、じっくり学習してくれ。——じゃ、俺は寝るから。」

兄さんはそう言うのと、欠伸をしながら部屋に上がっていった。

「さん付けなんていらねえよ。零で良い。よろしくな。蓮も溝口家の一員だ。」

僕が笑いながらそう言うのと、蓮はコクンと頷いた。

「じゃあ、御礼に——。」

彼女は目を瞑ると顔を近づけて——。

「ちょい待ち。」

僕は蓮を制止した。

「今、何をやろうとした？」

「キスと呼ばれる動作です。親愛や感謝の証拠にする物だと漫画には書かれていました。」

「漫画を鵜呑みにしちゃダメ。」

僕は苦笑しながら言った。

「じゃあ、飯を作ろうか。」

「はい。——あと、質問があるのですが？」

「ん？」

僕は台所に行きながら首だけ振り返った。蓮は至極真面目な顔で、ただどこか視線を逸らしているような感じで言った。

「零を見ていると……胸が疼く………というか、幸せなのに苦しい

というか……変な気持ちになるのです。この気持ちは、何というのでしょうか？」

——あの、どう答えたらいいのですか？

アンドロイドとキススル？（後書き）

ハヤブサです。

もう師走と東京では寒い気候が続きます。

試験一週間前でよく小説を書けるな、と友人に飽きられています。しかし、試験という人間の物差しで測られるのは嫌いですからねー。

さて、新しい登場人物、蓮が登場しました。

生物アンドロイド……となかなか近未来的な存在ですが。

赤い髪の毛というアニメっぽいですね。まあ、日本だったらやりかねません。

それで、その少女は感情を知らないのですが、駄洒落と漫画を切っ掛けに感情を覚えていきます。

そして、零に『胸の疼き』を訴えます。

あーあ、零君、またやらかしてしまいました。

って所でして。

まあ、元々、そういうシナリオでしたけど、改めて書いてみると苦笑しますね。

さて、人気投票してみたいと思いますね。

今までの感想では、雪が首位を占めていましたが……新しい登場人物、恵、蓮が加わってどうなることやら。

その辺、含めまして感想をよろしくお願いします！！

バイトでキススル？（前書き）

キスしているのは最初だけなんですけどね……。。

バイトでキススル？

「いやー、何で休日まで出勤しなきゃいけないかねー。」

岩崎先生は文句を言いながらテストを束ねてホチキスで留めた。

「ん、とりあえず、これでお前も進級だ。」

「ありがとうございます。」

僕は礼をすると、教室を出た。

今は三月、卒業のシーズンである。現に三日後、卒業式である。

しかし、三十一日が卒業式ってねえ……。

とにかく、僕は公欠続きでテストもサボっていたため、進級が危うくなっていたのだ。

そこで学校側が追試もどきを用意した、という訳なのだ。

まあ、天皇の申請で公欠だから救済措置を執らないと政府から見放されるだろうけど。

僕は校門を出ると、蓮がいるのに気づいた。

「おう、蓮。」

僕が手を挙げて挨拶をすると、彼女はコクンと頷いた。

「どうしたんだ？」

「これから源治郎様とお買い物でございます。」

「そうか。駅前辺り？」

「はい。」

「ふうん、買い物……はいいけど買うなら魚物や貝物^{かいもの}は止してくれよ。」

僕は駄洒落を交えて言うと、ぷつと蓮は小さく吹き出した。

「え……ええ、分かりました。ではまた。」

「ああ。」

僕は蓮と別れると、家に帰らず駅を目指した。

「あ、零。遅いわよ。」

駅前にいたのは恵さんだった。

「女の子を待たせちゃいけないって言われなかった？」

「わりいわりい、じゃあ行くか。」

僕は苦笑しながら言うと、恵さんは僕の手を握った。

「この方が恋人っぽいでしょ？」

「はいはい。」

「ついでにほら。」

ふわっと柔らかい感触が頬に触れた。

僕は再び苦笑した。

僕らは再び、池袋に来た。

休日なのでわいやわいやと賑わっている。

僕らは乙女ロードを歩いていくと、見知った店——メイドカフェに着いた。

——と言っても僕はまだ一回しか来たことがないけど。

今回は平田事務所には用はない。その下に用がある。

そう、僕はここにバイトをしに来たのだ。

三日前。父さんから電話が掛かってきた。

「え、仕送りがきつい？」

『ああ、ちよつといろいろあつてな。』

父さんは疲れたような声で言った。

「そう言えば、母さん、最近、帰ってこないね。どうしたの？」

モカが脇で言うのと、電話の向こうでゴホゴホと咳き込む声が聞こえた。

『あ、ああ、その件も含めて帰国したら話そう。それより、今月はきつい。もしかしたら来月も……。』

「げ。来月もかよ。」

僕はげんなりしながら言った。

コツコツ貯めているから個人的な金と家の貯金で一月程度なら優に過ごせる。だが、二月は……。

『すまん。バイトでも何でもして良いから持ちこたえてくれ。』

「ったく……しゃーねーなあ……。貸しだぞ。親父。」

『ああ。すまん。』

「で、雪とシャルは？」

『彼女らは今、孤児院の子と遊んでいるよ。また機会があったら電話させよう。じゃあな。』

「あ、おう……。」

という顛末であつた。全く。

「やつほー！ 店長！ バイト要員を連れてきたよー！」

恵さんがバンツと扉を開けながら叫んだ。

「あ、恵ちゃん、連れてきてくれたのね？ あら、男前ね。」

奥から出てきたのはメイド服を着た女性である。

落ち着いた感じだが、見た目は若々しい。

「じゃ、早速お手並みを拝見しましょうか。」

「……え？」

「料理が出来るって聞いていたから。厨房に入った入った。」

「え？ えっと……何をすればいいんですか？」

「中に美奈ちゃんがいるから彼女に聞いて！」

女性に厨房の中に連れ込まれた。

「美奈ちゃん！ 新入り！ ……えっと、名前は？」

「あ、零です。溝口零。」

「だって！ あとよろしくー！！」

女性は慌ただしくそう言うと、ドタバタと外に表にまた出た。

「零君ね？ 私は図師^{ずしみな}美奈。美奈先輩って呼んでね。」

奥にいたのは大学生って感じを出した女性だった。三つ編みの茶髪的眼鏡でメイド服。つぶらな瞳が印象的だ。

「あ、はい、美奈先輩、よろしくお願いします。それで、僕は何をすれば？」

「んっとね、アドリブでいいから料理を作って。メニューはこれだから。」

美奈先輩は僕にメニューと食材一覧を渡した。

「てか、アドリブって……。」

「急に人が辞めちゃったりするから……。ま、少ない食材なら比較的同じように作れるでしょ？」

ん？メニューは、カレーにサンドウィッチ、オムライス、焼きそば、ピザ、その他の飲み物。

食材の方はパックのカレーに食パンにレタス、ハム、業務用焼きそば、麺、卵、冷凍ピザ——調味料は醤油やケチャップから、ガラムマサラやサフランまで多彩にある。

「意外といけそうですね。」

僕は言いながら調味料を確認した。

「私はサンドウィッチとか飲み物をやるから、大きな食事はそっち担当ね。」

美奈先輩はそう言うと同時に、オーダーが入った。

「4番さんからカレー二つにピザ一つ、珈琲が二つです。」
げ、初っ端からかよ……。

「すごいね！ 新人君！」

店が終わると、店長は僕の背中を叩いた。

「前よりもすごい味がよくなったって感想が多くてね。」
オーダーを取っていた少女が微笑みながら言った。

「え……そんな前の人は工夫していなかったんですか？」

僕はレトルトのカレーを加熱して胡椒やガラムマサラで味を調えるなどの一手間を加えたただけだ。

「その才能が羨ましいよ……。」

男っぽいメイドさんが羨望の眼差しを僕に向けて言った。

店長は微笑みながら僕に言った。

「とにかく、君は新規雇用ね！後で書類を書いて貰うけど——名前前は？」

「さっきも聞きましたよね？僕の名前は、溝口零です。よろしくお願ひします。」

僕は苦笑して答えた。

こうして僕のバイト先が決まったのだ。

劇でキススル？

「――はあ。」

僕は深くため息をついた。

「何でこんな雑用を……。」

「仕方ないでしょう？」

モカが僕を手伝いながら言った。

「後半、零の出席日数、及び成績はギリギリなんですから。」

「だよなあ――はあ。」

僕は卒業式で使う花束をこっそりと運びながら言った。

てか、花のクセに重いな……。

それを台車に乗せると、体育館に運んでいく。

今、体育館では卒業式が執り行われている。

部活で世話になった先輩も今日、卒業だ。

部活の方は本来出てこない先輩までに手伝って貰って……。頭が上がないな。

「おお、溝口、やっとか。次は花吹雪を持ってきてくれ。」

体育館に着くと、服部先生はそれを片手で全て持ち上げながら言った。

「はいはい……。」「

ひでえ扱いようだ。」

僕は花吹雪セットを体育館に運んでくると、何やら先生達が話しか合っていた。

「あ、溝口君、良かった。君は文学部だよね？」

先生の一人が気づいて僕に尋ねた。

「え、ええ。」

僕は花吹雪セットを先生に渡しながら

「急いで体育館裏口から入って。」

初老の先生がそう言うのと、僕とモカの腕を掴んで駆けだした。

「え？」

モカと目を合わせたが、彼女もきょとんとしている。

されるがままに僕らは裏口から体育館の中に入ると、文学部の副顧問の田中先生がいた。

「あ、溝口君！助かりました。」

田中先生はほっとしたように言うのと、僕とモカに原稿用紙の束を押しつけた。

「これは……卒業式の劇の台本……ですよね？」

モカはその表紙を見て言った。確かに『コイザクラサケ』という卒業式でやる劇の題名がその原稿用紙のタイトルには書かれている。ぱらぱらと捲ると、僕ら部員の文字がチラホラ出てきた。赤線で訂正がかなり入っている。

「主役の山内さんと竹永君が休んじゃって……。台本もないから原本です。」

田中先生はもじもじと身体をくねらせながら言った。

何だ……この人は……。

「つつーことは、僕らがやれってことですよね？」

僕は半眼になって呆れながら言った。

「ええ、今、主役とヒロインは他の人が代役をやったりとかスモッグの中でごまかしたりしていたけど……ラストばかりは……。」

僕は先生の話聞きながらバツと台本を斜め読みした。

この話は財閥の娘と普通の少年の話。

ある学校で二人は出会い、ひょんなことで恋に落ちる。

だが、彼女の親はそれを許さない。だが、大人の器の大きさと言わんばかりに卒業式までは交際を認めるとほざいた。

すなわち、期間はそれまで……。

少年は少女と出来るだけ長く時を過ごす。だが、時は無情に過ぎていく。

そんなとき、少女の兄……そして、少年の先輩でもある男が父

親に掛け合った。

妹のために、自ら将来を賭けて。

そもそも、妹に自由が行かないのは自分の成績不振のせい。責任を感じていたようだ。

跡継ぎとして大成することと妹の交際を自由を引き替えに取引が行われる。

——というのが、今、やっているシーンである。

「あと、少しです！」

「分かりました。」

僕は台本をもう一度見直すと、先生に渡した。

モカも原稿を渡すと、僕にコクンと頷いた。

舞台は卒業式の校門。校門の外ではない。すなわち学校敷地内だ。セツトは細かく出来ており、うちの学校の校門が細かく作られている。

係の人が僕らに卒業証書の筒を渡すと、出ろ、と合図した。

僕は深呼吸するとモカに微笑んでスポットライトの外に出た。そしてゆっくりと観客の方に闊歩していく。一拍遅れて、モカが出てくる。

卒業式だから制服のままでいい。衣装は安上がり。

「——ここから出たら、私達の関係も……終わりなのね。」

モカはいかにも悲しそうな声で言った。僕は振り返って彼女を見た。

「ああ……そうだな。」

僕は淡々とそう言った。まあ、台本に書かれている通りだな。暫し、沈黙。

「何で……親の言いなりにならなきゃいけないのかな？」

モカは空を仰いで言った。その目から涙がこぼれる。

おお、演技がうまいな——てか、さっき後ろで何かやっていたのはもしかして目薬？

「何でだろうな。」

僕は顔を逸らして言った。

で、ここで少女役は涙ながら二三歩出て観客に向かって「お父さんのバカ野郎……っ!!」って叫ぶはず……。

なのに。

モカは視線を彷徨わせていた。
ど忘れか。

僕はアドリブで助け船を出すことにした。

「なあ、やっぱり親の言いなりになる必要はないんじゃないのか？」
モカの顔に驚愕が走り、焦りが浮かんだが僕のアイコンタクトで状況を察したようだ。

少し迷うような素振りをした後、僕を強い眼差しで見た。

「それもいいけど……お兄様にも迷惑を掛けるわけにはいかないの。」

「だよな……。」

僕はずっと視線を上空に外した。

その顔に浮かべるのは失望。だが、内心ガッツポーズを決めていた。

よくやった！自分！モカも！

よし、後は少女の兄役（少年の先輩）が来て話をまとめてくれるはず……。

兄役らしい人が舞台に上がろうとしているのが目の端に映った。

よしよし……！

だが、次の瞬間、その人が消えた。

ガタンッと一拍遅れて音が聞こえる。

何だ？どうしたんだ？僕はため息をつく素振りをしながらそつちを伺った。

すると、舞台裏からカンペが出た。

『アクシデント発生。時間を稼げ。』

マジか……。

僕は焦りながらも冗談を一つ飛ばしてみることにした。

「おうちに帰るまでが卒業式……なんてな。」

「でも……でもっ!」

芝居のかかったモカの演技。よし、うまいぞ。

「貴方の愛に一生出会えないのよ? そんな……瞬く間の時なんて……。」

「瞬く間を笑う奴は瞬く間に泣くぞ?」

僕はモカの頭を撫でながら笑顔を作って言った。

「サッカーのゲームだって瞬く間に決まる。野球の滑り込みも瞬く間、それでアウトかセーフか決まる。だからな、この時間を大切にしようぜ?」

「……うん!」

モカは涙を拭うような仕草を見ると、僕は手を差し出した。

まだか……? 僕は視線を舞台裏に走らせた。

だが、反応を示さない。

モカは僕の手を握った。そして彼女も舞台裏に視線を走らせる。

「……やっぱりダメ! 貴方と離れるなんて。」

モカはそう叫びながら僕の身体を抱きしめた。

「この感触をずっと感じていたい。君の暖かな心に触れていたい。そう思うのは僕も一緒だよ。」

僕はそう言葉を紡ぎながらぎゅっと彼女の身体を抱きしめ返した。そろそろ限界だぞ……早く……。

「お父様、これほど深い愛を切り裂くことは出来ますか?」

キター……! !

そうして歩いてきたのは……。

はい?

吟と……秋人？

まさかの登場人物に会場がどよめいた。

「う、うむ……そうだな……。」

秋人（少女の父役らしい。）は目を彷徨わせながら言った。

僕は彼女から離れると、秋人に向き合った。

「お父様、お願いします。僕らの交際を認めて下さい！」

秋人ははあ、とため息をつく僕に歩み寄った。

そして……。

ガッ！

顎の下に衝撃が走った。

意識が飛びそうになってかろうじて堪える。

秋人は拳を引っ込めながらふっと微笑んだ。

「合格、か。」

彼は踵を返すと、その場を去ろうとした。

「お、お父様！？」

モカが素っ頓狂な声を上げる。

「二度も言わせるな。合格だ。認めてやるよ。」

秋人はキザにそう言うのと、舞台裏に引っ込んだ。

「良かったな。」

吟がニヤニヤと笑って言った。——その笑い、何とかしろよ。

「ありがとう……お兄様……。」

モカはそう言うのと、僕に向かい合った。

「離れなくて、済むな。」

僕は原稿の最後に書かれていた一言を言った。

「ええ。」

モカは頷くと、僕に唇を寄せた。

僕は唇を重ね合わせると、静かに緞帳が下がり始めた。
終わった……。

てか、あの野郎、本気で殴りやがったな！？

劇でキススル？（後書き）

ハヤブサです。

皆様、メリークリスマスです。

何と！秋人様が帰ってこられました！

天皇陛下万歳！ちなみに昨日は天皇誕生日でしたね。

いよいよ、天皇陛下襲撃事件にピリウドが打たれようとしています。
吟詠は何を語り、そして零は何を知るか。

次回もお楽しみに！！

謎解きはキスの後で……スル？（前書き）

いや、しないでしょ。謎解きの前にキスなんて普通。
（タイトルにセルフ突っ込み）

謎解きはキスの後で……スル？

卒業式を終えて、舞台裏に僕らは集合した。

集まったのは僕、モカ、吟、秋人、服部先生、蓮である。蓮も来ていたのか。

「まったく、秋人、退院したならしたって言ってくれよ。」

僕は舞台裏でぶつくさと文句を言った。秋人は苦笑した。

「サプライズの方が驚くって吟君が言うもんだから。」

「そうそう。御芝居のせいであまりリアクションがなかったけどね。」

吟はニヤツと笑うと、その背後からいつも見る執事さんがいた。

「吟詠様。支度が完了しました。」

執事さんは礼をして言った。

「さすが、一流の執事殿。さて、検証を始めましょうか。」

吟はそう言いながら手袋をきゅっとはめた。

「え……検証って？」

僕が訊ねると、吟は少しはにかんで言った。

「秋人が襲撃された、あの事件だよ。その検証を行う。」

「さて、まずは結論から言いましょうか？」

吟は秋人が実際に立っていた場所に人形を置きながら言った。

「構わん。」

秋人は舞台裏でコクンと頷いた。

「犯人は執事さんですよね？」

吟は視線をさっきの執事に向けて言った。

「——は？ いやいや、冗談はほどほどにしてくれ。吟君。」

秋人は冗談だろ、という感じで笑い飛ばした。

だが、吟は至って真面目に検証を開始した。

「僕の考えでは執事さんが第一容疑者だ。証拠もあるが、それは後

で見せよう。まずは皆さんが気になっている秋人に危害を加え、忽然と姿を消した凶器の謎から。」

吟は一呼吸置くと説明を始めた。

「秋人が殴られたと思われる時間のすぐ後に窓が割れる音がした。これからすると、犯人は疾駆して秋人を殴った後に凶器を放り投げた、と考えられる。だが、そんなことをしたら川に凶器が発見される。だが、発見されなかった。その理由が分かったのはだね。その川でその時間に異例の放水があったんだ。ダムのだ。」

「じゃ、流されたっていうんですか？鈍器が？」

モカが訊ねた。信じられないと言わんばかりに。

「確かに、鈍器が流れるとは考えづらいね。だけど、浮きがついていたら？」

吟はクスクスと笑いながら言った。しかし、モカは怪訝そうな顔のままだ。

「そんな浮きがついていて、殴り飛ばせますか？」

「ああ、それならね、多分、平成時代に作られた車に採用された物を用いれば簡単だ。」

「――エアバッグか。」

服部先生が低い声を漏らした。コクンと吟は頷く。

「吟を殴り飛ばした衝撃でそれが開けば良い訳だ。」

「でもそれではガラスでそれが破れてしまいますよ？」

「実は。」

モカの疑問に吟は頷きながら答えた。

「ガラスは元々破られていた。あの音はスピーカーの物だ。」

「え？何でそんなことまで……。」

僕が言いかけて気づいた。

「あの近所の人から借りた集音データか。」

「そ。川の生態系を研究するために取られた音に一部始終が入っていた。これらを踏まえると犯人は秋人を殴り倒して零達の脇を駆け抜けて割れていた窓に放り投げた……と考えられがちだが違う。そ

もそもこの方法はリスクが大きすぎる。だから犯人はこれを使った。」

吟はそう言うのと、舞台の上を指さした。

舞台の上のスポットライトや鉄骨などがある場所に場違いなボーリングの球があった。

そしてその球から糸が伸びて鉄骨の一つに結びついていていた。

「鉄骨を固定しているのは輪ゴムだ。あとは流れでやってみよう。」

吟はそう言うのと、脇に引っ込んだ。

「まず犯人は秋人が壇上で演説を始めたことを確認すると、吟の傍にある電気の装置に輪ゴムを放った。うまくやるのは難しいからプロフェッショナルを呼んだ。」

僕は視線をそっちに向けると、雪が立っていた。

「え？雪？」

「久しぶり、レイちゃん。」

彼女は小さく微笑むと、真剣な顔に戻って輪ゴムを輪ゴム鉄砲の要領で放った。

それはひゅんっと飛んで見事、舞台にあった照明装置に引っ付けた。

あの夜、停電直前に飛んできた橙色の存在を僕は思い出した。

そしてそれを引くと同時に体育館全ての照明が落ちた。

「な！？バカな！」

服部先生はそんな声を漏らした。

「あれはスポットライトだけの照明だぞ？照明が全て落ちるなんて……。」

「ブレーカーが落ちる現象は知っていますよね？先生。」

吟の一言で先生は何か悟ったようだ。

「まさか、暖房とかいろいろ電気を使ってブレーカーを落とす寸前までに……。」

「その通り。で、この会場は停電になると次のブレーカーが上がった時——あげたのは平田の用心棒さんだったが——照明が着く

のは会場電源だけなんだよ。だけど、舞台の電気は点かない。そのことをカバーしたのが零、君だ。」

「なるほど。僕にレバーを上げさせてってか。」

僕は苦笑して言う、吟は頷いた。

「さて、ここからだ。」

吟の声は緊張を孕んだ。彼の右手にはスタンガンのような物があった。

「これは強烈な電気を流せるように細工した物だ。そしてそれがその停電間際まで電気を消費していた物だ。恐らく、これは電気が途絶えた時に溜まった電気が一気に流れるように細工されていたのだろう。」

「それはどこで？」

秋人の声に吟は笑って言った。

「会場脇にあった金属ゴミの中に分解されて紛れていた。これは証拠になり得ないがね。まあ、これで電気が鉄骨に流れると……。」

吟が近くの鉄骨にそいつを置くと静かに電気が鉄骨に流れた。

そしてすぐに鉄骨にくっついていたボーリングの球が離れた。

それは物凄い勢いで人形の場所に向かい……。

殴り飛ばした。

その瞬間にボンッと球の何かが爆ぜた。エアバッグ、のようだ。

そのまま振り子のように球は跳ね上がる。その途中で糸が何故か切れた。

そして、体育館の開いた窓から外へと飛び出た。

同時に体育館のスピーカーからガシャーンというガラスが割れる音がした。

「高圧電流で球を鉄骨にくっつけていた輪ゴムが切れ、球が放たれる。そして人形を倒してそれと同時にエアバッグ作動。そして中程に持ち上がると今度は高圧電流が少し強く巻かれていた二つ目の輪ゴム——これは振り子の支点となったヒモをくくりつけていた奴——それを焼いてヒモが切れる。それで飛んだ訳だ。精密に電

流を溜めておけばこれは造作もないトリック。」

「なるほど、それなら筋が通るな。」

秋人は穏やかに言った。だが、その声の裏にはいらだちが含まれている。

「何故、私の執事——渡辺文夫が犯人なんだね？」

「さて、その結論に至ったのはこのデータ——近所の人の提供の集音データでしてね。この人は素晴らしいことに他の場所でも集音していたんですね。いや研究熱心で。そのうち一つです。」

吟詠はそう言いながらパソコンを取り出した。

それからじゃぼじゃぼという水音と流れ始める。

不意にじゃぼんつという音がした。

そして車の扉が開くような音とウイイインツという物音が聞こえた。

その後はまた水音だけが残った。

「さて、今入った扉の開くような音とウイイインツという音……これは調べた結果、トミタ社の二酸化炭素車でしてね。」

僕は小首を傾げると、どこかであつという声が聞こえた。

舞台裏——雪か。

「どうした？雪。」

「覚えていないの？レイちゃん。秋人様が私達を出迎えにきたときに使っていた車って……。」

え？車って……あ。

「二酸化炭素車、か。」

「で、トミタ社に問い合わせた所、これには特別な免許が必要で日本内でその免許を持っているのはトミタ社の社員三人、北海道の研究所に二人、長野の富豪に一人。そして、執事さん、あんたの計七人だけだ。他の皆様方にはアリバイがあった。だけど、あんたは無い。それに腕につけた輪ゴム。それはここで発見された輪ゴムと一致している。」

吟はつかつかと執事さんに歩み寄ると、腕を掴んで言った。

執事さんの腕には輪ゴムがある。

確か、初めて会った時にも腕につけていたか。

「これだけ証拠があっても足りないか？」

吟がそう言うと、執事さんはフツとため息をついた。

「ご明察です。吟詠殿。よく推理なさいました。いろんな場所から揉み消したつもりでしたが。」

「その揉み消したのをロシアの権威で回収したんだよ。揉み消したお陰でわかりやすかった。」

吟がそう苦笑していると、秋人から怒号が飛んだ。

「何故、そんなことをしたんだ！渡辺！答えろ！」

「これは僕の推論だがね。」

吟はため息をつきながら言った。

「天皇家の人権を改正したくなかったんじゃないのかな？」

「え？」

秋人の目が丸くなった。

「君の言い分だと、小夜さんを零と結ばせるために法を改正させたかったんだよね？」

「あ、ああ。」

「だが、手を貸した後に調べたんだが……別に小夜さんは一般人とも結婚は出来る。」

「え？ 天皇家なのにな？」

僕は思わず訊ね返した。

「ああ、平成の時代のも一人の皇女が黒田という方と結婚して一般人となっている。」

「マジか……じゃあ、何で？」

僕は視線を秋人に向けて呟いた。

「これも推論だが……秋人、君は一般人に好きな人がいたんだろう？ 恐らく、雪さん。それを阻止するために渡辺さんは秋人に重傷を負わせた。」

「「え？」」

思わず声を漏らしたのは僕だけじゃなかった。雪もだ。

「ご明察、です。」

執事は微笑んで言った。

「君のことが空恐ろしく感じるよ。」

秋人ははあ、とため息をつくと携帯電話を取り出した。

まもなく、警察が来て天皇家に長く仕えた執事を連行した。

謎解きはキスの後で……スル？（後書き）

ハヤブサです。

新年、あけましておめでとうございます。

今年もキススル？をよろしくお願いします。

秋人襲撃事件も幕があり、また普通にグーダラ書いていきます。

どこか、キスして欲しいシチュレーション、募集中です。

出来れば、その時の人も合わせて。

どんどん感想、意見、お願いします！

※文章を大幅改訂しました。

赤福でキススル？

あの一件から数日。

僕らの周りは落ち着きを取り戻した。

秋人は表舞台に姿を現さなくなり、心配した小夜は帝聖城に戻った。

入れ替わりに帰ってきたのが雪だ。

吟の手配で帰ってきてくれたのだが……。

「へえ……レイちゃん？」

彼女は自室を見て引きつり笑いをしながら僕を見た。

「な、何？」

「何で、人の部屋に女を居座らせているの？」

ゴゴゴゴゴゴ、と正体不明の音がする。

やばいよー。僕の片隅で無責任な声がした。

「い、いやさ……それは成り行きって奴……？」

「へえ……そんな言葉で誤魔化そうって言うんだ。うふふ、レイちゃんったらお茶目。」

ごきばきぶちっ！

雪はポケットから何故か三十本まとまっていた割り箸を取り出すとそのような音を立てて潰した。

ま、マジっすか？

「……天誅♪」

「ひぎゃあああああああああああああ！」

この後、関節が本気で外れ掛かった。

この窮地を救ったのはその部屋で暮らしていた蓮だったりするの

だが。

「はあ……。」

まだ関節が痛い。（ちなみに肩のね。）

僕はバイト先で皿を洗いながらため息をついた。

「何、湿気った顔しているのよ。」

恵さんは僕を見て不機嫌な声を出した。

「ごめん。」

「あんたも忙しいのは分かるけどさ。平田組を引っ張っていくんだからしゃんとしなよ。」

「てか、あれは確定？」

僕が訊ねると、恵さんは微笑んだ。

「良いようにするわ。」

「……不吉な言葉にしか聞こえねー。」

僕はまたため息をついた。

「ほらほら、私を信じなさいって。」

彼女はそう言うのと、僕の頬に唇を押しつけた。

——まあ、信じるか。

僕はそう思うと残りの皿を片づけていった。

「お疲れ様でした。」

「お疲れ様ーっ！」

店長の明るい声を背に受けて僕と恵さんは店から出た。

「あ、零、来て。」

「ん？」

僕は恵さんに手を引かれて建物の外階段を昇っていく。

「組長さんかい？」

「うん、話があるって。」

ふむ、何の話だろう。縁談でなければいいのだが。

僕と恵さんは事務所に入った。

すると――。

「おいッ！動け！」「組長が帰って来る前に早く！」「おら！このCDを入れる！」「バカッ！こういう時はこれをぶっかけろ！」「おお、冷やすのか！」「直るかもな！」

「何やっているんですか！」

僕は盛大に突っ込んだ。

ヤクザ達は一斉に僕の方を向いた。

「あ、兄貴！」「助かったー！」「これを直してください、兄貴！」
「さむないと俺ら殺されます。」

僕は本日何度目かのため息をつきながら男達をかき分けてその機械を見た。

PCだ。ウイルス感染済み。

「あんたら、何をしていたんですか？」

「い、いや……。」「ちよっと動画を……。」「あの、女の子が……。」「裸になっている奴で……。」「無修正の……。」「

「あ、分かりました。もういいです。」

僕はため息をつく、PCに向かった。

そして傍らのデスクで埋もれていた説明書を奇跡的に発見するとそれに基づいて初期化を始める。

「おお！」「すげえ！」

――いや、常識でしょ。

ったく、この男達は。

「僕とて常識的なことしか出来ないんですから、こんなこと、もうしないで下さいよ？悪質なウイルスに引っ掛かったら直せませんし。」

「へいっ！」「分かりました！」「今度から修正あるのを見ます！」
ダメだ……。こいつら……。

数時間掛けて、僕は操作を済ませると余分に操作を加えて男達に

返した。

「あざっす！」「これで殺されずに済むぜ！」「兄貴！恩に着ます！」「あ、そうだ、兄貴！これをどうぞ！親戚が山ほど送ってきたんで！」

一人の男が俺に何かを差し出した。

黒い餅……否、あんこに包まれた餅だ。

赤福、である。

「へえ、粋な物持ってきているじゃない。ほら、零、あーん。」

恵さんはそう言うのと、それを手に取って僕の口に近づけた。

「え？ちよ……。」

僕は少し躊躇して言うのと、恵さんは怪訝そうな顔をした。

「みんながいるからって？そんな気にしなくて良いよ。」

あ、そうか。みんながいるんだ。

僕はここで彼女の彼氏でなければならぬ。

だが、イマイチ、踏み切れない。

「あ、じゃ、ご褒美にこうしてあげる♪」

そう言うのと、恵さんは口に赤福をパクリ。

くわえた。

「ん。」

え？マジっすか？

しかし、ここで断っても……。

僕は覚悟を決めると彼女の頭を手を添えてその赤福を口移しで食べさせて貰った。

「ん……。」

下で赤福を押し込むと同時に唾液も流し込む。

その顔は仄かに赤い。

僕らは唇を離すと、僕は赤福をもぐもぐと咀嚼した。

「——うん、うまいよ。」

「そう？良かった。」

えへへ、と柄でもなく照れる恵さん。

「すげえ……。」「あのお嬢が笑った……。」「萌え……。」「さすが兄貴。」「いや、大兄貴。」「いや、猛者だ。猛者兄貴だ。」「……………」

何故だか僕のランクが上がっている。

「おらー、帰ったぞー。」

と、低い声が事務所内に響いた。

「あ、お疲れ様っす！組長！」「組長！」「お疲れ様ッス！」「お嬢と兄貴が見えてやす！」

「ん？そうか。」

組長は頷くと、来い、と顎で合図して奥の部屋に入った。
僕らが続いて入る。

組長はどっかりと椅子に座って煙草を吸った。

「――で、恵、どうだ？暮らしは。」

「うん、快適。居候の子がいるんだけど、みんなと仲良くできているよ。」

「ほう。零、お前から見てこいつらは仲良くやっているのか？」

「ええ、みんなでわいわい焼きそばを作ったりとか。」

僕は咄嗟に昨日のことを思い出して言った。

この人だから具体例がないと納得しないだろう。

「そうか。それで、お前らと呼んだのはな。組員旅行にお前らを連れて行こうと思ってな。」

「あー、春の。」

恵さんが納得したように頷いた。

「組員ってのは、この組員全員ですか？」

僕が訊ねると、組長は鷹揚に頷いた。

「それと下のバイトの子だよ。」

恵さんは補足説明した。メイドカフェのか。

「いつもあの子達が男連中に囲まれるのも哀れだと思ってな。大体、

二、三人、組員が数少ない家族を連れてくるんだが、女の子が少ないんだよ。大体、組員が五十人だから女の子は十人くらいか。だからよ、お前らやその家族さんが来てくれると嬉しいと思ってだな。恵から聞いていたから十人くらいは枠を作っている。もちろん、旅費はこっち持ちだ。」

「じゃあ……考えておきますね。」

僕が言うと、組長は嬉しそうに頷いた。

「失礼します。——あ、そうだ。」

僕は振り返って訊ねた。

「家族ではないんですけど、すごい中のいい友達がいるんですけど……いいですか？」

言ってみて思うが、変な日本語だな。

「ああ、いいぞ。十人までならな。」

組長は嬉しそうに頷いた。

そうかそうか……じゃあ、あいつも連れて行くか。

赤福でキススル？（後書き）

ハヤブサです。

終わったらまたイベントです。

組員旅行。

何か不安が立ち込めますね……。

感想、お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7421q/>

キススル？

2012年1月10日01時52分発行